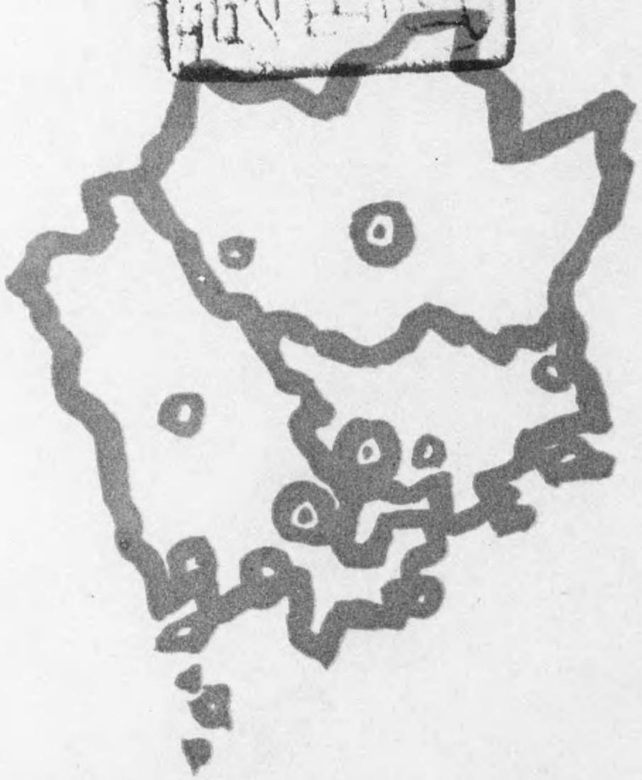
332
319

始

特206
271

第廿七回 會報

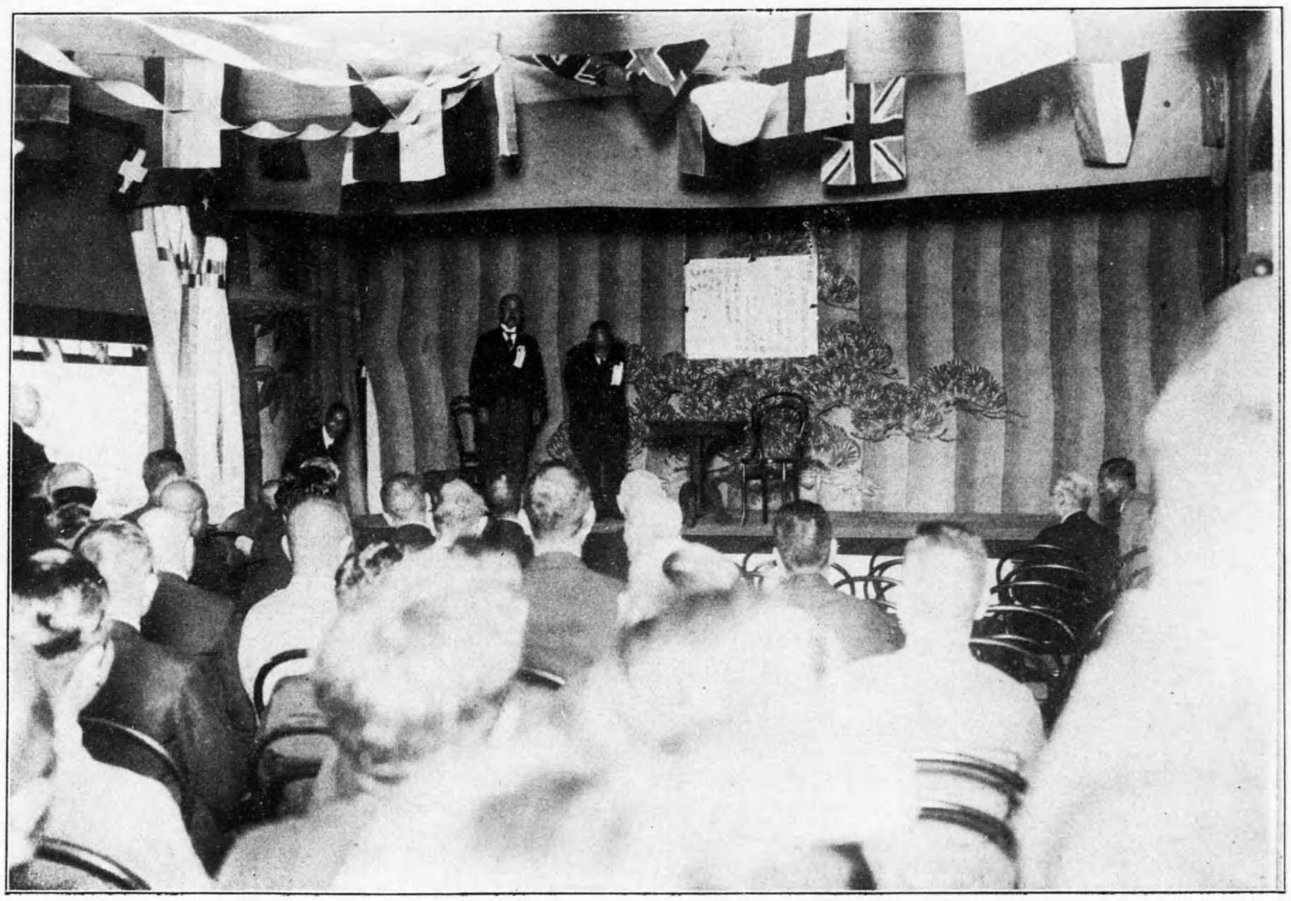


創立五十周年紀念號

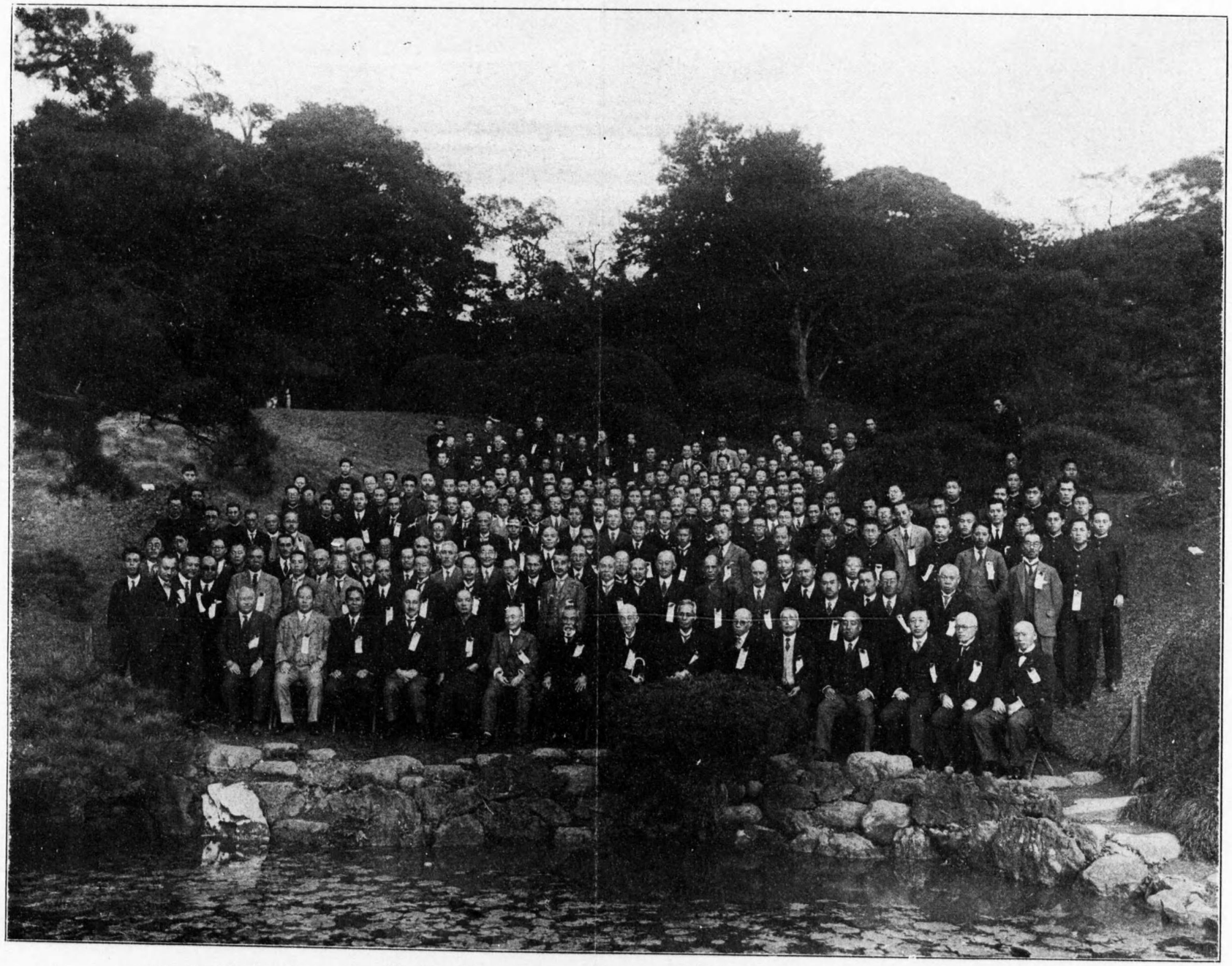
昭和五年十二月

昭和六

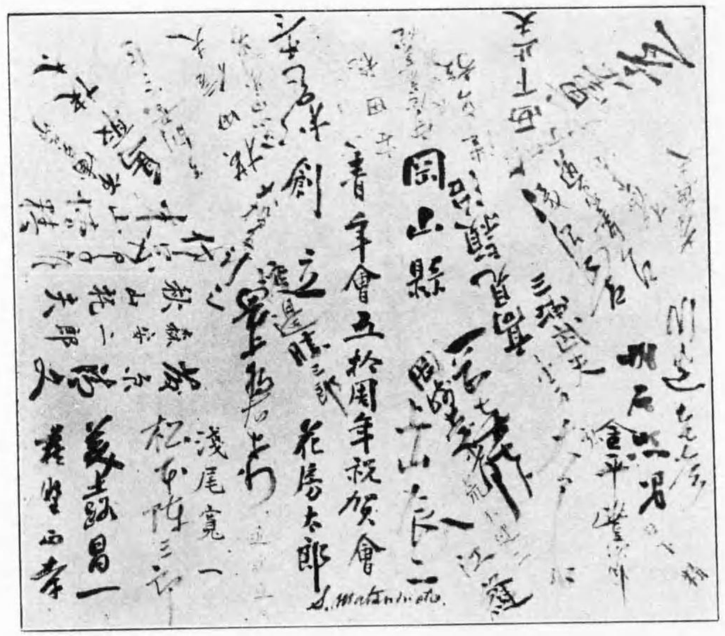
岡山縣青年會



本會五十周年記念祝賀會式場光景



岡山縣青年會五十周年記念祝賀會出席者（於小石川植物園）



(一其) 帳名署念記の者席出日當會賀祝年周十五

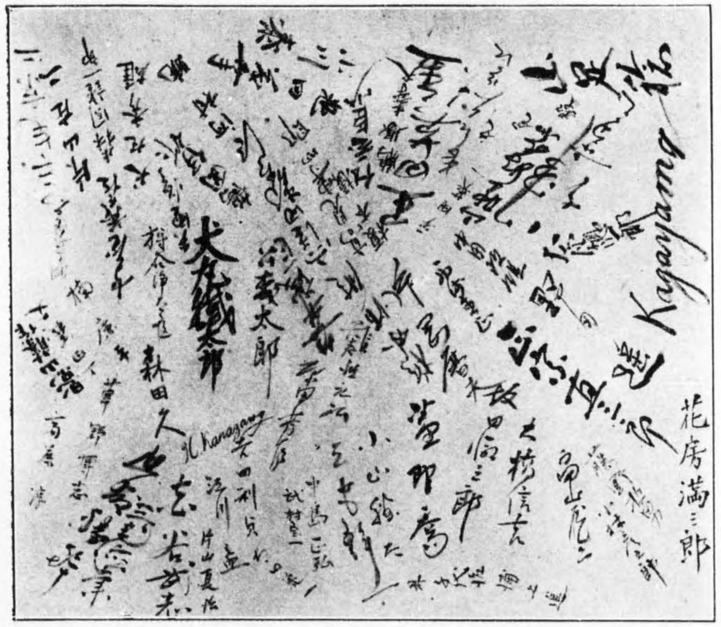
創立功勞者

花房義質氏

關新吾氏

小松原英太郎氏

花房直三郎氏



五十周年祝賀會當日出席者の記念署名帳（其二）

歷代會長(委員長)

花房直三郎氏

小原重哉氏

阪谷芳郎氏

小松原英太郎氏

木村清四郎氏

有松英義氏

平沼騏一郎氏

窪田靜太郎氏

現會長　花房太郎氏

平沼淑郎氏

青木鐵太郎氏

森木邦治郎氏

島田　平松市蔵　有松
浅　井

野田　蓮見宏二郎　加賀山茂　露木清　吉田豊　山本
茂野　万城目清　花房　角貫　日下
田中義男　藤田正己　近藤修三郎　中村四郎
安藤　武藤　金子鶴四郎
藤原正己　藤原正三郎　藤原
宇佐美　鶴崎敏　林文
鈴木三郎　美土路昌一　池田　吉村
木山　藤原義一郎　木山孝一郎
清水　藤原義一郎　宮田　木次
鈴木　住川藤三
太田　清水　藤原
藤原　藤原正孝

坂田勝三郎　大熊　信吉　信木　向之　鈴木　豊吉　原口　厳夫
西下正夫　曽山　厳次　鈴木　寛一
太田　牧　徳田　光樹
近藤　修明

本會役員及五十周年記念事業委員

岡山縣青年會會則

第一章　總則

第一條　本會ハ岡山縣青年會ト稱ス

第二條　本會ハ東京ニ居住スル岡山縣出身學生生徒ノ學術品行ヲ切瑳琢磨スルヲ以テ目的トシ且ツ同縣人相互ノ親睦ヲ圖ルモノトス

第三條　本會ノ事務所ハ必要ニ應シテ岡山其他ノ地ニ置ク支部ヲ設クルコトアルヘシ

第二章　會員

第四條　會員ヲ分チテ通常會員、特別會員ノ二種トス

第五條　通常會員ハ學生生徒タルモノトス特別會員ハ通常會員以外ニシテ通常會員ヲ扶掖指導スルモノトス

第七條　特別會員ハ會費トシテ毎年金參圓ヲ醵出スルモノトス

第八條　會員ノ入退會ハ理事會ニ於テ決定スル但通常會員ノ退會ハ幹事ニ申込ムヘシ

第九條　會員ニシテ住所不明ナルモノ特別會員ニシテ會費ヲ醵出セサルモノ及通常會員ニシテ數回總會又ハ組合會ニ出席セサルモノハ退會者ト見做スコトアルヘシ

第十條　通常會員ニシテ學業ヲ怠リ又ハ品行不正ニシテ忠告スルモ尚ホ改メサルトキハ之ヲ父兄ニ通告シ又ハ除名スルコトアルヘシ

第十一條　會員ニシテ住所ヲ移轉シタルトキハ直チニ本會事務所ニ通知スヘシ

第三章　役員

第十二條　本會ニ左ノ役員ヲ置ク
一、會長一名　一、理事七名以內　一、監事三名以內
一、評議員若干名　一、幹事若干名

第十三條　會長理事監事評議員ハ特別會員中ヨリ春季總會ニ於テ選擧シ幹事ハ各組合ニ於テ公選シ之ヲ春季總會ニ報告ス但各々其ノ任期ハ一ヶ年トス

第十四條　會長ハ本會ヲ總理ス理事ハ會務ヲ掌理シ會長事故アルトキハ之ヲ代理ス必要アルトキハソノ互選ヲ以テ常務理事若干名ヲ定ムルコトヲ得

第十五條　監事ハ會計ニ關スル會務ヲ監査ス

第十六條　評議員會ハ重要ナル會務ヲ詮議ス

第十七條　幹事ハ會長又ハ理事ノ指示ヲ享ケ會務ヲ分掌ス常務ヲ行フ爲メ常務幹事若干名ヲ互選スルモノトス

第四章　集會

第十八條　總會ハ毎年春秋二季ニ之ヲ開キ別ニ新年會ヲ開催ス又時宜ニヨリ臨時會ヲ開クコトアルヘシ

第十九條　通常會員ハ組合ヲ設ケテ之ニ分屬シ學術品行ヲ切瑳スルモノトス

第二十條　組合會ハ各組合ニ於テ適宜之ヲ開催スルモノトス

第五章　會計

第廿一條　本會ノ會計年度ハ毎年一月一日ヨリ起算シ十二月卅一日ニ終リ其ノ收支ヲ翌年ノ春季總會ニ報告スルモノトス

第廿二條　本會ノ經費ハ會費及寄附金等ヲ以テ支辨ス

第六章　附則

第廿三條　本會ハ毎年春季總會前ニ會報ヲ發行スルモノトス

第廿四條　本會則ノ變更ハ總會ニ於テ之ヲ行フモノトス

第廿五條　本會則ハ明和五年春季總會ヨリ之ヲ行フモノトス

‖目　次‖

一、表　紙……佃　政道氏
一、扉……同　氏
一、寫　眞……
本會五十周年記念祝賀會式場光景……一
同出席者、(於小石川植物園)……二
同出席者の記念署名帳(其ノ一)……三
同　(其ノ二)……四
一、本會會則……
一、卷頭言：會長子爵花房太郎……
一、本會沿革……
一、本會五十周年祝賀會の記……
一、祝賀會に於ける式辭及祝辭……
一、五十周年祝賀會に出席して、諸先輩の感想……
一、五十周年記念祝賀會收支決算報告……
一、五十周年記念祝賀會寄附金出醵者氏名……
一、假事務所日記から……
一、隨　想(次頁に目錄あり)……
一、遊學指針……
一、東京學校一覽……
一、帝都學園展望……
日本大學……一七六　一　日本醫科大學……一八一
創立功勞者……五
歷代會長(委員長)……六
本會役員及五十周年記念事業委員……七
法政大學……一八二
東洋大學……一八三
東京帝國大學……一八四
東京農業大學……一八六
東京工業大學……一八七
東京慈惠會醫科大學……一九〇
中央大學……一九〇
立教大學……一九二
早稻田大學……一九二
拓殖大學……一九七
慶應義塾大學……一九八
國學院大學……一九九
明治大學……一九九
專修大學……二〇一
東京高等工藝學校……二〇一
日本齒科醫學專門學校……二〇四
東京醫學專門學校……二〇六
昭和醫學專門學校……二〇八
東京藥學專門學校……二〇九
明治藥學專門學校……二〇九
二松學舍專門學校……二〇九
東京文理科大學……二一〇
東京高等師範學校……二一〇
東京物理學校……二一四
大東文化學院……二一五
東京外國語學校……二一五
東京高等蠶絲學校……二一七
千葉高等園藝學校……二一七
水產講習所……二一七
高千穗高等商業學校……二一八
青山學院……二一八
一、宿舍を尋ねて……二一〇
鶴山館……二一〇
兒島塾……二一一
岡山縣武學生養成會……二一二
備中館……二一四
精義塾……二一五
一、會館設立趣意書……二二〇
一、本會記事……二二二
一、昭和四年度會計報告……二五六
一、會員名簿……
特別會員……一　普通會員……
一、本會役員……

隨想目次

本山　荻舟氏……六五
山野　好悲氏……六五
淺井　啓行氏……六五
廣瀨　彦太氏……六六
谷　壽夫氏……六六
江見　節男氏……六七
佐藤　壽衛氏……六七
星島　二郎氏……六九
近松　秋江氏……六九
岡　千賀松氏……七〇
岸本　綾夫氏……七〇
明石　照男氏……七一
小橋藻三衛氏……七一
藤井　眞澄氏……七二
正富　汪洋氏……七二
治郎丸憲三氏……七二
入江　縫氏……七二
金平豐次郎氏……七三
守屋荒美雄氏……七六
馬場　恒吾氏……七六
阪谷　芳郎氏……七七
窪田靜太郎氏……七八
難波　元弘氏……八一
三宅　德業氏……八二
杉　琢磨氏……八三
龜高　德平氏……八三
小山善太郎氏……八四
江見　章夫氏……八六
速水　滉氏……八八
野田澤軍治氏……八八
坂田　芳衛氏……八九
林　癸未夫氏……八九
青木鐵太郎氏……九〇
花房　太郎氏……九〇
正宗直三郎氏……九一
鳥取　快太氏……九二
淺沼　龍吉氏……九二
今井田清德氏……九三
犬養　毅氏……九四
岡田　忠彥氏……九四
森原　元夫氏……九五
松崎　天民氏……九六
永井　秀太氏……九六
犬丸鐵太郎氏……九八
佐藤武三郎氏……九九
畠山　藏六氏……一〇〇
中塚一碧樓氏……一〇〇
矢野　恒太氏……一〇一
木村清四郎氏……一〇二
江見　水蔭氏……一〇四
鹽田　泰介氏……一〇四
廣瀨　基氏……一〇六
道家齊一郎氏……一〇七
龜山　孝一氏……一〇九
土師　清二氏……一〇九
公森　太郎氏……一一〇
早川　鐵冶氏……一一
工藤　壯平氏……一一
鶴岡　仟作氏……一一三
宇垣　一成氏……一一四
尾上　柴舟氏……一一六
昌谷　彰氏……一一七
武野　藤介氏……一一八
松枝　保二氏……一一九
太田　收氏……一二一
黑田　英雄氏……一二四
沼田　頼輔氏……一二四
小山　松吉氏……一二六
水谷　竹紫氏……一二七
山田　準氏……一三一
永井　潛氏……一三一
田村　剛氏……一三二
佐々木良一氏……一三三
田邊爲三郎氏……一三四
小川　義章氏……一三五
大橋　信吉氏……一三六
平賀　潤二氏……一三七
田中　寛一氏……一三七
野中　勝明氏……一三八
坂田愉三郎氏……一四〇
河村　董氏……一四一
次田　潤氏……一四一
小川郷太郎氏……一四二
岡　正一氏……一四二
川端　審三氏……一四三
木村　毅氏……一四五
米川　正夫氏……一四六
千輪　浩氏……一四八
平沼　淑郎氏……一五一
有松　昇氏……一五三
平松　市藏氏……一五四
出　隆氏……一五五
加宮　貴一氏……一五六
正宗得三郎氏……一五七
額田　六福氏……一六一
平沼騏一郎氏……一六四
久留間二郎氏……一六七
兼信　學氏……一六七
岡崎　旭氏……一六九
赤木　朝治氏……一七〇

（カット　柚木久太氏）

卷頭言

會長子爵　花房太郎

本會は組織されてから、すでに五十年といふ長い年月が閲て來たのであります。

全國に青年會は數多くあるのでありますが、その多くは昨今發表したものが多く、過去に五十年といふ長い歴史を持つてゐるものは極めて稀なものであらうと思ふ。

吾人はこの歴史を大いに誇つていゝと思ふのであります。誇ると同時にこの五十年の歴史を更に〳〵光輝あるものにしなければならないと思ふ。今日その實を擧げなければ、五十年の歴史は單なる年月の延長でしかない事になる。それでは創立以來本會の發達に盡した人々の意志にも反し、又今日の吾々としても面白くないと思ふのであります。

この歴史をもつと生彩あるものにする爲め、吾々は更に努力して前へ〳〵と進んで行き度いと思ふ。種々な點で今、日本が青年達に俟つものは多い。この點からも本會のより良き發達を冀つて止まないものであります。

本會沿革

（カット諸谷國四郎氏）

一

本青年會は明治十二年當時の學生花房直三郎、山口四郎、河原幸吉、岩田善明、森田許太郎、難波正の諸氏發起し花房義質先生を中心として、小松原英太郎、關新吾の二先輩其他同郷先進の士の撫育の下に漸を追うて發展して來たものである。其の趣旨とする所は良友を得て親交を結び、互に學術品行を切磋陶冶しようと云ふに在つた。そして友をひろく天下に求めるのは容易の業ではないから先づ同縣の因緣を端緒として開始したのが設立の原因であつた。

そこで同年二月第一回を京橋區築地の花房義質先生の邸で開催した。出席者は四十四名であつて當時偶々露國より歸朝して花房邸に滯在中であつた寺見機一氏が出席されたので年長の故に推されて座長となり露國事情に就き談話された。當日は花房義質先生も出席されて會員互に談笑すること半日、將來も永く本會を繼續しようと約束し、日暮になつて花房先生から酒は故らに省いた晩餐の饗應があつた。それは本會は努めて弊を去り、益を求めるのが主旨であつたから酒は弊を生じ易い爲に之を省いたのであつた。爾來屢々會合したが、初めは一月に二度宛集會したが度數多き爲めに却つて出席者が減少する樣になつたので一月に一回と改めて、其後は更に減じて一ヶ年に三、四回位としたのである。

本會は初め簡易と質素とを旨として、別に規則は設けず、又役員も置かずに、毎會出席者が次會の期日を定めて最寄關係者に通知したのみであつたが、明治十三年一月の會合の時に、石坂惟寛氏の勸告に依つて、初めて規則を定め幹事三名を置くことゝした。然し選定の方法が未だなかつたので、石坂氏の推薦で、岩田善明、堀内正善、花房直三郎の三氏が之に當つた。是れは氏名の「イロハ」順に依つたもので暫らくは此の定に據つたのである。

明治十三年八月一日芝區烏森昇榮樓に臨時會を開き、難波正、松本收、守屋物四郎三氏の東京大學卒業を祝つた。之が本會に於て酒を用ひて會を開いた最初である。之に就いては種々の議論もあつたけれど、要するに人はあまり嚴格且つ眞面目なものではなくて時には打寛ぐこともなくてはならないから、方正の朋友が相集つて時には酒食で交るのも害がないばかりでなく却つて友誼を溫めるものであると云ふ說に歸着し、之を實行し、禮に初まつて禮に終つたのである。

其の後毎年一回新年會を開いて、前年卒業の諸氏を祝することゝしたのである。これが本會新年會の淵源である。又同年十月三日の會にて、關新吾氏の發議に依つて以後席上碁、將棋等に興ずることを得ることゝした。今迄將棋、碁、骨牌の遊戯は堅く之を禁じてゐたが、餘りに窮屈すぎる傾があると云ふので、初めて之を弛めたのである。

明治二十年十一月十九日の總會の時に、河村彌三郎氏の發議に依つて、氏名朗呼に應じて會員起立して姓名と容貌とを一致して知るに便ならしめた。之が今日の自己紹介の魁である。

二

この頃本會總會は概ね午後茶菓のみで會を開き、談論風發した。駸々乎として進み行く我が新興日本の面目躍如たる趣を亦本會に見る事が出來たのだ。そして明治は二十年代に入り本會の創立時代は漸く過ぎて最早內容充實の機運に達せんとしたのである。

明治二十一年小松原英太郎、花房直三郎、河村彌三郎の諸氏が相謀つて本會の規則を編成し、同年七月一日に地學協會で臨時會を開き滿場一致之を可決した。其の理由は、

「夫れ我岡山縣青年會は創始以來十年を經しと雖も、未だ一定の規則以つて履むべきなく、斷行の主義以て守るべきなし、會員忽ちにして入り忽ちにして去り、或は隆盛或は衰頽あること爰に久し。依つて先づ規則を制定し、以つて大いに本會の振興を圖らんとす」。

といふにあつた。

これに依つて當時の本會を窺ふことが出來、更始一轉茲に本會の基礎が漸く定まつた。學校を組合として組合長を置き學生より幹事を選び、特別會員より委員及び委員長を選出し、委員長は幹事長を兼ねて本會を統率して會長の事務を執ることに定めたのである。又入會、退會、譴責、除名、會費等を定めたのが本規則の要點である。其の全文は次の如きものである。

第一章　目　的

第一條　本會は東京に在留する岡山縣出身者の親睦を媒介し學生生徒の學術品行を切磋奬勵するを以て目的とす。

第二章　會　員

第二條　會員を分つて通常會員、特別會員の二種とす。

第三條　通常會員は學生々徒に限るものとす。

第四條　特別會員は官吏商人其他獨立の生計を營むものより成るものとす。

第三章　組　織

第五條　本會に幹事を置き本會の常務を掌らしむ、幹事は幹事長一名、幹事二名より成るものとす。

第六條　幹事長は總會に於て特別會員中より公選す。

第七條　幹事長は會員中より幹事を指名推薦することを得るものとす。

第八條　本會に委員を置き本會全體の利害を勘査し各組合の聯絡を保持し及組合通常會員を監督せしむ。

第九條　委員は各幹事各組合長（第十四條）及在京特別會員中より委員に公選せられたるもの七名を以て成るものとす。

第十條　幹事長は委員長を兼ぬるものとす。

第十一條　本會は通常會員の爲に組合を設く。

第十二條　組合は組合員の學術品行を相互に切磋するものとす。

第十三條　組合の存廢變更竝に組合員の編入は委員會の決議に依る。

第十四條　各組合に組合長一名を置き其組合の事を管理せしむ。

第十五條　組合長は組合に於て公選す但し組合長は幹事を兼ねることを得。

第十六條　各組合に於て組合長を選定したるときは其組合より幹事に通知すべし幹事は之を委員會に通知す。

第十七條　各組合員は時々集會するものとす。

第十八條　本會役員の任期は總て一年とし毎年十月改選するものとす但し再選することを得。

第十九條　本會は毎年一月新年宴會を開き毎月一回集會するものとす。

第二十條　本會を開くべき時日は委員會に於て之を定め其期日に先つて幹事より開會の旨を各會員に通知すべし。

第四章　督責及除名

第廿一條　通常會員中學業を怠り又は品行不正にして組合員之を忠告するも尙改めざるものあるときは組合長より其趣を委員會に報告すべし。

第廿二條　委員會は組合長の報告に依り評議の上本人を召喚して督責することあるべし。

第廿三條　委員會の督責を受けて尙前行を改めず又は屢々組合の集會に缺席するものは委員會の決議を以て除名することあるべし。

第廿四條　會員にして身代限の處分を受け其他刑法に觸るゝ等の所爲ある時は委員會の決議を以て之を除名すべし。

第廿五條　委員會に於て會員を除名したる時は幹事より其趣を全會員に報告すべし。

第五章　入會、退會、移轉

第廿六條　特別會員及通常會員たらん事を望む者は會員二名以上の紹介を得て其趣を幹事に申込む可し幹事は之を委員會に通知し委員會に於て其入會の許否を決すべし。

第廿七條　會員に於て退會せんとするときは其趣を幹事に申込むべし幹事は之を次會の委員會及總會に報告すべし。通常會員府外に住處を移轉したるときは退會の申込なしと雖も退會者と見做す但し歸京の節は幹事への通知のみにて會員たることを得。

第廿八條　會員其住所を移轉するときは直に之を幹事に通報すべし。

第廿九條　特別會員は會費として毎年壹圓づつ出金すべし通常會員は總會に出席するときに限り席料として金五錢づつ納むるものとす但し宴會又は運動會を催す時は此例にあらず。

附　則

第三十條　本規則を改正せんとするときは委員會に於て議案を作り總會の會議に附し出席員の多數に依りて之を議定す。

其後名譽會員を設け、或は總會開催日、會費、役員數其他多少の修正を加へたが本規則は永く之を遵用して昭利五年に及んだのである。この規則改正に依つての初代の委員長は小松原英太郎氏で、委員には阪谷芳郎、花房直三郎、黑田綱彥、中村方

義、國米精一の諸氏又幹事には河村彌三郎、佐藤幸三郎の兩氏が選ばれたのである。

明治二十二年十月十三日の總會の時に役員の改選を行つて黑田綱彥氏が委員長に推された。明治二十三年一月五日の新年宴會兼小松原英太郎氏埼玉縣知事赴任送別會の際に通常會員の會費金五拾錢を三十錢に減じた。同年四月二十日の總會に於て宇治益三郎氏(杉浦重剛塾々頭)が岡山縣青年會々報を發行して異鄕に在る岡山縣人と在鄕者との聯絡を圖ることを發議された。この議が會報發行の淵源を爲したのであるが、當日規則の改正を行つて、德望學識ある先輩を名譽會員に推戴することにし又毎月一回開會することを改めて三月五月九月十一月に開會することにした。

明治二十五年には阪谷芳郎氏が委員長となり、翌年の役員改選には小原重哉氏が委員長となつた。二十六年から幹事二名の中一名は私學より選ぶことゝし帝大法科大學生渡邊勝三郎氏の外に慶應義塾學生奥田竹松氏の兩氏を幹事とした。同年十一月の委員會にて本會規則書を印刷する時に會計報告、本會歷史及び會員姓名を附加することを決議し、花房直三郎氏が本會の歷史の起草の任に當つた。

明治二十七、八年の日淸戰爭に連戰連勝の猛威を示し、他年苦心して尙成らなかつた所の條約改正も半ばその目的を達し、後進の弱國も一躍して世界の强大國の一つに列せんとした秋我青年會も會運興隆して會員も漸次加はり、明治三十年度には總數四百名を算ふるに至つたのである。

これより先明治二十五六年の頃に、「備作」と稱する雜誌が刊行されてゐたが、在京岡山縣人同志の編輯に依つて專ら同縣人の消息を載せてゐた。本會の記事も亦之に載錄されてゐたが日ならずして廢刊されたので、明治三十三年初めて會報を印刷して、之を會員に頒つたのである。今や會報の發行は既に二十七回を重ぬることになつた。

この當時の名譽會員は、石坂堅壯、川田剛、三島毅の三先輩であつた。

三

從來本會は會員相互の親睦を媒介し、學生々徒の學術品行を切磋琢勵する爲に毎年數回會合を催してその標榜せる目的の達

成に努め、明治三十年代に入つてからは年を逐うて發展の道を進んで來たのであるが未だ對外的な活動を成すには至らなかつたのである。そして專ら會内の懇親と融和とのみを圖るのを主としたのであつたが、明治三十七八年日露戰役に至つて具さに國難の辛苦を嘗めて、一朝千古未曾有の大勝を博して、皇國の國運愈々隆昌を加はると同時に本會も亦晏如として舊習を墨守することが出來ず、全會員凡て感奮して報國の至誠を如實に發現しようと志し、三四の事業の實行を決議するに至つたのである。是れが本會に於て對外的に活動をした嚆矢とも云ふべきものであつて又本會の最も活動した時代である。蓋し會内の整備進つて外部に發動したものと謂ふべきであらう。

明治三十七八年の戰役に際して、我岡山縣出身の從軍者で死歿した者は、無慮三千餘名に及んだのである。そこで同年十一月本會は此死歿者の爲めに祭典を擧行すべきこと、其の傳記を編纂すべきことを決議して、先輩諸氏の贊同を得着々實行に移つたのである。即ち明治三十八年の十二月二十五日には靖國神社にて、先づ祭典を擧行した。遺族の在京者二十名が之に列し陸海軍兩大臣、舊各藩主、有志者二百五十有餘名之に參拜し、式後記念撮影をなし、引續き遺族を偕行社に招じて靜肅な弔慰の會を開いたのである。又精忠錄は阪谷芳郎氏を委員長として編纂に著手し、寄附金壹千八百五拾圓餘の醵出を得て明治四十二年四月を以て一千部を印刷し、先づ一部を　陛下に、次に一部宛各皇族に捧呈し、尙陸海軍の當路に寄贈するの外岡山縣下の各學校圖書館等に配布し、一は以て死歿者の忠烈を永久に傳へ、一は以て縣下後進の士氣を振作するの資となすを得た。

既にして出征諸軍の凱旋するに及んで、本會は岡山縣茶話會と共に明治卅九年七月諸先輩氏の發起に依つて、在京同縣出身陸海軍凱旋將校七十七名の歡迎會を芝三緣亭に開いた。

發起人、有志三百餘名出席したのであるが本會からは花房直三郎、窪田靜太郎、犬丸鐵太郎の三氏及び通常會員總代等之に參畫して、開催その他周旋奔走の勞を執つた。縣人先輩が十數萬圓を醵金して岡山縣武學生養成會を組織するに至つたのは實にこの歡迎會に起源を發したるものであつて本會の甚だ欣快とするところである。

尙本會は岡山縣出身旅順港閉塞隊參加戰死者の爲め追悼碑を建設せんとして、寄附金壹千貳百餘圓の出捐を仰いで、その地

を岡山市奥市岡山招魂社境内に卜して、明治四十一年十一月二十一日遺族寄附者の出席を乞ひ建碑除幕式を擧行した。

上記の祭典擧行、傳記編纂、歡迎會開催及び追悼碑建設は何れも本會の義勇奉公の發露であつて、縣人先輩は本會の四大美擧として之を賞讃せられたのである。

明治四十二年二月六日の新年會に於て特別會員の年費を壹圓五拾錢に增額した。

子爵花房義質、文學博士三島毅の兩先生は闔縣の儀表であつて本會も亦名譽會員として最も景仰する所である。明治四十二年花房先生は官を辭せられ、三島先生は高齡八十に達せられたので、同年十一月二十一日に在京同縣人は九段偕行社に於て兩先生の爲めに慰勞及び賀壽の會を開催した。無慮四百餘名の來會者を得た。本日兩正賓に記念銀盃を贈り大部の畫帳に署名して兩先生に贈呈した。此會に於ても本會々員は先輩を補佐し又蕪辭を兩先生に呈した。

明治四十三年の春、備中館、鶴山館、精義塾、及び新設の兒島塾を各組合とした。同年十一月、陛下岡山縣下へ行幸あらせられた秋に當つて、贈位の恩典に浴せられた故池田輝政公、同光政公、同板倉勝重公、同松平康哉公等十九名の各遺族に對し本會は委員長の名に於て祝意を表した。

先に明治四十年池田詮政、石坂惟寛、花房義質、菊池大麓、三島毅の五先輩を名譽會員に推したが、本年更に多年本會の爲めに盡瘁せられた小松原英太郎、阪谷芳郎の兩先生を名譽會員に推薦した。

明治四十四年十一月二十六日岡山縣人相謀り花房義質先生古稀の祝賀會を築地の精養軒に開催し、縣外の人も亦德を慕つて加はり盛會を極めた。本會は代表者數名を列せしめて斡旋させた。右の祝賀會に於て先生の傳記を編輯することゝなつたので本會としては別に花房先生の事歷の編纂を企てなかつたのである。

明治四十五年は恐れ多くも明治大帝の崩御あり、謹んで國喪に服したので諒闇中は宴會等は總べて之を行はなかつた。

四

大正三年の秋に至つて本會創立三十五周年記念祝賀會を築地精養軒に開催し、出席者二百八十名に達して稀有の盛宴を擧け

ることが出來た。此の年、馬越恭平、黑瀨義門の兩先輩を名譽會員に推した。本會は前記四大美擧を行つて以來廣く知らるゝに至り、加ふるに縣人の東都に遊學する者も漸次その數を增したので會の內容形式共に整備し諸先輩會員の朝野に活躍せられるあり、先進後輩の親和密なるあり、新進氣銳の俊材の輩出多きものあり誠に欣賀に堪へないところであつた。同年規則を改正して幹事二名を三名に增員し、又學校卒業後未だ獨立の生計を營んでゐない者は之を組合外通常會員として年費を徵收しないことに定めたのである。又本年度に於て事務所設置の必要が屢々議論せられたが經費が許せば之を設置することに定めたけれど未だその實現を見るに至らなかつたことは遺憾なことである。

大正四年度第十六號會報に於て會員名簿中特別會員には職業肩書及び出身地を記入することに改めた。

大正五年一月二十九日の新年宴會に於て、昨秋御大典に際し贈位の恩典のあつた、贈正五位池田長發、同有元佐吉、同藤井高尙、同兒玉順藏、同阪谷素、贈從四位有元佐弘、同有元佐光、贈從五位井上修の八名士の頌德祭を兼ねて擧行した。近年本會の會計が著しく膨脹したので同年秋會計幹事一名を增加した。

大正六年に至つて平沼淑郎氏が委員長となられ、爾來拾有參年の長い期間委員長として本會の爲めに大いに盡力された。玆に記して感謝の微意を表す。

大正六年七月九日名譽會員正二位勳一等子爵花房義質先生が長逝せられた。明治十二年本會創立以來三十有八年間先生の御庇護指導に依りて本會は今日の盛大を來すことが出來た。本會としては誠に忘るべからざる恩人で哀悼の情に堪へぬものがある。同年八月十九日名譽會員正二位勳一等理學博士男爵菊地大麓先生が長逝せられた。本會は同年十月二十八日九段偕行社に於て開いた總會に於て兩先生の追悼式を擧げた。

大正七年五月春季總會に於て海軍大將藤井較一、衆議院議員犬養毅の二先生を名譽會員に推戴した。

大正八年五月には名譽會員宮中顧問官正三位勳一等三島毅先生長逝せられ、又同年九月一日には名譽會員陸軍中將男爵黑瀨義門先生が長逝せられ、本會は何れも葬儀に代表者を派して弔辭を呈した。本年秋特別會員の年金を金貳圓五拾錢に增額した。翌年一月十八日名譽會員池田禎政侯長逝せられ、同年十二月二十一日名譽會員樞密顧問官從二位勳一等小松原英太郎先生、翌年四月五日正三位勳二等法學博士花房直三郎先生が長逝せられた。小松原先生は本會の創立以來の功勞者であつて夙に會員の景仰する所であり、花房先生は本會の發起者であつて幹事であり後屢々委員長委員の任に當られ終生本會の爲めに御盡瘁下され普く會員の敬慕した所であつた。何れも平沼委員長が本會を代表して葬儀に參列し弔辭を捧げた。

大正九年十一月二十三日の總會に於て、小松原先生の傳記を編纂することゝなつた。大正十年五月八日の總會に於て侯爵池田宣政、子爵松平康春の兩舊藩主を名譽會員に推戴した。

總會に出席する普通會員增加の爲めに大正九、十兩年度に於ては經費の不足額八百四拾壹圓に達したので會計整理委員會を開催して、一面特別會員の增加を計つて會費の充實を期することゝなすと共に、本會緣故の先輩に寄附を仰いで不足額を補塡したのである。

五

大正十二年五月二十日春季總會に於て、木村淸四郎、窪田靜太郎の兩先生を名譽會員に推し、規則を改正して委員の數を十名とし公選に依ることゝした。同年七月名譽會員石坂惟寬先生が逝去せられた。

大正十二年九月大震火災の東都を襲ふに當つて岡山縣人にして罹災した者少くなかつたので、黑田英雄、明石照男、木村善太郎、美土路昌一、久山寅一郎、福澤德太郎、久山公男等の諸氏相謀つて、精義塾、備中館、鶴山館の代表者と共に救濟方法に就いて協議し、九月二十六日本會は救恤運動を開始することに決し、新聞に廣告して罹災縣人の調査をした所戶數約五十の報告に接したので、先づ會員有志の寄附金壹千八百九拾七圓を以て、見舞金並に蒲團、毛布襯衣文具類を購入して罹災家族に頒布し、笠岡靑年會、同在鄕軍人會、同婦人會、倉敷高女及會員有志より藥品、玩具、蒲團、衣類等の寄贈をも受けて之を配布した、同年十二月三十一日に本會員の救恤運動は終局したが、罹災縣人多數の救恤に成功したことは寔に滿足とするところである。

大正十三年五月十一日東宮殿下御成婚に際して贈位の恩命を蒙つた贈正五位武本立平、同福永佐長、同原田佐秀三氏の頌德祭を行ひ、同日宇垣一成大將を名譽會員に推薦した。

同年十月二十九日の總會に於て委員野中勝明氏は青年會々館設立の必要を力説され、備中館組合長小川熊夫君之に贊成し青年會寄宿舍の建設の急務なることを說かれたので、大正十四年度會報に會館設立趣意書を載せて其の機運の釀成に努力することになつた。

大正十三年十二月十四日麴町區有樂町日本生命保險協會に於て名譽會員故小松原英太郎先生の追悼會竝に傳記贈呈式を擧行した。翌年嗣子小松原健吉氏より金參百圓の寄贈があつたので其の厚意を謝して之を本會基金とした。

大正十五年七月八日名譽會員海軍大將藤井較一先生が長逝せられたので、十月十七日の總會に兼ねて同大將及び特別會員故中岡默、特別會員故長瀨鳳輔三氏の追悼會を行つた。

昭和二年五月廿九日總會に於て石原健三氏を名譽會員に推し、又規則の一部を變更した。尙普通會員名簿を會報中に設くることゝし、同年七月下旬本會の紹介及び在鄕青年を指導啓發する目的で夏季岡山縣下講演會を組織し、講師には委員長平沼淑郎竝に委員岸本綾夫の二氏を煩はして岡山市、津山市、倉敷市、高梁町の四ヶ所に於て講演會を催したが聽衆に多大の感動を與へ好成績を收めた。

同年十一月二十四日大隈會館ホールに於て、秋季總會に併せて故名譽會員從二位勳一等有松英義先生の追悼會を擧行した。

六

昭和三年春の總會に於て役員の改選をして、大正六年以降の委員長平沼淑郎氏に代つて子爵花房太郎氏が委員長に就任した。又諮問機關として顧問を本會に置くことゝし平沼淑郎、野中勝明、河村彌三郎の三氏を顧問に推薦した。尙同年十二月九日小石川植物園に於て、秋季總會に兼ねて平沼淑郎、河村彌三郎、野中勝明の三顧問に對する謝恩會を開催した。

昭和四年三月一日、多年本會の爲に盡力せられた本會顧問河村彌三郎先生が長逝せられたので同年六月六日の總會の時に同

氏の追悼會を催し、同日規則を變更して特別會員の會費を參圓に改め、又靑木鐵太郎氏、矢野恒太氏を名譽會員に推擧した。

顧みれば大正六年より昭和三年に至る間數度追悼會を開催した。本會創立當時の先輩の物故相繼いだためで本會の一時代を物語るものであると思ふ。然し乍ら明治四十年前後に於ては日露戰役に基く事業の外、陞爵、授爵、入閣、又は學位の受領、或は歸朝等の慶事に對して、總會に於て祝意を表したることも亦甚だ多く又本會の一時代を示すに足るものと對照するのではあるまいか。

昭和四年十一月十日日比谷公園松本樓に於て、總會を兼ねて新に政友會總裁となられし犬養毅氏陸軍大臣となられし宇垣一成氏大藏政務次官となられし小川鄕太郎氏遞信次官となられし今井田淸德氏の四氏の榮職御就任祝賀會を擧行した。

近年都下に於ける大學及び專門學校大いに增設せられてその數、數十に達し、岡山縣人子弟の遊學するもの無慮三千餘名を算ふるに至つたが現行規則は會員數凡そ百數十名、學校數も亦僅かに十指を屈するに足らない四十年前の昔に制定したものであつて、漸次多少の修正を加へたのに過ぎないから現下の狀態には適しないし又數千の學生卽ち普通會員の團結にも不便なので根本的に之を改正するの必要に迫られ、昭和四年秋季總會に於て改正することゝなり又名譽會員と顧問とを廢止する議が起つたので幹事は規則改正委員會を組織し、委員犬丸鐵太郎氏を委員長に推し、先づ各學校に在學する多數學生の意見を徵して原案を作り屢々合議して漸く成案を得たので之を昭和五年春季總會に提出して滿場一致の贊成を得、同年四月一日から之を實行するに至つたのである。その改正要旨は、從來組合長は傳達機關に過ぎなかつたが之を改稱して幹事とし、會務に參與せしめて本會と各學校在學者との意志の疏通連絡に便ならしめた。先の幹事は之を常任幹事として會務を分掌せしめて其努力を有效ならしめんとし又支部を岡山及び縣人多數の居住地に設置して本會との連絡を計り、又特別會員は京濱方面居住者に限定してゐたのを、爾今居住地を問はず廣く岡山縣人先進の士を網羅することゝし、又名譽會員顧問幹事長を廢して評議員を新設し、委員長を會長に、委員を理事と改稱した。之は常置の役員たる委員と臨時選定の特別委員との混同を避けんが爲めであつて同時に新たに監事を設けて會計事務の監督査閱を掌らしむることゝし成るべく規定の簡明と運用の便利を期したるもので、又規

則を會則と改めた。（本誌目次裏參照）

昭和五月五月二十日春季總會を日比谷公園松本樓に開き特別會員五十七名、普通會員八十七名出席して盛會であつた。席上前記の會則を可決して、又本會創立五十周年を祝賀せんが爲に記念事業として年來懸案の會館設立竝に秋期に於て祝賀會を開催し、本會五十年の沿革と現況を明らかにし將來の抱負等を記述した冊子を刊行して會員及岡山縣下に配布するの議を定めて其の委員に特別會員より花房太郎、犬丸鐵太郎、平松市藏、島田茂、美土路昌一、道家齊一郎、畠山藏六、荻野正孝、大橋信吉、太田收、坂田愉三郎、淺沼龍吉、龜山孝一、有松昇、金平豐次郎、川端審三、正宗直三郎、松本佐一、鳥取快太の二十氏、普通會員より、陶浪捷太、佐藤甲子郎、三浦武夫、淺尾寛一、木山博精、森安二郎、近藤敏明の諸氏を擧げ、同年十月二十六日小石川植物園に方て創立五十周年紀念祝賀會を盛大に擧行したのである。

（佐藤幹事記）

本會發起者の（舊姓山口）村瀨四郎氏より。

左の書簡は本會發起者の一人村瀨先生が花房會長の請ひに應じて、寄せられたるものである。

（前略）往年生等の發起せし岡山縣青年會今尚繼續最早年を閲する五十周に達し此頃其記念式御擧行に相成候由御同慶の至りに奉存候「此會は斯く年月を經過せるも今其の創立當時の狀況を知るに足るものなし、幸に君の生存するあり會の爲めに記憶する其の當時の狀況を草し送附されたし」。との御通知有之候も何分幾多の星霜を經過せることゝて記憶することゝ少し、いさゝか記憶することを記し、而して御求めを塞ぎ申さん。

我縣より東京に遊學せる青年の相互に往來せる者の間に何時となく青年會を組織しては如何との議起り一同贊成先輩小松原英太郎氏、花房直三郎氏、關新吾氏等の援助を得て成立し、以來通常會は大概先輩者の居宅を拜借し、春秋二季の大會は料亭に於て擧行せりと記憶せり。會の用務は會員次番に之に當りたりと覺えたり。發起者とも云ふべき人達は、村上祐、江村正路、有森新吉、森脇一、松山孝平等の諸氏にして、會員は作州人たると備中人たるとを問はず、縣下の人はことごとく會員たらん事を望みしも、作州人は皆無なりき。

（後略）

本會五十周年祝賀會の記

昭和五年十月二十六日　小石川植物園にて

創立後既に五十ケ年の星霜を經たる我岡山縣青年會は、之が祝賀の式典を十月二十六日（日）の吉日を卜し、小石川植物園に於て盛大に擧行するの幸運に惠まれた。

前日來の風雨は此の日八時頃まで依然降り止まず何時晴れるとも思はれなかつた。本日の此の祝賀會に到る迄には幾回かの

（カット柚木久太氏）

委員會を重ねて、協議を重ね萬全を期したるものを、恨らめし、此の雨降りでは折角の會も臺無しに成ると痛く心配しつゝ八時過會場に急ぎ馳せつけ見るに、當日會場の飾付け、餘興、模擬店の引受者たる歌舞伎屋の人々は腕を拱き唯思案投首の態植物園の掛の人達も氣の毒げに空を打ちまもるばかりであつた。然るに八時を少し廻つた頃よりは雨も次第に小降りと成り、密雲も漸く散じて、淡い日の光さへさし初めたので、之に元氣付き、人夫を督し先づ室内の大掃除、整理を初めた。八時半を過ぎた頃には、既に會長初め當日の委員一同勢揃ひをし、學生は先輩の指揮の下に其の係りを決定し各自の部署の準備に奔走す。遠くは指ヶ谷の市電停留所の邊より又道々ビラを貼り、入口の石の門柱横にもビラを吊して景氣を添へた。門を入つた左右に受付所を設け、本館入口の玄關前の右側に署名臺を置き、先づ外觀の體裁を整へた。次第に室内は整頓され、式臺が作られ、幔幕を張りめぐらし、萬國旗を以て飾られ、かくして立派な式場と變つた。又一方池に面した廣い庭園には中央に高い柱を立て數多の萬國旗を張り、又幔幕を張りめぐらした瀟洒な模擬店を設けた。其の模擬店には故郷の名に因んで水島屋、鶴山亭、備前屋、玉島屋、鳥亭、稲荷屋、神庭亭の名稱を記して、いやが上にも、郷土氣分をあふつた。又夫等の間に交つて、茶と菓子を載せた小テーブル、蜜柑を山と盛つた大きた臺も數ヶ所に配置された。

この頃ともなれば、空は紺碧に澄み渡り一點の雲も留めぬ小春日和だ。明るい秋の陽射しを浴びて、しつぽりと水分を含んだ庭園の木々は、のび〳〵と枝を伸ばし、みんな今日の佳い日を祝福して其の欣びに身を顫はして居る樣だつた。

かくして正午頃迄には用意萬端完成し立派な會場が出來上つたので、特別會員の見えぬ内にと先づ本館の玄關前に集合した役員一同は白菊の章と名札を付けて記念撮影を濟ます。

この頃より今日の大會に參會の先輩學生の姿がちらほらと見え初め、やがて自動車の列、人の波と刻々その數を增して行つた。先づ第一の關門たる受付所で胸に會員章の赤菊と自己紹介代りの名札を附け、プログラムと食券とを受取る。次に第二の關所たる署名臺の前に現れて各々得意の筆を揮つて後、玄關より式場に姿を現はして行く。受付係は目の廻る樣に忙がしくて天手古舞ひをして居る。式場を見渡たせば、もう人で一杯になつてゐて、互に久闊の挨拶を交はしたり、晴やかに談笑する先

輩、只、譯も無く、はしやいで居る學生連、又會場前の睡蓮の浮ぶ古池の邊にも三々五五相語る人達の群も見える。一時を少し廻つた頃、犬養先生が矍鑠たる老軀を靜々と式場に運ばれるのを合圖に、開會を宣せられ一同は靜かに着席した。此の頃でも尙ほ會員は依然陸續と來場し、受付係や署名係の忙がしいこと。やがて滿場のわれる樣な拍子に迎へられて花房會長が先づ演壇に立たれて別掲の如く開會の辭を述べられた。次に代つて犬養先生、阪谷先生、及窪田先生の御三方が順々に祝辭や御感想を述べられ。(別項參照) 來會者一同は深き感銘を受けて盛に拍手を送つた。次に三浦學生幹事が飽くまでも學生らしい喜びに滿ちた心持で祝辭を述べ犬丸委員が閉會の辭並びに青年會の內容等を報告された。最後に犬養先生が再び、演壇に姿を現はし、先生の音頭の下に青年會の萬歲を三唱し、こゝに意義深い祝賀式の幕は閉ぢられたのだつた。

閉式後は時を移さず二百五十餘の參會者は長蛇の如き列を作つて池の畔を進み、池の向ふ側の秋光和やかな池の邊りより芝生の丘にかけて立ち並び本館の方に向つて、記念の撮影をした。

撮影後は先輩、學生がどや〳〵と模擬店を圍んだ。こゝに到れば無禮講で皆一緒に入り交り壽司の立食ひ、燒豚の美味に舌鼓を打つ者、麥酒、熱燗の前は呑平の黑山、甘酒を賞美する人々、團子を頰張る甘黨、おでんの先途爭ひと、一しきり園内はざわめく。之の間を縫つて「記錄」と記した探訪は右に左に走り廻つて、先輩に向つて、當日の感想をたゝいてゐる先輩も亦大變な御機嫌で氣焰をあげられたり、昔の頃の青年會を偲びつゝ、過ぎし半世紀間の事共をほつり〳〵と話されてゐる。今や實に祝賀會も最高潮の時だ。

三時半過ぎ威勢の良い太鼓の音が邊りの空氣をふるはして鳴り響けば、いよ〳〵餘興の幕が開かれたのだ。一旦庭に出た人人も我れ勝ちにと式場から餘興場と早變りした室内になだれ込み身動きもならぬ位に一杯となつた。松旭齋天洋一行の手品に魅せられた人々も、それの種明しに微笑を禁じ得ず、次ぎのいともユーモアー豐かな三遊亭歌奴の落語には思はず釣り込まれて一同ふき出す。餘興も次第に進み次の「たぬき屋連」の滑稽四段返しには笑ひの蟲が爆發する。麥酒や酒の醉の廻つたらしい赤い顏をした學生達の高唱、彌次、掛け聲入りで餘興も愈高潮に達し拍手、口笛、哄笑、爆笑、笑ひは更に笑ひを誘ひ人々

は唯愉快になる許りだつた。かくて五時頃餘興が終了すれば再びどつと模擬店へと、なだれを打つて、詰め寄せた。改めて飲み直しのためか池畔の椅子に腰打ちかけた人々の盃の數々、しるこ、菓子へと手をだす甘黨の面々。アルコールの廻るテンポの進むにつれて談笑の裡に先輩後輩共々に打ちとけて、文字通りの親睦、人の和その者が刻々に人々の間に實現してゆく。

園中漸く薄暮の近づけば未だ興奮の冷めやらぬまゝ、今日の樂しさを胸に宿しつゝ三三五五打語らひながら隨時解散歸途に就き初めた。

時正に五時頃だつた。歸路受付けで遠く岡山市の有志から寄贈された吉備團子を一箱宛家へのお土産として受け取り、遙か數百里を隔だてる郷里の秋を偲びつゝ、一層機嫌よく歸つて行く人々の姿が淡闇の中に吸はれる様に消えて行つた。電燈の赫赫と輝やき初めた會場には殆んど人氣なく僅かに殘つた委員達が後仕末に忙がしい。餘つた食物を巣鴨東京養老院に寄贈するの手續を取つてから、華やかなりし祝賀會の事共聲高らかに談じ合ひつゝ、明るい町、ネオンサインの明滅する賑やかな街へと練り出して行つた。夕闇濃い植物園内や道路から響いて來る歌聲は餘韻嫋々、尚ほ低徊去りもやらぬ人々のそれでもあつたらう。

（陶淚捷太記）

（カツト正宗得三郎氏）

大會における式辭及祝辭

開會の辭

會長 子爵 花房太郎

只今から岡山縣青年會創立五十周年の祝賀會を開催いたします。この機會に一寸會の成立や何んかを申上げて置きたいと思ひます。皆様既に會報や何んかで御承知でせうが、この會は明治十二年に基礎を起しましてそれ以來會としていろ〳〵盛衰はありましたけれ共一般にいろ〳〵な仕事をやりまして、恰度今年を以て五十年になるのであります。世間にいろ〳〵會は澤山ありますけれども、却々五十年を過ぐるといふことは難しいことでありまして、この會が五十年を過しましたから、何か祝賀會をやらうといふことをこの前の會の時に決議になりまして、今度特別委員になられた方、並に學生の委員等が非常な御努力でいろ〳〵設備もお考へ下さるし、又いろ〳〵寄附など御迷惑をかけましたけれども、その蔭で以て寄附金の方も非常に集りまして、茲に盛大にこの祝賀會を行ふことが出來るやうになつた次第でございます。

今日は、昨夜以來非常に天氣が惡うございまして、或は斯ういふ天氣にならないかと、非常に心配して居りました所が、幸なことには、斯ういふ園遊會のやうなものを催しまするには最も適當な日になりまして、一同喜びに堪へない所であります。恰度今日は神戸に於て觀艦式が行はれまして、　陛下が御臨幸になりますが、神戸におきましても同樣な好天氣を得たことゝ信ずる次第でございます。これはお上の御稜威の然らしめる所であることは固よりでありますけれども、會員諸君の御熱心がこの天氣を茲に持ち來したものと私は信ずるのでございます。

最後にお斷りして置かなければならないのは、この會が皆樣の御熱心で此處まで參りましたけれども茲に一つの缺點は私の如きものが今日會長をして居りますといふことが今度の祝賀會の一番缺點だらうと思ふのでございます。茲にお詫びして置きます。

これを以て開會の辭と致します。

祝　辭

特別會員代表　犬　養　毅

祝詞を述べろといふことでございますが、成る程これ位お集りになりますれば祝すべきものだらうと

思ひます。

岡山からの學生は昔は極めて少なかつた。我々の學生時代にも時々やりましたが、眞の待合——今の所謂待合ではない、仕事師が寄る待合の座敷を借りまして、其處で煎餅を食つてやつたものです。その時分に阪谷さんもお出になりましたが、阪谷さんはまだ豫備門の學生で、一番の少年であつた。その時は五六人なんです。そんなもので、極めて微々たるものであつたのであります。その中でも岡山の方は流石に大藩でありますから多くの人が出て、作州の箕作先生なんかの文化指導者が出られた處は多いが備中は極めて少いといふ有樣であつた。その後段々學生が殖え、學生が殖えて來るに從つて、中には各方面で非常に成功された人が出て、今日は多くの學生が居り、多くの青年が東京に出て居る。さうして多くの人がいろ〳〵な仕事に就いて居るといふ方面からいへば、極めて祝すべきである。

もう一つ祝するといふのは、私共學生時代に飛出した時には、先輩といふものが誠に微々たるものであつた。官閥を有たないから、役人に出て居るものも極めて少く、何の方面に出て居るものも、さう首腦の所に人が居ない。それであるから先輩のお援けを受けるといふ譯には行かない。世の中に出るといふのにはまるで獨力で自分が道を開いて、自分が働いて突き進んで行くより外仕方がなかつた。先輩はあつても學者先生で餘り世の中のことには御關係の少い諸先生が多い。學者先生以外に役人は多くなか

つた。さういふ具合で極めて振はなかつた。振はぬ時代は武力で爭ふ時代であつたから岡山縣人は得意でない。岡山縣は古來武力では餘り志を得ない國である。志を得ない國であるといふのは種々な原因がありませうが、詰りは古代の武器を操縱するには不適當な體格である。私共の先輩の中川横太郎君が斯ういふことを言はれた。あの人は武術家であるが、岡山縣は劍術や鎗の名人が出ない。これは體格の然らしめる所であるといふことをいつた。體格の上では九州とか東北とは、比べものにならぬ。古代式の武器を振り廻はすのには不適當である、地勢が既に不適當である。地勢は通り道のやうな狹い所であるから、これで發展することは出來ない。此方面から見て武力の方ではとても駄目だといふので、文化の方へ向いたものである。文化の方からは偉い人を澤山出して居る。

さういふ國であるから、幸に武力で爭ふといふ封建式の世の中が去つて、これから頭で爭ふといふ時代になつたから、岡山縣は得意である。この位多くの人が出られる世の中になつたから、これからは岡山のものが、少し働いて宜しい時代が來るだらうと思ひます。この意味において、諸君の現在ではなく前途の御祝詞を申上げます。

この會は創立以來既に五十年でありますが、これは岡山縣のあらん限り續くべきで、五十年、百年といふ期限のあるべきものではない。何時までも續くべきものであるが、只會が續くだけでは仕方がない將來この會の中から非常に世の中に出て働く人を世の中に出したい。この希望は果して滿足されるだら

うといふことを期待して、玆に進んで御祝詞を申上げます。

祝辭

特別會員代表　男爵　阪谷芳郎

只今犬養先生から昔話が出ましたが、犬養先生も大分腰が曲つて來たやうですが、私も腰が曲つて來たやうですから、昔話には餘程資格を有つ人間であります。恰度岡山縣青年會創立五十年を私の年齡から差引くと、十八年位になりますから、私も創立當時は決して腰が曲つて居なかつたといふことを證據立て得るのであります。

この青年會の祝詞を述べるにはその功勞者の名前を一應申した方が宜しからうと思ひます。功勞者の花房子爵のお父さんの花房義質さん、現會長の叔父さんである花房直三郎さん、その外關新吾さんとか小松原英太郎さん、小原重哉さん等は皆犬養先生のお話しの通りに岡山藩出身の方で、今は故人となられた方であります。又此處に祝辭を述べるとして名が書いてある中を見ましても犬養先生はその當時先輩の方であつたのであります。從つて岡山縣青年會の本當の名實共に青年といふ資格のあつたものは犬養先生を除いたあとの連中だけなのであります。それが適當な解釋であります。

五十年間の變化はいろ〳〵數多くありまして、隨分人材で有望な人で亡くなられた人もあり、又中途にして失敗した人もありますが、この岡山縣青年會出身者には世の中に出て仕事をした知名の士が澤山ありまして、甚だ收獲が多いのであります。そのパーセンテージが多いのであります。

この原因は先日も一寸今の花房會長に申上げたのでありますが、元の花房子爵や花房直三郎さん等そこらの方々の御盡力で岡山縣から出た學生の組合を拵へたのでありまして、その時分の組合は珍らしい考へであつたのでありますが、東京帝大とか、駒場農學校とか、慶應とか、その他方々の學校に、岡山縣出身の學生が四五名居る所には組合をつくりまして、その組合に組合長を拵へて、その組合長がいろいろ組合内の青年の監督をするといふやうな意味になつて居つたのであります。

岡山縣青年會といふものは、各々志を勵まして、鄕關を出た時の考へを貫かねばならぬ、それには途中で品行が惡くなつたり學業を怠るやうになつては困るから多少監督をしなければならぬが、只普通の内輪だけの監督ではいけないから、青年會といふものが出來たので、組合といふ組織も至つて寛大な組織であるのでありますが、併しながら全く放任ではないのであります。岡山縣青年會が、今日までに非常な人材を生んで來たといふことはこの組織が然らしめたのであります。この組織あるが故に、自ら組合から除名する人も出來て居り、組合に入れない人も、出來て來るといふ具合で從つて中央の青年會といふものは鄕關から出た多數の青年の内で篩にかけて、友達同士の間で、あの男は見込みがあるといふ

のが其處に殘つて居るといふのであるから、非常に成績がよいので、それだけは岡山縣青年會として非常な功勞があつた、而して會自身から人材が出れば人材同士が友達となつて社會で提携することが出來るから、これが亦社會に盡す上に於て便宜を得て居るのであります。勿論鄕里の人のみが友達ではない、今日は世界の人を友達にする時代でありますけれども同じ鄕里から出たものは親しみも深いこの親しみは自然に出たものであつて、同鄕のものが各々志を中挫せぬやうに、又健康を害せぬやうに所謂切磋琢磨とでも申しますか、そういふことには效能があつたのであります。

併し今も申します通りに、この五十年前の初めに十七八歳の私が、今日は腰が曲つて、頭髮が白くなると同樣に世の中は非常に變化して參ゐりました。昔のことを思ひまするとと實に懷舊の情に堪へぬのであります。從ひまして、今日の如く、かく多數に集つて青年會の五十年を祝賀するといふことは何よりの愉快を私に與へるのであります。今日は比較的に年を取つた方々のお顏が少いやうでありますが、これは年を取つた人は大分亡びたといひませうか已むを得ない結果かもわかりませんが、昔は犬養先生のお話にあつたやうに、人數も少かつたもので、花房子爵のお宅で煎餅を食べてお話をするとか若くは、地學協會の講堂とか、或は小さな寄席に寄つて、碁を打つとか、トランプをするとか或は大崎の池田侯爵の御庭を拜借するとか又遠足をするといふやうなことも多くあつたが近頃は人數が多いから、昔とは自ら方法が變つて來たやうであります、人が多いと昔のやうに極く濃厚な交際は難かしいが從つて人材

を多く抱擁するといふやうな利益は生じて來る樣な譯であります。

誠に今日茲に、かく多數の同縣の出身者殊に將來非常に有望なる青年の方々を見受けまするといふことは、私共誠に愉快に堪へぬのであります。同時に犬養先生の如き明治の初めから、今日まで一貫して政界に盡して居られる、いはゞ日本の政治界に於て憲政の元老その人がこの青年會の一員として此處に御列席下さいまするといふことは、同鄕人として、誠に愉快に存ずる譯であります。犬養先生始め今日御列席の先輩諸君の益々御壯健ならん事を祝すると同時に、又今日御出席の若い方々がいよ〳〵御勉强層一層國家の爲めに御盡力あつて、岡山縣と稱する世界の眼から見れば誠に小さい部分でありますけれども、この小さい部分から斯くも多數の人材を出したかといふことを後世の歷史にも殘し、又國家の爲め世界人類の爲めに文明の上に學問の上に有ゆる方面に貢献することのいよ〳〵多からんことを期待する次第であります。

一言御祝辭を申上げた次第であります。

祝辭

特別會員代表　窪田靜太郎

私も一言御祝辭を申述べたいと思ひます。岡山縣青年會が五十年も斯く無事に繼續して、曾て一年も間斷あつたことなく、少くも春秋新年會等に三四回は會合を續け、さうして今日に到りましたことは、誠に祝賀に堪へない次第でございます。青年會のこの多年の健全なる發達を祝すると共に、當初から會員たりし犬養先生の如き、或は青年として當初から御關係になつた阪谷男爵の如き、その他老先輩諸君が御無事に御經過になつて、この青年會五十周年に御會合になりましたことはこれ又それ〳〵御本人の御長壽御幸福を祝する所でありまして、これ等の長老が我が會に健在せられて、何か機會のある毎に御出席下さいまして、御懇篤なる御話をして下さいまするといふことは誠に喜びに堪へない次第でございます。これ亦諸君と共に茲に祝意を表したいと思ふのでございます。

この五十周年の記念會をお開きになるといふに就て、それに關聯して既往の本會の爲めにお盡し下さつた方々、岡山縣の爲めに御盡力になつた方々のことが、千々に思ひ出されまして、誠に懷舊の情と共に謝恩の感に堪へないのであります。先刻來諸氏のお話にあつた如く、先輩が我が縣の爲めに御盡力下さいましたことは實に多大なものであります。我が會の爲めに御盡力下さいました事も亦極めて大なるものでございます。この多大の先輩の御盡力に對しまして、我々が感謝を致すといふ念を茲に表はすことの機會を得たことを又喜ぶのであります。この謝恩の情といふやうなものも、これは何かの機會に培養し養成しないと段々と薄らいで行き易いものであります。新しいことを求める感情は何等反省する所

なくても自ら催すものでありますが、舊來の事柄に對する謝恩の情といふやうなものは動もすれば色が褪せて、段々と恩義に對する人間の感情といふやうなものが薄くなつて行くやうな傾向がありはしまいかといふことを憂ふるのでありますが、併しこれ亦機會を得る毎にこの感情を養成し培養することの用意を各人が銘々に持つたならば、大いにこの物質的文明に伴ふ所の弊害をも緩和することを得やうかといふやうな事を、この五十周年祝賀會に伴つて私は感じまして、斯くの如きことも亦極めて祝すべきことであります。

青年會に對して私の一つの特徴があるとするならば、それは私は書生時代からほんの僅か地方に出たばかりで、多く東京に居りました結果として、この青年會には比較的屢々參會したのであります。或は人についていちいち計算して見ましたならば、阪谷男爵の如きは往年委員長として、又委員として毎回御出席下さつてをりますが、私も恐らくは阪谷男爵に多く讓らない程度にこの會に出席を致して居るやうに思つて居るのであります。この出席を比較的によくしたといふ點においては私は多く恥づる所がない。若し青年會に對して、何等か寄與する所があつたとするならば、それは兎に角出て來るといふことであつたかと思ふのであります。

而してこの青年會に就て、私は以上の様な有様でありますが、その青年會なるものゝ存在理由に就きまして、往々說のあることを從來屢々聞いたのであります。青年會には如何なる利益があるんだらうか

會に出たら何ういふ利益があるかといふやうな疑問を起されるのに接したこともある。或は又一體日本人の中で岡山縣といふやうな小さな部分の人間達が集まるといふやうなことは素々つまらぬ話しで何んの利益になるかといふやうな說に接したこともあります。斯やうな說は從來ちよい〳〵有たれて居つたし又將來も人によつてはさういふ疑問を有たれるのであらうと思ふ。併し私共はこれに對して何等の定說を持たぬのであります。一體私がこの會に出席を致した動機は能くは記憶致しませんが、花房先生の所に青木鐵太郎君が居られて、私が國から出て來て一緒に居つた時に、岡山縣青年會といふものが開かれる、どうだ行つて見ないかといふやうなことで出かけた、又次ぎに出かけて來て行かうぢやないかといふやうなことで出席した。それが段々習慣になつて出席して今日に至つた譯で、私は出席の理由に就て考へたこともありません。又前に申すやうな疑問に接したのでありますけれども私自身としては青年會の存在理由に就ての一定の說を有つて居る譯ぢやないのであります。只私の經路から考へて見るといふとこの同縣の一つの青年會といふやうな會合は、これは人間の自然の情から起つて居るものであらう。これを擴大して見ると、例へば日本人が外國に旅行して、測らずも他の日本人に邂逅するといふと非常に親みを感じて、共に飯を食はうといふやうな感が雙方に起つて來ることは皆樣御經驗のことでありませうが、お國のものが東京に出て來て、お國同士の人々に會つて見ると雙方非常に親みを感じ、又一度逢つてからその次に逢へばヤアといふやうなことで、直ちに懇親になる、斯やうな人間の性情が卽ちこ

の青年會を存立せしめたのであらう。互に同郷といふ故を以て親しい感情を有つといふことが卽ちこの青年會の存立理由であらう。敢て何ういふ利益があるからとか、何ういふ利益をあげる爲めといはざるも、素々斯くの如くに集合すべき感情上の理由、人間の性質上の存立理由を有つて居るものであらうと斯やうに私は自分の經路から考へるのであります。

而して、この青年會といふものが既に存在理由のあるものであれば成るべく、これをお互に應用して早くいへば共存共榮して行く、大きくいへば社會一般の利益になるやうに、これを運用して行くといふさういふ方法を講じるといふことが素より必要であり、又望ましいことであるのであります。でありますから恐らくこの人間の性情に伴つて出來る所の青年會は、その副産物として、この運用如何によつてはお互の發展上に大變な利益になつて來る。これが副産物として自然に生じて來るのであります。これを能く培養して以て進んで行つたならば、大變に國家社會にも、利益になることであるに相違ない。先刻阪谷男爵からして、この會で互に切磋琢磨するといふやうな所から、大分立派な人物も出て來るといふ風になつて來たことは喜ばしいといふ御祝辭がありましたが、誠にその通りであります。これは私の見解では先輩諸公が、この會を御指導下さいました結果、副産物として、自ら立派な人達も出て來るといふ利益が、あげられることになつたものであると信ずるのであります。

斯く考へ來りますれば、この人間の性情に基いて居る所の青年會といふものは、先刻犬養先生の、お

話しにあつた通り、將來敢て、五十年、百年といふ期限のあるべきものでなくして、無期限に何時までも存在して、進んで行くべきものであるといふお示しの如く、必ずやさうあるべき性質のものであると私も考へる次第でございます。私共も皆樣の驥尾に付いて及ぶ限り、本會の爲めに努力を致し以て、益益本會が繁榮して、この互に相親しむといふことの目的と、尙その副産物として、いろ〳〵な方面に有益な結果を持ち來すやうに、努めたいと存じます次第でございます。

これだけを以て、祝辭に代へまして、御來會下さいました元老、先輩一同その他會員の諸君の益々御發展御盡力あらんことを希望致す次第で御座います。

祝辭

普通會員代表　三浦武夫

我が岡山縣青年會創立五十周年祝賀會を開くに當りまして、斯く多數の先輩諸氏の御出席を得ましたことは非常な喜びとする所であります。

岡山縣青年會が明治十二年開設せられまして以來、茲に半世紀の長きに亙り、能くその目的に副ひ、幾多の變遷を經、其間國步艱難な時に當り幾多俊才を輩出し、今日の如き盛大なる本會を有することを

得ましたことは、これ偏に先輩諸氏の御熱心なる御後援と御指導に因るものであると存じます。本會の創立されました處の目的である學業の切磋琢磨、又は故郷を遠く離れて幾百里この帝都において縣人相互の親睦を圖り、その他種々なる事業に就きましては、皆様よく御存じのことだらうと存じます。今後我が青年會が益々發展せんが爲めにはより以上の先輩諸氏の御後援と御指導を得たいと存じます。

一言普通會員を代表し祝辭を申述べます。

閉會の辭

本會理事　犬丸鐵太郎

本祝賀會を開きますに當り、犬養先生、阪谷先生、窪田先生の三先輩が、御多忙中特に御來臨祝辭を御述べ下さいましたことは、本會にとりまして誠に光榮に存じます。一同より厚く御禮申上げる所であります。又特別會員諸君、普通會員の方々も、この秋晴の好季節としていろいろな催ふしものが野外にもあり、所々方々にありますにも拘らず、斯く多數の御來集を得て、愉快に且つ盛大に本會を開き得ましたことは、これ亦役員としてお禮を申上げる次第でございます。

この機會に聊か申添へて置きたいと思ふことがございます。それはこの五十周年を祝するに付いて、

祝賀會を開きます以外に、何か記念事業を致したいといふことが、會員諸君の希望でありまして、その一つとしては會館を造りたいといふ熱望であります。岡山縣から東京の專門學校以上に遊學して居りまする學生生徒が約三千人程あります。その三千人程が各組合に分れ、組合から幹事が二人位宛選ばれて居りまするから、幹事だけでも六十人程あります。それが集つて會務等を相談するといつても事務所がない、現にこの祝賀會を開きますに就て諸般の準備を整へて、皆様に差出す案内狀を書くにも其場所がないので、臨時に或所を借りて漸く設備致しましたといふやうな有様であります。勿論多數の學生達は互に切磋琢磨するにも、研究するにも或は先輩に接觸して其指導を享けんとするにも、其場所なく其機會なく何んとも始末がつかぬので、どうか場所を拵へて欲しい、岡山縣出の陸海軍の方には武學生養成會なるものがあつて僅に數十名の武官生徒の爲に十數萬圓の資金が集つて居り、會館もあるが、その他の學生卽ち三千餘名の一般學生に對しては何んにもない、一人の坐る所さへもないといふやうな憐れな有様であるから何んとかして貰ひたいとの希望でありますので、その會館を造ることを本年の春期總會に於て本祝賀會開催の決議と同時に滿場一致を以て決議したのであります。これは無理からぬことで、同情に堪へぬ次第と考へられます。乍去此計畫は青年會としては大事業であります。又財政上經濟上國難とも稱せらるゝ今日でありますから一層に至難なことに思はれます。けれどもこの五十周年といふ記念すべき時期は只一度だけで毎年廻り來るものでありませぬから、この五十年の時に議を定めて置いて、

或は三年かゝるか、五年かゝるか、將た十年かゝるか知れませぬが、その目的で進行したいといふ意志であります。何れ皆樣に御相談を申上げる時があるだらうと思ひますから、これはどうかお含み置きを願ひたいのであります。

もう一つはこの青年會と岡山縣下との聯絡といふことに就て一つ考へたい、それには五十年間の會の歷史を編纂する、今日の狀況を成るべく審にする、この祝賀會の概況も記述する、尙ほ將來の抱負も書き、これに加ふるに岡山縣から東京に遊學するものゝ爲めに在京の各學校の內容を詳しく載せまして、參考に資するやう、先づ四五十頁から二百頁位の冊子を印刷しまして、岡山縣の小學校以上中等學校乃至は青年團、圖書館各町村役場といふやうな方面に約二千部程配布したいとのことであります。

それには多少の資金を要するので過日來先輩のお方に向つてなるたけお邪魔にならぬだけの御喜捨を願ひたいとお賴みしました所が、相當の金額が集りましたので今編輯委員が編纂致して居ります。就きましては青年會に對する御感想文とか、本祝賀會に關する祝賀の詩とか歌とか俳句といふやうなものを皆樣から頂きたいと思つて居りますから、まだお出しにならぬ方がございますならば成るたけ早く送つて頂きたいと思ふのであります。そして右の寄附金は約貳千圓程集つて、その出捐人數が百四五十名と記憶して居ります。まだ頂けば頂けるのでありませうが、極く喜んで出して頂ける向だけに止めまして强ひては煩さぬことにいたしたのであります。何れ詳しく其收支決算を御報告する積りであります。素

より今回この祝賀會を開くに就きましても初夏の頃より夫々準備に着手し、金も要りますが、これは成るべく就中飲食費の如きは當日の會費とか特別の寄附を以て支辨し、先般お願ひした寄附金は其幾分を祝賀會費の補助に充てますることは止むを得ませぬが其大部分は主として冊子の印刷費等に充當し、一厘一錢たりとも仇疎そかには使はないやうに心掛けて居ります。その邊御諒承を願ひます。

又每年の秋には秋季總會を開く筈でありますが本年はこの祝賀會を開きましたから、秋季總會を兼ねたるものとして別には開かぬことに致します。

それからこの會を開くに就きまして麥酒と飲料を篤志家から匿名で寄附されました、外に岡山縣下より岡山市長守屋松之助君、中國信託會社の原澄治君、陶浪歡太君、第一合同銀行の中村純一郎君、榎昌君、農工銀行の星島儀兵衞君、山陽銀行の武藤泰太君、商業會議所の會頭山上岩二君副會頭の尾谷半三郎君、取引所の多田利吉君、此等の諸君から吉備團子を贈つて參りました。これは曾て本會の會員だつた人もあり又鄕土關係からこの五十周年を祝する爲に皆樣に差出したいと申して澤山贈つてよこされましたから、これはお歸りに名札と引替へに持つて行つて頂きたいと思ひます。鄕土觀念を忘れぬと云ふやうな意味で御面倒でも折角の贈物でありますからお持ち歸りを願ひたいと思ひます。

御覽の通り設備が甚だ不完全でありますが、これは特別會員中より委員に當られた方々が忙しい中を學生を指導してやつて下さつたのであります。又學生委員も學校の課業を持つて居りまする中を非常に

熱心にやつたもので樣子を聞いて見ますと誠にほめて頂きたいやうに思ふのでありますが、さうは申されませぬから甚だ不行屆とお斷り申すやうな次第で、學生はこの五十年の祝賀會に會ふといふことが非常に嬉しく、非常に樂しくそして我青年會五十年の歷史を辱しめぬやう將來立派な特別會員になり國家有用の材になりたいといふ實に純眞な心持ちで多大の熱情を以てやつたのでありますから、所謂設備の不行屆の點は御斟酌あつて、今日は先輩の方も此處で若き人々と共に是非ともゆつくりお過ごしを願ひたいと思ふのであります。

祝賀式が濟みましたならば一同の寫眞を撮ります。これも記念の冊子の中に入れるそうでありますから何うか皆樣が立派に寫つて頂くやうに願ひます。次ぎには模擬店を開き餘興があつて散會致します。これで閉會の辭なり御報告は大要盡したと思ひまするがいよ〳〵祝賀式を閉づるに先立ちまして岡山縣青年會の萬歲を唱へたいと存じます。それを長老の犬養先生にお願ひしたいと思ひます。

五十周年祝賀會に出席して
——諸先輩の感想（順序不同）

以下は學生幹事數名が、當日出席された先輩の方々から、その御感想を伺つて記したのであるが馴れない仕事のため折角御感想を御聞かせ下さつた方々の眞意を表はすことの出來なかつたことを深く御詫び致します。（三浦幹事）

◇黑田 英雄氏　さうだね、ずつと昔だがね、僕もこの會に來て演說をやつたものだよ。昔はその年々の學生の卒業生總代が必ずやる事になつてゐたんでその第一回にやつたんだが思ひだすね……。

今日は又すばらしく盛會だね、五十周年ばかりでなくいつもこんな風でありたいもんだ。それには色々場所を變へたり趣向を變へたりして常に新しい氣持で居られる樣にすればいゝのだと思ふが……。

◇國分 三亥氏　岡山縣は非常に藩派に分れてゐて、備中は備中、美作は美作と中々一致しなかつたものだ。この青年會も初は主として岡山藩のみであつたが、時代と共に封建的氣分が廢れて行き、今日の樣な盛會を見るに至つたのは誠に喜ばしい事だと思ひます。今後とも一層縣一般の統一へと進むことを切望して止みません。

◇阪谷 芳郎氏　懷舊の情に堪へんね。愉快だよ實に。感想つてさつきの演說の通りだよ。

◇淺沼 龍吉氏　感想なんか腹でも拵らへてからだ……」。と右傾の總本山しるこ屋へ。

◇犬養 毅氏　會長初め役員諸氏のお骨折りに感謝するよ。これだけの盛會に出席して實に愉快だ。面白

い。感想つて祝辭を引用して呉れ給へ。之れ以上にはないよ。

◇松崎天民氏　僕は口より筆だよ、いづれ後から隨想欄に何か書いて送るよ。（三浦武夫、田中義夫記）

◇島田茂氏　何もない。只愉快だ突然感想なんて問はれた所で云ふ事もないぢやないか。然し今日は何といふ理窟はなしに實に愉快だ。

◇畠山藏六氏　兎に角愉快と云へば愉快だ。君の良い様に書いて呉れ給へ。會の爲頼まれたら男だ。出來るだけの事はやるよ。委員を拜命してゐるのだからなァー。余輿に對す會員諸氏の感想を聞きたいものだね。

◇矢野恒太氏　近來は一般に愛鄉心が薄らいだやうだ。例へば一家を愛する心は、その家にたよらねばならぬ時愛國心が強くなるものである。又國にたよらねばならぬ時愛國心が強くなるものだ。昔各藩相爭つてゐた時には、鄉土心が非常に強かつたが、現今では是非共岡山縣をたよらねばならぬと云ふ事も少くなり、又他縣人を敵對視すると云ふ事もなくなつた。即ち平等心が全國に擴がり凡ての國民の間に強くなつて來た。從つて愛鄉心といふものは衰へて來て、國と國との差別も薄らいで來た。併し一方人類の本性たる競爭心よりみるときは平和といふものはない。例へば軍縮會議の如く平和を目的としてゐながら一厘一毛を惜んでゐるではないか。平等といつても、之れが無差別となることはない。昔この青年會創設の當時の時代は、平等を强調しながら、官界、實業界に働くものも決して、平等無差別に待遇されたのではない。現在も亦同樣だ。かくて平等でなく無差別でない結果はそこに自然に愛鄉心が盛んになるのではあるまいか。時々岡山縣の先輩は不親切だと言はれるが決してそんなものではない。後輩の中にも先輩の迷惑するやうな者もないではない。それはそれとして近き中には岡山內閣も出現せんとしてゐるのだ。先輩後輩手をとりあつて、將來我が岡山縣のために盡したいものである。

幸にして今日の祝賀會は天氣もよく豫想の如く盛會であつて嬉しい。併し學生が從來の學生と大分變つて、酒、ビールに集らずに、しるこ、おでん等の店に殺到してゐるのは奇である。これも或は「就職」てふものを目前に控へてゐる爲めかも知れないね。（吉田利貞、中村四郎記）

◇金平豐次郎氏　自分は今日の犬養先生を初め三先輩の祝辭に非常に動かされた。その祝辭を今日缺席された一般の人々にも知らせたいと思ふ。

あの言葉を味へば過去の歷史を知ることが出來又將來に對しても非常に意義深きものがあると思ふ。殊に將來ある

青年諸君は、よくその意義を解し發奮し以て將來を期されたい。

◇廣瀨彦太氏　僕は兵學校時代に拾七椀これ（しるこ）を平げて、黃疸になつた事がある。其時軍醫官に拾七ハイしるこを平げたと言つたら、いきなり三つ四つなぐられた事がある。其れ以來は止めて居たが、今日青年諸君が美味さうにやつて居るのを見て、仲間入をして居るが自分の體が往年の比較にならぬのに氣付いた。然し犬養さんはあの御老體で盛に食ひ廻つて居られる元氣をみて、ホト〳〵感心したよ。青年諸君も健康に注意して、大いに奮鬪されたい。

◇坂田愉三郎氏　今日は大變賑やかで實に愉快だ今まで自分はあまりこの會に出席しなかつたが、出席すればよかつたと殘念に思つて居る。此の樣な立派な會が在る以上は、他の鄉黨關係の小さな會は、この會に合併してしまつて、本會の會合度數を多くしたらよいと思ふ。——と今迄の缺席を悔ひ本會の將來の發展に對して盡力されるとの事であつた。（室敏郎、万城登記）

◇岡田忠彦氏　今日犬養先生の祝辭に云はれたやうに岡山縣人は有力な藩閥の援助があると云ふわけではなく皆獨立獨歩で努力された方ばかりで、例へば今日見えてゐる犬養先生、阪谷先生にしても皆さうである。

先刻犬養先生は岡山縣人は身體がわるくて特徵は其の點にあると云ふ樣な御話があつたが、今日大勢で記念寫眞を寫したときに眺めて見ると身體の大きさも骨相も樣々であつて今や將に人種は混交、職業は多種多樣の時代と云ふ事が出來る。之から益々政治も經濟も美術も其他總べてが發達して行けば五十年の後には岡山縣人はあらゆる方面に大きな功績を擧げ得る事と思ふ。さうなれば今日の寫眞は立派な意義のある思ひ出となるであらう。

◇正宗直三郎氏　私はどうかして今日を天氣にしようと念じて昨夜テルテル坊主をこしらへたところ今日は果して立派な天氣になつた。誠に喜ばしい事であつて之は全くテルテル坊主のお蔭だと思つてゐる。

感想と云つてはその外には別に無いが今日の記念會が先輩學生諸氏の努力によつて盛大に行はれた事を感謝してゐる。

◇本山仲造氏　一寸苦い事を云はせて戴きます。今日の會はどちらかと云へば社會的地位を主としてゐて、岡山縣人の人としての長所を從にした傾きがありはせぬだらうか。岡山縣人の特徵として眞に誇るべきは依賴心のない事獨立獨行の精神の强い事であつてどんな偉い人が出た

と云ふ事とは別の方面に見出さねばならない。先輩の云ふ事はもう大抵きまつたやうなもので此の會ではも少し若い人達が青年の特色を發揮して戴きたいものである。（大原總一郎、近藤敏明記）

◇廣瀬　基氏　自分は初めて此の會に出席したが唯愉快、愉快、愉快正に何とも云へぬ氣持だ。今後は出來る限り此種の會合には是非出席する積りだ。

◇窪田靜太郎氏　何にしろ創立當時は會と云つても名ばかりのもので文字通りの貧弱そのものであり、會員も非常に少なかつた。それが一回、二回、三回と度を重ねて次第に隆盛になり玆に五十回となつて實に感慨無量に堪へないよ。その間隨分社會に貢獻する人物をこの會から出し又本日の會合に斯く多數に來會者のあるを見ては更に愉快にたへない。

◇小出五郎氏　全く愉快だ、相當集まつて居る樣だが是れより今少し多く集める事が出來たら如何許り嬉しい事だらう、幼な友達と顏を合せ、たはむれし昔を偲ぶほど嬉しいことはない、兎に角愉快だ。

◇太田　收氏　五十年たつた岡山縣青年會の祝賀會で犬養先生、阪谷先生、窪田先生の御話を聞いて此の五十年間に岡山縣の先輩各位が如何に努力されたかを聞き且其れを思ひ出して只先輩に對し感謝の外はない。

今御話を聞き今日御出席の先輩各位幷びに青年諸君の意氣及び此の岡山縣青年會を通じての岡山縣人の一致而も向上的精神のみなぎるをみて、我が日本帝國は此の岡山縣人に依て左右され岡山縣人の一擧手一投足が我が帝國の進歩消長に非常に關係ある樣思はれる。實に岡山縣青年會は日本帝國の縮圖ではあるまいか。

こゝに我が岡山縣青年會も其の前途に對して又重大なる責任のあるを感ぜられる。（陶淚捷太、廣戸威夫記）

◇池田茂幸氏　青年會が創立五十周年記念大會を擧行するやうになつて、喜ばしいことであります。其の年齡の丁度半分位の頃から私は幹事とし、又委員として、青年會とは頗る親密な關係があつたが、大正三年の初めに東京を離れてから、十餘年間全く御無沙汰となり、數年前に歸つて來まして、十八九年振りで、今年新年會に出席し又此記念大會に參會しましたので、感慨の相當深いものがあることは申すまでもありません。殊に以前私が會務に關係して居ました時分主として、且親しく本會を指導して居られました花房直三郎、窪田靜太郎兩先生の內花房博士は故人となられましたが、窪田博士を演壇の上に見まして、誠に何とも言へぬ嬉しい感が致しました。

又此五十周年記念大會に當つて、私自身も同じく明治十

二年生れであるので、一種特別な言ひ難い感を覺える次第であります。

◇犬丸鐵太郎氏　今日の感想を云へといふのかね。それは君、滿點だよ、夜來の豪雨が今朝になつて忽ち霽れて淸秋の好天氣となつたのは全く天祐だね、君方も嘸ほつとしたでしよう、それに特別會員の出席が百名を超えて居るといふのは珍らしいですね。岡山縣の先輩は冷淡だと云ふものがあるさうだけれど、これでは不足を云へまい。諸先生は鄕黨の後進を愛すればこそ斯く多數に出席せられたのだよ。此大不景氣時代にこれだけの會が開かれたのは、青年會として感謝すべく御同慶といふ譯だね。見給へ、先輩後進相交りて親しみ和らぎ淸談笑語するのは、實に美しいではないですか。

さつき阪谷男爵は、こんな盛大な青年會は初めてだと立話をして居られたが、なんでも阪谷先生の學生時代の青年會の出席者は八人か十人位のことが多かつたさうだ。その代り互に切瑳琢磨して質が良く頗る濃厚親密であつたさうだ。だからみんな大成せられたのですね。會員の多くなつたことは勿論結構のことであるけれど、薄くて散慢になつては感心せぬね、それでは所謂烏合の衆となるからね、これは大にお互に氣を付けねばならぬことですよ。

犬養先生の演說中に、岡山縣人は體格に於ては讓らざるを得ぬも頭腦の働きなれば天下に敵なしといふやうなことを云はれたやうだが、如何にもその通りだらうね。

謝恩觀念に付て窪田先生が話されたやうだが、これは最も大切なことですよ、君父の恩國家社會の恩は申すに及ばず、如何に成功しても恩義を忘れるやうでは人間では無いのですからね。

先刻撮つた寫眞の中から次代の大學者、大政治家、大實業家が現はれねばならぬ。後年あの寫眞を見て誰それの學生時代はこれだと回想する時があらうが、さうなるとこの五十周年記念は益々意義があることになるですよ。君方學生達の前途は多望だ大に努力自重すべしだ。

◇公森太郎氏　私が生れるより、一年前に生れた岡山縣青年會の誕生は忘れようと思ふても忘れられぬ。又其の當時の會員たりし犬養、阪谷兩先生の御話を承ると其の當時の方々が、無援孤獨の中より今日の如き社會上の地位と勢力を築き上げられ、國家及社會に貢獻せられて居る勢力に對して滿腔の敬意を拂はずには居られないと、同時に先進後輩の牽引理論は、韓退之以來世の中の眞理の樣に言はれて居るが、必ずしも、そんな事のみに依賴せずとも、人は努力次第では、自主獨往も出來るといふ證明も、本會創立當時の會員諸君の成績から見て斷言する事が出來る。實によい敎訓を此の祝賀會から得た。

久し振りに會つた舊友達のお互に白く禿げた頭をなでて相語る所を見ると、老境相憐れむのかと思ふと、決してさうでは無く全く懐しさが、こみ上げて若かりし時を想ひ出し嬉しさの餘り少々はしやいで居るのである。おかしなものだ。老人とは子供の大きくなつたものである。古人が赤子の心を失はずといふたのもこんな氣持をいふたのかと思はれる。支那の諺にも衣は新らしきがよく、友は古きがよいといふて居る。古い友人程心地のよいものはない。殊更其の數の次第に少くなるに於てをやだ。皆忙しい人々だから、同じ東京に住みながら閑談する暇が無い、こんな會合で、同郷の老若一所になり、新舊友情の交換をやるのは、此の會を措いて外では求められない。ドライな都會生活も、此の樣な會で濕いのある生活に還る事が出來る。これから度々やることですね。

◇鶴岡伊作氏　私は今度岡山縣青年會創立五十年祝賀會に臨んで花房會長を始め犬養、阪谷、窪田諸先輩の演說を拜聽して少からず感興を覺えた。先づ犬養先生がこの位集まれば成程目出度いに相違ないと云ふことを冒頭に自分が出京當時は岡山縣青年會と云ふても集まるものは五人か七人で別に先輩と云ふものもなく自分の運命は總て自分で開拓しなければならなかつたと述べられたのは青年諸君には如何に響いたか知らぬが、私は先生にこの決心があつたればこそ所謂苦節何十年かを經て今日天下の大政黨たる政友會の總裁をかち得られたのだと直感した。次に阪谷先生は青年會創立當時は自分も少年であり犬養先生も若かつたが併し犬養先生は今日腰が曲ても尙ほ大政黨の總裁として活動を續けられ自分も社會の爲めに出來得る丈努力して居ると述べられたのは少くとも我岡山縣の爲めに萬丈の氣を吐かれたもので青年諸君も之に依て少からざる暗示を得られたことゝ思ふ、次に窪田先生は青年會の效能に關する外間の批評に就て稍々詳細に感想を述べられた。獨り岡山縣青年會に限らず此種の會合には兎角何等の效能がないとか折角出席しても先輩が大きな顏をして居るから面白くないとか云ふやうな批難を聞くのであるが、私は之等の人々に對しては常に斯く反問して居る。それは青年會に出席するのが無益であると云ふならば然らばそれ等の人々は外でその間に如何なる有益な事をして居るか。私を以てすれば有益どころか無意義若くは劣惡の事をして居る場合が少くないであらうと思ふ。少くも青年會の如き會合に出席して鄕黨先輩の風貌に接し又活潑なる青年諸君の意氣に接することは眞に人生の樂事でなくてはならぬ。私は平素餘り同縣の先輩の所へ出入したことがなく又隨分お世話になつた方々の所へも兎角御無沙汰して居るが青年會の如き會合には努めて出席して居る。從來青年會の席上で往々先輩

に對する批難の聲を耳にしたことがあるが併し青年會に出席する程の先輩諸君は必らず我々と同感の方であらうから餘り面と向て攻擊の辭を弄するのは當らぬと思ふ。それよりも不都合なのは鄕里に對して何等の關心をも持たず無論青年會等にも出席しないと云ふやうな連中で此等の人々こそ十分攻擊する價値があると思ふ。兎に角今度の祝賀會は會長、幹事其他殊に學生諸君の盡力で有らゆる社會的差別有らゆる年齡的差別を超越して一日を最も樂しく過したことは誠に五十年記念會にふさはしい許りでなく青年會の前途に取りても少からざる效果を及ぼすであらう。

報告

一、祝賀會當日左の祝電を授受しました。厚禮申上げます。

在函館　矢吹傳二氏
シユクス五〇ネンオカヤマケンジンカイヤブキ

二、祝賀會當日摸擬店の食品殘部を全部東京養老院に寄贈致しました處左の感謝狀を受けました。

岡山縣青年會
御中

一、團子壽しそば甘酒等
右者老衰癈者救助ノ御思召ヲ以テ御寄附被成降候段感佩ノ至リニ不堪謹テ感謝ノ意ヲ表シ候也

昭和五年拾月廿六日
財團法人　東京養老院

十月二十六日祝賀會出席者氏名（五十音順）

先輩の部

明石照男　秋岡俊吉　淺田源一　淺沼龍吉　安達若松　池田茂幸
市浦貞次郎　稲川次郎　稲葉榮之輔　犬養毅　犬養六郎　犬丸鐵太郎
犬丸秀雄　入江縫　大橋信吉　太田收　小川義章　岡崎慶次郎
岡千賀松　岡上爲右衛門　岡崎常吉　岡田榮太郎　岡田忠彦
岡本武三郎　荻野正孝　尾崎隆三　河村曉　川端審三　川邊吉彦
川上幸一　影山藤作　片山庄二　金平豐次郎　川野好恭　龜高德平
龜山孝一　公森太郎　木村兼好　上山辰二　宮谷武志　楠廉平
小出牧　小西正二　小林彦五郎　日下吉平　守屋荒美雄　小松原健吉
佐藤臣少　坂田愉三郎　阪谷芳郎　窪田靜太郎　三宅芳郎　高塚謹四郎
高貝顯治　綱島覺左衛門　鶴岡伊作　小山勝太　守屋義太郎　吉田英雄
長田曉玄　中澗春太郎　中田政雄　鹽田泰介　山野好恭　鳥取快太
橋本卯太郎　花房太郎　花房滿三郎　高草平助　道家齊一郎　中村芳治　野崎一雄
廣瀨彥太　廣瀨基　藤澤一孝　德田光雄　畠山藏六　林千代治　原田芳太郎
前川遜　正宗直三郎　松浦卓逸　難波元弘　藤島宇太　藤森雄平　堀尾萬三郎
美土路昌一　三宅靜一　三宅德業　藤森雄平　松崎天民　間野浩　松本佐一
本山仲造　森清吾　守屋此助　宮谷武志　三宅芳郎　安井誠一郎
矢野恒太　山岡祐章　山田準　山野好恭　吉田英雄　本松雅雄
横山昌次郎　渡邊勝三郎　弓削幸太郎

學生の部

青山季晴　秋山托夫　淺尾寬一　荒木健三　安東喜四夫　伊與信夫
池上輝雄　池田早苗　池田光敏　石原豐米　今枝竹次　上田義夫
植木知之　植野國一　鵜塚壽夫　宇高照輔　梅野典平　浦上進
江川孟　江口最　榎本操　大月勤　大橋多計三　大原總一郎
太田浩　太田美津男　太田龜一　大西廣志　小川泰　岡田秀男
岡野富士雄　岡野實　岡本勇　荻野正二　尾島克巳　川上重太郎
川野太郎　加賀山潔　片岡曆夫　片山夏治　金澤七十四　萱野喬
狩谷淨太郎　菅熊夫　木山博精　木村孟敏　木村勇　日下精
草野博志　國富郁夫　小池寒石　小橋確治　小阪東彥　近藤通朋
近藤敏明　近藤勝幹　近藤金之助　後藤博　金万弘　佐藤甲子郎
齋藤淳　最相毅　坂田芳衛　阪本德三　阪本泰護　陶浪捷太
田中義男　田中弘　田淵修　高島克巳　高橋松郎　高見專四郎
武村宏一　谷口靜夫　谷口誠　綱島勝彥　津高毅　坪井昌夫
寺田克巳　土岐定一　時實利彥　中島正弘　長江久次郎　中村四郎
中野晴海　仁木士弘　仁科正吾　西崎直正　西下止夫　新田鑛二
野田遙　野宮一男　長谷川淺一　橋本晃一　橋本恒夫　原田親
平田英一　廣田弘　藤原清文　藤野哲男　堀正己　間野茲一
槇野伯之　牧野成治　松岡豐　松本陣三郎　丸尾毅　万城登
三浦武夫　三宅京二　宮田本英　虫明卯三郎　室敏郎　免出礦
森強一　森田謹一郎　森安二郎　森田稔　安田泰二郎　安那泰二
山足稔　山田伍郎　山成克人　山本巖　吉田利貞　吉田內次
米田儁　渡邊正夫

五十周年記念事業委員（祝賀會當日委員ヲ兼ヌ）（五十音順）

淺沼龍吉　有松昇　犬丸鐵太郎
太田收　大橋信吉　荻野正孝
金平豐治郎　龜山孝一　川端審三
坂田愉三郎　島田茂　道家齊一郎
中川蕃　花房太郎　畠山藏六
平松市藏　正宗直三郎　美土路昌一
松本佐一

祝賀會普通會員係員

總務　佐藤甲子郎　受付（接待）主淺尾寛一　松本陣三郎
會計　主淺尾寛一　兼近藤敏明　近藤勝幹
兼片岡暦夫　森安二郎　木山博精
宇高照輔　池田早苗　兼萱野喬
矢吹信夫　植木知之　署名錄係　主陶浪捷太
津高毅　鳥取快太

中村四郎　廣戸威夫　西下止夫
兼堀正巳　兼木山博精　藤野哲夫
探訪記錄係主三浦武夫　兼吉田利貞　横田信夫
万城登　兼佐藤甲子郎　野田遙
室敏郎　片岡暦夫　食事係主加賀山潔
兼田中義男　兼近藤勝幹　太田浩
堀正巳　萱野喬　池田光敏
兼陶浪捷太　餘興係　主吉田利貞　宮田本英

五十周年記念祝賀會收支決算報告

收入之部

一金貳千參百九拾七圓五拾錢也

內譯

金壹千五拾圓也　記念冊子（昭和五年度會報附錄）
金貳千壹百貳拾八圓也　特別會員寄附金（氏名金額別記ノ通リ）
金貳百六拾九圓五拾錢也　祝賀會會費
合計金貳千參百九拾七圓五十錢也

支出之部

一金貳千貳百四拾七圓拾錢也

內譯

金貳千貳百貳拾八圓也　印刷費（案內狀、ポスタ一其他）
金貳千壹百貳拾八圓也　印刷費及發送費
金七百貳拾參圓五拾八錢也　祝賀會費用

植物園借料	五四、〇〇
會場設備費	八〇、〇〇
模擬店費	四六、七八
餘興費	一〇、〇〇
雜費	二〇、八〇

金七拾參圓也

金壹百九圓七拾參錢也
金七圓參拾六錢也
金七拾九圓拾九錢也
金七拾壹圓七拾四錢也
金五拾壹圓四錢也
金四拾五圓也
金拾四圓九拾六錢也
金貳拾壹圓五拾錢也
合計金貳千貳百四拾七圓拾錢也
差引殘高金壹百五拾圓四錢也　經常費（昭和五年度）繰入

右之通相違無之候也

昭和五年拾貳月十日

監事　荻野正孝
監事　畠山藏六
會計幹事　淺尾寛一

諸通信費（切手、葉書等）
電話代
交通費
文房具費
幹事及委員集會費
事務所借料（三ヶ月分）
集金郵便依託料
寫眞代其他雜費

五十周年記念祝賀會寄附金出醵者氏名

金額	氏名（五十音順）
金拾五圓	青木鐵太郎氏
金參拾圓	明石照男氏
金拾五圓	赤木朝治氏
金貳拾圓	秋山定輔氏
金貳拾圓	淺沼龍吉氏
金五圓	淺木兵一氏
金五圓	淺野富豪氏
金五圓	有松昇氏
金五拾圓	阿曾沼明氏
金拾圓	池田宣政氏
金貳拾圓	池田茂幸氏
金拾五圓	石原健三氏
金五圓	磯部愉一郎氏
	出石猷彦氏

金拾圓	稲葉榮之輔氏
金貳拾圓	犬養毅氏
金拾五圓	犬養六郎氏
金貳拾圓	犬丸鐵太郎氏
金五圓	井出治氏
金拾圓	井上與三郎氏
金貳拾圓	今井田清德氏
金拾圓	入江縫氏
金參拾圓	宇垣一成氏
金五拾圓	馬越恭平氏
金五圓	海老原堅氏
金拾五圓	太田稔氏
金貳拾圓	太田收氏
金拾圓	大谷藤次郎氏
金五圓	大島秀雄氏
金參拾圓	大森吉五郎氏
金參拾圓	大橋信吉氏
金貳拾圓	大山斐瑳麿氏
金貳拾圓	小川鄕太郎氏
金拾五圓	小原重胤氏
金拾圓	岡喜七郎氏
金五圓	岡三藏氏
金五圓	岡上爲右衞門氏
金拾圓	岡崎慶治郎氏
金拾圓	岡田榮太郎氏
金拾五圓	岡田忠彥氏
金貳拾圓	荻野元太郎氏
金拾五圓	荻野正孝氏
金拾五圓	金平豐次郎氏
金拾五圓	龜高德平氏
金五圓	龜山孝一氏
金拾圓	龜山俊藏氏
金拾圓	川端審三氏
金貳拾圓	河村曉氏
金拾圓	河合廉一氏
金五拾圓	木村清四郎氏

金拾五圓
金拾　圓
金拾　圓
金貳拾圓
金拾五圓
金貳拾圓
金貳拾圓
金拾　圓
金五拾圓
金參　圓
金拾五圓
金拾　圓
金拾五圓
金貳拾圓

岸本綾夫氏
岸本鹿太郎氏
公森太郎氏
日下吉平氏
窪田靜太郎氏
黑田英雄氏
高野重三氏
小西正二氏
小山善太郎氏
小松原健吉氏
小山松吉氏
國分三亥氏
阪谷芳郎氏
佐藤壽衞氏
佐々木良一氏
佐々廉平氏
坂田愉三郎氏
昌谷彰氏

金貳拾圓
金拾　圓
金拾　圓
金參拾圓
金拾　圓
金五　圓
金貳拾圓
金五　圓
金拾五圓
金拾　圓
金五　圓
金拾五圓
金拾　圓
金貳拾圓
金五　圓
金貳拾圓
金拾五圓
金五　圓
金貳拾圓
金拾五圓

鹽田泰介氏
春藤嘉平氏
白岩龍平氏
島田茂氏
霜山精一氏
杉琢磨氏
杉榮三郎氏
田中寛一氏
田邊爲三郎氏
田村剛氏
高杉晋氏
高橋貞三郎氏
次田大三郎氏
津下紋太郎氏
鶴岡伊作氏
津田弘視氏
綱島覺左衞門氏
道家齊一郎氏

金拾　圓
金五　圓
金拾　圓
金拾　圓
金拾五圓
金拾　圓
金拾　圓
金貳拾圓
金參拾圓
金拾五圓
金拾五圓

土居助一氏
豐福環氏
中桐春太郎氏
中島權吉氏
中川蕃氏
永井秀太氏
永原伸雄氏
難波元弘氏
難波清人氏
二宮治重氏
西崎弘太郎氏
西虎夫氏
野崎廣太氏
野中勝明氏
林癸未夫氏
花房太郎氏
畠山藏六氏
原田芳太郎氏

金拾　圓
金拾　圓
金貳拾圓
金貳拾圓
金參拾圓
金拾　圓
金拾　圓
金拾　圓
金貳拾圓
金五　圓
金貳拾圓
金拾　圓
金五　圓
金拾五圓
金拾　圓
金五　圓
金拾五圓
金貳拾圓

原田熊雄氏
橋本卯太郎氏
平松市藏氏
平沼淑郎氏
平沼騏一郎氏
廣瀨基氏
藤島宇太氏
藤島太麻夫氏
藤田讓氏
藤森雄平氏
星島二郎氏
松平康春氏
松谷謐三郎氏
松村清吾氏
正宗直三郎氏
丸尾剛氏
前川遜氏
三宅德業氏

金貳拾圓　水川復太氏
金拾　圓　水谷　武氏
金拾五圓　美土路昌一氏
金貳拾圓　森本邦治郎氏
金貳拾圓　守屋此助氏
金貳拾圓　守屋荒美雄氏
金拾　圓　本山仲造氏
金五　圓　山田弘倫氏
金拾　圓　山崎定太郎氏
金五　圓　山岡祐章氏
金拾　圓　山野好恭氏
金五　圓　山室榮作氏
金拾　圓　柳井貴三氏
金五拾圓　矢野恒太氏
金參拾圓　保田次郎氏
金拾　圓　湯淺武孫氏
金貳拾圓　弓削幸太郎氏
金拾五圓　横山昌次郎氏
金拾五圓　渡邊勝三郎氏
金五　圓　渡邊行三氏
金五　圓　和田一郎氏

備考
氏名頭書ノ拂込金額ハ昭和五年拾貳月拾日迄ニ受入レタル額ナリ。

右之通相違無之候也
昭和五年拾貳月拾日

監事　荻野正孝
監事　畠山藏六
會計幹事　淺尾寛一

（カット柚木久太氏）

假事務所日記から

青年會はまだ眞の事務所を持つてゐない。會長邸に置いて貰つてゐる現狀である。今秋は事務頗る繁忙とみて會長に相談の結果常務幹事が電話のある家と見當をつけ種々の點を考慮して場所を神田に求め、宿屋の一室を契約して本會臨時事務所かこゝに設けられた。所は神田區表神保町十番地文運館方である。（佐藤幹事）

十月三日　金曜日

夜七時から幹事の最初の會合を行つた。陶浪、三浦、淺尾、片岡　池田、森安、近藤、太田、加賀山、吉田、中村、佐藤の十二名出席して先づ出勤日割を定め、當番は責任を以て定められた日の午後事務所に詰める義務をお互に持つことゝなつた。日割左の如し。

日曜日　佐藤
月曜日　三浦　佐藤
火曜日　片岡　池田
水曜日　加賀山　森安　淺尾
木曜日　近藤
金曜日　淺尾　中村
土曜日　佐藤　吉田

會報の編輯は陶浪、三浦兩君が主任として之を行ふ事とし、三浦君は編輯長としてすべてを立案し、陶浪君は專ら原稿集めに努力することゝなつた。他の幹事は各自幾人かを引受けて寄稿を依頼することゝ定まる。

會員名簿は淺尾君が特別會員の部を一人で引受け、沿革は佐藤君が執筆するなど手筈はきまつた。

各幹事の所屬校の學生名簿は幹事に頼んで正確と充實を期し、學部學科を明らかにする代りに、移轉性に富んだ學生の住居は之を省く事に決した。

大會當日は美土路氏に依頼して速記者を雇ひ式辭を記錄したい。大會記事係主任に陶浪、木山兩人を煩はしたいなど相談があつてから十時懇親會を開いて散會したのが十二時であつた。

以下は當番幹事の記した日記である。

十月四日　土曜日

出勤者　吉田　佐藤　三浦　陶浪

事務室へ來たがガランとしてゐて何もない。上記の四人集つて先づ備品として文房具、紙類、郵便切手其他を購ふと相談したが會計方不參につき、仕方なく一同近所のラヂオ屋の店頭に立つて慶法野球戰の放送に耳を傾ける。法政の吉田君は戰況が自校に有利なので嬉しげに微笑を洩らしてゐた。

十月五日　日曜日

佐藤一人出勤す。

日曜日には誰でも遊びたい。幹事と雖も人の子だから休日をのんびり暮らしたいのは當り前だ。併し青年會の仕事には安息日も何もあつたものではない。幸か不幸か日曜日の當番は未だ事務用品のない室に籠つて退屈せざるを得なかつた。一人では全く何も出來ない。やはり二人以上來た方が能率的だと思ふ。今日の計算によれば寄附申込總額は金壹千四百〇參圓であつた。

十月六日　月曜日

三浦、陶浪、佐藤の三人來る。淺尾君病氣の由。御靜養第一に祈る。淺尾君より金五圓封入の速達來る。之を資金に備品を購ふ左の如し。

筆三本、原稿紙百枚、日記帳一冊、鉛筆二本、墨汁、書簡入、簡易黑板、白墨、糊、印肉、海綿、小刀、三錢切手五十枚。

三人協力して新入會員勸誘狀八十四枚を發送す。三人が晩食にありついたのは午後八時前であつた。疲れたけれど働いた後の食事は全くうまかつた。

本日三浦編輯主任は會報表紙圖案及び大會ポスター圖案を考へて呉れることゝなつた。集金郵便の掛は淺尾會計子の專任と決つた。

十月七日　火曜日

片岡　池田　三浦　淺尾　佐藤出勤

佐藤、淺尾の兩君は朝から事務所へ來た。種々の書類を整理した後、二人で寄附金は集金郵便による旨の通知狀を發送した。病後の淺尾君はまだ青い顔してゐて元氣に乏しい。當番の二人が來てから新入會員勸誘狀を五十通ばかり仕上げて四時半歸る。

夜六時半から九日の委員會のプログラムを決める爲め會合を開く。本日出席の筈の犬丸氏都合で缺席され、結局陶浪、三浦、佐藤、近藤、森安の五人で協議を行つた。

プログラム及び決定せる寄附者の氏名の印刷は淺尾、近藤、森安の三君に囑す。八時半散會。

十日八日　水曜日

當番　加賀山　淺尾　森安

明日の委員會のプログラム竝に寄附者名簿の印刷に取かゝる。一度出來上つたところ、重大な過失のあるのに氣づいて一同

大車輪で再びやり直した。二度目の寄附者名簿に脱落してゐたある役員の氏名を眺めて三人は顔見合せて安堵の息を洩らした事である。時に午後八時であつた。

十月九日　木曜日

陶浪、近藤の兩君は大橋氏からの電話により、勸銀に赴き大橋氏、坂田氏及び歌舞伎屋の小僧と五人集つて大會當日の食事に就いて協議した。本日委員會が朝日新聞社で開かれた。

十月十日　金曜日

出勤者　近藤　佐藤　淺尾　陶浪　三浦

陶浪と佐藤は高杉晋氏を會社に訪ふてビール、シトロンの寄附を願つた。御多忙で會へなかつたがビール一五〇リットル及びシトロン十二ダースをテント設備と共に御寄附下さる事になつた。

畠山氏より電話あり。大倉鑛業本社にて佐藤は餘興について相談した。出し物は、たぬきや、歌奴及び天洋の三つとし百圓の豫算である。

三浦は凸版印刷會社へポスターの相談に行き、淺尾は集金郵便の件にて神田郵便局に急行す。

金平氏と正宗氏とが事務所の狹い室を訪問され、案内狀文案を練り、食券の雛型をつくり、大會プログラムを作製す。

十月十一日　土曜日

佐藤は朝犬丸氏を訪ひプログラム、案内狀文案について相談す。會報編輯方法に關して同氏の御意見の積極的開陳をきいた。

ポスター三百枚を凸版印刷會社に註文す。

原稿再募集狀を百枚印刷す。

淺尾は第一銀行支店から金を貰つて來た。案内狀發送費其他である。正宗氏と犬丸氏と御相談の結果、大會プログラムは若

于訂正された。大會當日の徽章は正宗氏が註文して下さつた。署名用紙また然り。清酒は三宅酒店から廉價で購ふことになるらしい。正宗氏の御盡力を深謝する次第である。

十月十二日　日曜日

三浦　陶浪　佐藤　加賀山の四人來る。

三浦は原稿再募集狀を八十枚程發送した。會報編輯委員は記念號會報の雛型作製。原稿を貰ひに行くにつき、分擔した氏名を表にして記す。

十月十三日　月曜日

忠誠堂へ案内狀の印刷を註文す。そのゲラ刷を持つて佐藤は正宗氏を訪問、御意見を承り、案内狀の樣式につき相談す。

十月十四日　火曜日

片岡　佐藤出勤

忠誠堂で案内狀を新たに組直させる。角封筒を用ふることになつたのだ。植字工には氣の毒であつたが、督勵して今日中に校正を終へんとす。忠誠堂の大森氏と相談して紙を精選す。中々理想通りの品が見つからなかつた。

夕刻ポスター三百枚到着。かなり立派である。

十月十五日　水曜日

陶浪は會長を訪問、佐藤は忠誠堂の工場に行つて植字工に種々希望を述べた。技術が上手でないから中々手間がかゝるのだ。やつと滿足出來さうなので案内狀、プログラム、封筒各七百枚を印刷せしむ。

本日まで寄附應募額は金壹千六百四拾參圓に及んだ。まだ〳〵增す樣子である。

十月十六日　木曜日

出勤者　三浦　陶浪　佐藤　片岡

朝からやつて來て案内狀の上書をやる。遲筆で中々捗どらぬので中央職業紹介所から筆耕生をよんで來る。五百枚あまりの案内狀を發送するまで、三浦　陶浪　佐藤の三人は文字通り大奮闘をした。神田郵便局へ持參したときは夜も既に十時であつた。

十月十七日　金曜日

淺尾　森安　片岡　佐藤　三浦　陶浪と今日は大分集つた。案内狀の發送殘りを書く。三浦と陶浪とは表紙圖案の件で佃氏を訪ふたけれど留守で會へなかつた。

十月十八日　土曜日

吉田　淺尾　三浦　堀　津高

今日は早慶野球戰の行はれる日。早大生の淺尾、近藤、森安君などは全く何も手につくまいと思はれる學校にストライキさへ起らねば今頃は神宮球場で母校のために熱聲を絞つて應援してゐるだらうに。

大會の準備に暇をとられて會報編輯事務が大分遲れた。原稿の集りは豫定の半ばに達したのみだ。實に氣が揉める。明日から專ら編輯に携はりたい。と思ふ——大會準備も一應整つたやうだから。

三浦は大會ポスターを貼布して貰ふ人を數日前から探し廻つてやつと今日頼む事が出來たので、ポスター一枚に葉書三枚入封筒を添へる事とし、津高君と堀君を頼んで來て二百枚の封筒に葉書を入れた。本會として初めての街頭宣傳だ效果百パーセントならん事を祈る。全く忙しかつた。近頃のやうな忙しさは今まで經驗した事がない。うすら寒い事務室に唯一人坐ると忙しさの中の寂しさがひし〳〵と身に迫るやうだ。

十月十九日　日曜日

出勤　三浦一人

絶好の秋晴。早慶第二回戰の日。この日事務室に籠ることの憂鬱さよ。本會幹事の何割かを占める早稲田は不運にも慶應に

再敗した。淺尾、森安、近藤、片岡の諸君は悄然としてゐる事だらう。今日からは編輯事務だけだ。幹事には夫々手分けして先輩學生の原稿督促に出て貰ふ。會報雛型によつて既に集まつてゐる原稿の整理を行つた。佃政道氏が三浦の下宿に來訪されて表紙圖案を考へて下さる事になつた。氏は岡山市出身。圖案には素晴らしい手腕を持つてゐられる。

十月廿日　月曜日

陶浪　三浦　佐藤　淺尾　津高　廣戸　出勤。

先輩學生委員名簿各五十枚及び委員プログラム二十五枚を刷つた。

十月廿一日　火曜日

陶浪　三浦　淺尾　吉田　廣戸　佐藤出勤　松本佐一氏來訪。

淺尾は會長訪問。集金郵便を出す。

忠誠堂で食券五百枚を刷る。色は黄である。原稿を書改めたり誤字を正したり三浦君は一同を督勵してゐる。大會出席通知七十八名ある山。盛大なのは幾ら盛大でもよい。學生中最も出席者の多い早大が騒いでゐるのが心配になる。學生が登校しないから、宣傳がとゞかないらしいのだ。

十月廿二日　水曜日

佐藤　三浦　陶浪　加賀山　廣戸　森安　田中　淺尾出勤。

今夕朝日新聞社で祝賀會のための最終委員會を開くため、大童で協議事項をプリントにする。

十月廿三日　木曜日

淺尾　佐藤　三浦　田中　加賀山　陶浪　近藤出勤。

岡山縣人社の谷川要史氏來訪。各員諸所を訪問して或は寄附金募集に、原稿を貰ひに歩き成功を收めてゐる。

十月廿五日　土曜日

愈々大會前日だ。幹事一同集つて明日の手筈をきめる。四月以來こればかりに力を注いで來た大會の準備に我らは能ふ限りの事は盡した積りである。この上は來會者の多數を望むばかりだ。三百五十人迄は大丈夫準備が出來た雨が降つたら二百人位かなど想像してゐる中にぐづついてゐた空が今にも泣き出しさうになつたと思ふ間もなく無慙や容赦なく銀線は數を增して本降りになつて了つた。只ラヂオの天氣豫報が明日午後からの好轉を傳へたので一縷の望を托して明日を待つ。

十月廿六日　日曜日　祝賀會當日

十月廿七日　月曜日

淺尾　佐藤　陶浪　三浦　近藤　萱野　田中　森安　池田　加賀山出勤。

昨日祝辭をお述べ下さつた方にお禮に行く。

岡山から吉備團子を御寄贈下さつた十氏に禮狀を出す。

十月廿八日　火曜日

近藤　淺尾　片岡　森安　加賀山　陶浪三浦出勤。

祝賀會當日缺席された委員諸氏の寫眞を戴きに出かけた。片岡は有松氏を、陶浪、三浦は島田氏と平松氏を訪問。之は但し淺沼氏より借用のカメラで撮影したのである。出來映え如何。三浦の腕前拜見致したきものである。兩人は犬丸氏を夜訪問す。

十月廿九日　水曜日

三浦　廣戸　佐藤　片岡　田中出勤。陶浪は原稿集めに諸名士を訪問す。

三浦、田中は會報委員會の件につき美土路氏を訪問す。

十月卅日　木曜日

淺尾　片岡　森安　陶浪　三浦出勤。

領收書を發送す。夜花房會長の御招待で神田今文で會を催した。大變愉快に和氣靄々裡に會を閉ぢた。一同絹地に寄せ書して會長に贈呈した。

十月卅一日　金曜日

森安　淺尾　中村　三浦　陶浪　万城出席。

今日は續々集る原稿整理のため忙しかつた。この日午後二時半雨中を會長は北海道に御出發になるので三浦と陶浪は見送りに行つた。

十一月と十二月

十月だけの心算の假事務所が、祝賀會の後始末や、會報編輯の爲めに遂に十一月十二月と二月借りる事にした。この二月間の學生幹事の努力は實に大なるものだつた。毎日〳〵日曜もなく祭日もなく假事務所に出て、會報編輯事務に沒頭した。この體驗からしても、會館設立を痛感させる。會館が出來なければ、常設の事務所を借りたいと幹事一同は、希望することが切である。假事務所の爲めに、祝賀會の諸事業は、スラ〳〵と上成績に運んだのだ。會館設立運動は、どうか後の幹事諸君實現へ向つて突進していたゞきたい。横道にそれてしまつたが、十一月と十二月の日誌は毎日原稿の整理と督促と印刷屋への交渉に全てが塞がれてゐるので、紙面の節約を旨として掲載しない事にするが、實際學生の仕事としてはよくこれだけやれたものだと、いさゝか自讃し、青年會の發展を祈つて了りとする。

漫語の二三

◇甘酒と犬養先生。

熱い甘酒をふきながら

先生「此の甘酒は旨い。何處のだ？」

甘酒屋の主人「ハイ、此は日本橋製で御座います。」

先生「道理で旨いと思つたて、田舍でも秋祭りには、甘酒を造るが、どうも田舍のはあまり甘過ぎて、ひつこくていかん。此は味の調和が良くとれとる。」

幹事「先生もう一杯如何ですか。」

先生「イヤ、一杯で結構ぢや。若い者の様にあまり澤山はやれん。」

◇祝賀會當日模擬店賣上狀況。

埋草子の探査するところによれば、祝賀會當日各模擬店賣上げからみた禿頭組と青坊主組の食ひぶりを紹介するなら以下の如し。

しるこ
ビール
し　禿頭組に大多數獲得さる。

サイダー――青坊主專門。

そば
コーヒー
おでん　青坊主大多數を占む。

やきぶた
日本酒　半々なり。これ萬人の好む處か。

以上によつての諸氏の感想や如何に。

◇その後に來るもの？

岡山木堂會幹事の宮谷武志氏。餘興の時松旭齋天洋孃に求められるまゝに、上衣を渡すと香りばかり强い安白粉だらけの上半身を上衣につゝんだが宮武氏歸宅後の家庭爭議が思ひやられる。でも御歸宅までには白粉の香は失せたるや氏の言如何。

（氏太久木柚トツカ）

隨想

まへがき

五十周年記念事業委員會で、本年度の會報を記念號として、發行することになり、春季に發行する規定を繰り下げ祝賀會後に、發行することになりましたので、會報編輯委員は、其準備にとりかゝり、先ず六月二十六日付にて、特別會員諸氏に、主に左の事についての、御感想を御願ひ致しました。

一、御近況
一、本會に對する御感想
一、近時青年に對する御感想
一、郷里に對する御感想
一、其他詩、歌、漫筆、等

これについては、次の如く多數の御寄稿に預りまして、感謝の外御座いません。厚く御禮申上げます。掲載は一切玉稿の到着順にいたしました。（三浦幹事）

○

本山荻舟

一、働くことの法悦を感じて、筆と庖刀とをかたみ代りに、不斷の努力をつゞけてゐます。おかげで身神共に至つて健全。貧乏などは苦にもせず、また苦とも思ひません。
一、近頃お仲間に加へていたゞいたばかりで、別に感想もありません。
一、今にはじまつたことでもありますまいが、依頼心の強いのと、利己主義の旺んな人とには、いつも共鳴でき兼ねます。
一、早く歸農して、閑雲野鶴を友としたい希望ばかり、それほど郷里をなつかしく思つてゐます。
一、近頃のわたしの信條。
　イ、道理は行はれる。
　ロ、自分勝手は行はれぬ。
　ハ、方便は相手の爲になる場合に限り用ひる。

（著述業）

少壯會員に寄す

山野好恭

此頃は萬事が尖端的である。昨日迄飴をしやぶつてゐたと思つた子供が早くも學校へ通ふ樣になつて、ヤレ「カロリー」だの「メートル」だのと舊弊の親父を煙に卷く。煙に卷かれ乍ら親父は大いに感心してゐる。

私から見ると子供か孫位の後輩の青少年も新知識といふ點になるとどうしても我々よりは先輩である。それで私は常に煙に卷かれ乍ら大いに感心してゐるのである。子供に煙に卷かれた親父は非常に子供の前途に望みをかけるが、扨て大きくなつて親父を滿足せしめる樣なのは頗る稀な樣だ。わが青年會員諸君！　この親父の期待に對して裏切らざらん事を切に希望する次第である。

（前帝國新報社長）

○

浅井啓行

小生昨年來、合資會社交通商工社代表社員として主として「コーヒー」豆販賣を開始し、相當販路を擴め來りしも、今夏純正シロップ（東洋シロップの商標あり）の發賣を試みし處、頗る盛況を呈し製造能力需用數に足らざるの憾あり、士族の商法も、誠意と努力とに依り案外の成果を收めらるゝものと益々奮闘中。

又日本旅行社(本郷駒込神明町に事務所有り)會長として、東鐵の推薦にて先頃超特急車の試乘を試みたり。同社は月掛會費を以て會員の旅行熱を滿足せしめ、別に團體旅行の引受け御世話をなす等他の臨時旅行團體引受屋と異り親切を標語とし、一歩々々堅實なる歩みを續けあり、創業以來約一年半日下の會員約二千を突破す。御利用を願ひます。右の次第にて頗る愉快に繁忙なる生活を續けて居ります。

一、本會に對する感想

度々出席致したきも多忙なる生活の爲常に其機を失するを憾む。

一、近時青年に對する感想

勞力を惜しみ、安逸を貪り、向上の意氣に缺くるもの多きを悲しむ。

一、鄕里に對する感想

生後東京に成人せしを以て深く鄕里を解せざるも他縣人に比し團結互助の精神に乏しき所なきか。

(陸軍中佐、交通商工社)

○ 廣瀨彦太

小生は赤磐郡豐田村の出身で、中學校は閑谷黌(今の閑谷中學校の前身)を出ました。そして身を海軍々籍に置き海軍大佐を以て、先年之を退き、今では海軍の豫備役士官を以て、組織する財團法人有終會の常務理事を勤め、專ら引き續き海軍の內外軍事の研究を致してゐます。此の方面のことで、御研究御調査の必要のある青年諸君に對しては、一日の長を以て、及ばずながら、なにがしか力になることが出來ようかと考へてゐます。

青年に對する感想

こんなことは、自分のビジネスとかけはなれてゐるので、何とも權威のあることは申し上げられません。併し忌憚なく云つて見れば、一般に近頃の青年は、立志の精神に缺けてはゐないでしようか? 又理論に走り過ぎてゐるのではないでしようか?

在學中否な入校の初めに當り、何が目的であるかの考へが足りないのではなからうか? 「理論」も一面「實際」の先驅であるから、必要には違ひないけれども、世の中に處するには、理論一片では舟を陸に操るが如きことになりはしないでしようか?

(海軍大佐有終會常任理事)

○ 谷壽夫

一、近況

目下國際聯盟陸軍及空軍代表の新職務を以て渡佛航海中に有之候、近き將來の陸軍空軍の軍縮問題を擔任し大會議に善處せんと覺悟しあり。

一、青年會に對する感想

近時花房閣下御努力に依り大いに面目を一新せるも、未だ不振の狀態を免れずと考ふ。

一、近時青年に對する感想

潑剌たる意氣に乏しく殊に國家觀念は零と云つて可なり。須らく日淸日露戰に依り我國を一等國に導びきたるに想到して、大に奮起して大局を誤らざるを望んで止まず。

一、鄕里に對する感想

同鄕の先輩に要職者少なからざるも、後繼者に乏しきを如何せん。青年諸君の奮勵努力を要望す。

本年秋大演習は鄕里に於て行はせらる。

蓋し明治四十三年以來の事なり。吾人は大に此名譽を荷ひ皇室の彌榮榮を望むものなり。

(陸軍少將)

○ 江見節男

昨年末一ケ年半の在外研究を終へて歸朝致しました主にロンドンで生活し、落ちついたゆつくりした彼の地の學生々活を羨ましい樣に感じました。

美はしい公園、整頓している道路など、豫算がゆるせば眞似たいものです。從つて母國を眞に思ふこともこれまで經驗しなかつたことでした。大抵年をとるとだん〳〵故鄕を懷しく思ふ樣になると云ふことを耳にするのでありますが、故鄕をはなれ異境の海外にあると、尙ほ更小學校時代の遊び友達などのことを思ひ起すものであります。こんなことが岡山縣青年會として尊い使命のある處でありませう。ときどき色々の會に出席して、時たま小生の岡山辯を聞いて「君は岡山だねー全く岡山言葉だねー」とよく先輩より申さるゝとき、何んとなくなつかしさを感ずる次第であります。

小學、中學、高等學校、大學の課業を終了して直ちに引きつゞき敎鞭をとり若い青年と生活を共にしてゐることゝて、同鄕の青年に接して岡山辯の談話をきくこともあり、實に愉快に思ふ次第で、今少し親しくこれ等の若い人達に接し得ばと思ひつゝわが努めの足らざることを遺憾に思つて居ます。

(浦和高等學校敎授)

明治二十年代の岡山縣青年會追想一班

佐藤壽衛

澤井廉氏のコムボジツト、フオトグラフ——理學士澤井廉氏は、明治二十年頃青年會に見えられ、度々演說をされたが、其の中、予の記臆に殘るものは、コムボジツト、フオトグラフ（重ね寫眞）である。之れは職業を同じくする人の甲の寫眞の上に乙を寫し、又其の上に丙を寫す等幾人も重ねて寫すことである斯くする。ときは例へば政治家とか理學者とか其他方面を同ふする人の平均面相が得られる。其の後此の重ね寫眞は如何樣になつたかは知らざるも、其の當時は一種の面白き思付として記臆に殘つてをるのである。

同君は非常の秀才にして、卒業後大學院に在學せられ其後米國に行き、當時我邦にまだ無かりし、電話事業を研究せられ、池田政時子も、同時代に滯米せられたり。歸朝後不幸肺を患ひ早世せられしは誠に惜むべきことなり。

× × ×

川田甚江先生の六藝——同二十年代の頃、文學博士川田剛先生一日青年會に來られ演說せられて曰く、當時教育の三大要素として體育、知育、德育を、盛んに唱道し全然西洋より新らしく渡來したるが如く言ふも、決して然らず、古來支那にては孔子以前に、既に之れあり。乃ち禮樂射御書數の六藝之れなり。則ち禮樂は德育、射御は體育、然して書數は知育なりとて、音吐朗々雄辯懸河の如く大に漢學の爲めに大氣焰を吐かれたり。

× × ×

大崎池田侯爵邸內の兎狩——今の學生諸君に向つて、大崎町の池田侯邸內で、兎追をやつたと言へば、嘘言かと思ふであらうが、決して左樣でなく本當の事實談である。——時は今から四十四年許り前の、明治二十年の一月のことであつた。予は其前年卽ち十九年の秋上京して、芝の下宿に居つた時分のこと、話しに來る友人が、何日に大崎の池田侯屋敷地にて岡山縣青年會員で兎追ひをやるから出席する樣にと云つた。そこで予は一寸疑念を懷いたと云ふのは岡山に居つた頃、兎追ひにも行つたことがある。何んでも一本杉を右に見乍ら半田の山を越えて、二三里も行つて兎追ひをやつたことがある。田舍の岡山でさへ二三里も山奧へ行かなければ兎追ひが出來ないのに、東京市の近所で兎追とは、ちと受取れぬ。之れは何かの間違ひではないかと思ひ先づ半信半疑で草鞋脚袴の出立にて、其の時分には電車はなし無論徒步で、大崎の御屋敷に行き兎追ひをやつて赤毛の兎三疋を捕らへ、其場で料理して食つたことは事實談である。其當時の學生で、同時に兎狩に同席せられた人々も多數現存せられる。——斯く書き記す予も亦隔世の感がある——歸途現時の花房子爵邸に立寄り茶菓の饗に與つた。——其の頃の池田家の御住宅は本所の横綱町にある。——其の時分の大崎は全部雜木林にして、其の後明治二十三年、章政侯時代に新洋館の新築成りて、明治天皇

行幸あらせられしこともあつたが、惜哉大正十二年一月祝融の禍に罹つた。

（日本釀造協會技師）

鄕土愛

星島二郎

學生時代藩閥政治打破や、コスモポリタンの熱に浮かされて居た私は、何んだ小ほけな島國で其又鄕土愛だなんてケチ臭い、それだから海外發展は行はれず米國でも排日をやられるのだと、地方々言を自慢に用ひる鄕黨寄宿舍の生活を寧ろ呪つたものである。

ところが選擧をやる樣になり、つくづく鄕黨の有難さ、同じ鄕黨でも自郡の有難さ、自郡の中でも生れ故鄕のわが出生村の有難さが、しみ〴〵感じられた。其後私の思想が變り人間の幸福は土に親しむ生活にありと云ふ事が徹底して以來、政治上、農村の安住分布生活を主張するに至り益々かく感ずるにいたつたのである。

現在の世界で幸せな生活をして居るのは、佛の南部地方や、和蘭や、丁抹（デンマーク）や、フィンランドの地方ではあるまいかと思ふ。それは農村本位の共存共榮の安住生活をして居るからである。日本でも中央集權や、都會中心の政治を改め、何處迄も小農本位に勤勞農業化を主として、七割の山の上までも、分布安住の土に親しむ生活をなす樣にすれば、國は平和であり、人間味のある生活が出來ると思ふ、勿論今日の農村程度を意味するのではない。

此意味に於て私は鄕土愛を叫び、同鄕人士の親睦を望み花房子の熱心指導さるゝ、わが岡山縣青年會の發展を祈り、そして、青年の都會熱、月給生活熱を排したいと思ふのである。

（衆議院議員）

○

近松秋江

岡山縣片田舍の產でありますが、現在、鄕土とは、何の關係なしに生活してゐるので、人間といふものは、現金なものと申さうか、或は、それが本當といはうか、鄕縣のことを常に忘れて日を過してゐます。……その點になると代議士に選擧してもらひたいなどと思はぬ人間は、サツパリとしたものだ。

ゆゑに、自分が、もし、鄕土のことを思ひ浮べるとすれば、全く利害關係を超脫した、遊戲衝動ともいふべきものゝみから發生するのです。つまり申せば、

岡山地方の白桃が、世にも稀れなる美味であるとか、鰆の

味噌漬が、三越の食料品部などで、一と切れ五圓出しても得られないとか。

但し、あんまりお自慢にならぬ縣であります。何處の縣とて、お自慢にはならぬが、たとへば、アルプスとか、日光とか、伊香保とか、函嶺、熱海などいふ名所を持つてゐない。平山凡水の土地である。それを今更ら申しても始まらないが。

（著述業）

私の東京に出た時

岡　千賀松

私の東京に出たのは、日清戰爭の翌年であつた。當時銀座通りには、西洋の古物を持つて來たとか云ふ、馬車鐵道があつた。過勞と榮養不良で、痩せ衰へた馬が、鞭打たれながら、汗だく〳〵で挽いて居つた。「牛馬の如し」と云ふ言葉を沁み沁み感じた。又「鞭達」と云ふ言葉の意義も解つた樣な氣がした。そして心から痩せ馬に敬禮した。

目的の學校に入り、暇があれば先輩を訪ねた。當時の先輩。夫れは明治革政の人々であつた。そして先輩と書生それは共に國家の一員であつた。

それはネー君。實に危なかつたものだよ。倒幕、御維新、廢藩置縣、征韓論から西南戰爭、財政の破綻。五十錢の銀貨で、壹圓五拾錢呉れた。失業の群。それに商賣も出來ず、百姓も出來ぬ、武士の上り者「食はねど高揚子」、劍に換へて覺えた尺八で、諸國修業。アチラでもコチラでも炊き出し……今度日清戰爭に勝つは勝つたがね未だ〳〵三國干涉の恨みもある。

なに吾人書生の將來？　豪氣欲呑五大洲さ、男一匹、銀座の馬でさへ驅つて居ら、人間到處有青山さ。本鄕邊の下宿屋の二階では、二錢の燒芋に、四錢の天狗煙草で、滿腹の氣焰が擧つて居つたものだ。

（陸軍中將）

花房會長への書信より

岸本　綾夫

拜復　先般來九州方面に御出張暴風雨に御遭遇の由御難澁奉遙察候。乍併無事御歸京御安心の事と存じ候。青年會寄附金に關し御手數相煩し恐縮仕候。何分宜敷御願申上候。

小生異動に關し御尋に預り候處、本日官報發表の通り歐米各國へ出張を命ぜられ、八月廿九日發、內地出發仕候。從つて八月一日發表の陸軍移動に際し陸軍科學研究所附兼陸軍造兵廠附と云ふ留守中の籍丈の辭令を受くる筈にて、明年三月

歸朝に際し何れか本職に補せられ候儀に有之候。又谷壽夫君は國際聯盟軍事委員陸空軍代表として渡佛仕候。目下旅行中の筈に有之候。本年末には小生も、巴里に滯在中に付中岡彌高氏、谷壽夫氏、（八月一日少將に進級の筈）及小生と同縣出身の陸軍將官三名佛國にて暫時落合ひ可申珍らしき事と存ぜられ候。御盡力の五十年紀念會も歐米の空より御成功偏に祈り候。何れ出發前拜眉萬々可申述候。草々

（陸軍中將）

岡山縣青年會の今昔

明石　照男

岡山縣青年會も此頃は中々盛大になつて、先日の松本樓の會合の如きは非常に多數の人々が出席された。何事にも盛衰と云ふものは免れないことであるが、此會も慥か明治三十二年であつたと憶ふ。私が上京して一高に這入つた頃には實に微々として振はなかつた。私は初めて上野の三宜亭の會合に出席せうと思つたが、其時同窓の友人共は皆神田の青年會館に星亭の演說を聽きに行つたので、自分は迷つた。當時は近頃と違つて名士の講演は容易に聽く機會が少なかつたから、何うせうかと考へたが、遂にやはり青年會に出るのは自分の義務の一つであると決心して獨り此方へ行つた。然し失望した、出席者はたつた三四名か、委員長を合せて五六名かそこら、而も開會は二時間も遲れると云ふ次第、情なくもあるし、豫て「岡山縣の先輩は冷淡である」とか「岡山縣人は團結力がない」とかの噂を耳にして居たが、「此處だな」と田舍から出て來た者はつく〳〵感ぜざるを得なかつた。それ以來の出來事は私の關係する丈けでも一々書くに煩はしいが、今日も今日以後も、斯かる悲慘な情況は再び見難いであらうし、又お互にそんな風にならないやうに努力したいものである。

（第一銀行常務取締役）

○

小橋藻三衛

一、營々として日々奔走に衣食しながら、尙ほ且つ一片の赤心を國家に捧ぐるを忘れず緣の下の力持を試みて自己滿足を樂む所は所謂依然たる呉下の舊阿蒙に候。呵々

一、歷代の會長始め機關各位が相繼ぎ半世紀の長きに亙り、本會の目的に向つて滿腔の誠意を披瀝して其の使命の爲に努力されつゝあることは只管感謝の外無之候。

一、近時青年の多くは家庭の爲とか、社會の爲とか國家の爲とか云ふよりは、寧ろ自己一身の便宜中心と云ふことに傾きつゝあることを痛感致し候。

一、政治の爲に南船北馬の生涯を過したる私共は鄉里に對しては尤も强き愛惜を持つものに候。殊に選擧區と云ふ立脚地の中心地點たる關係上鄉里に對しては實に無限の感謝を包藏するものに候。

一、眼の廻るが如き多忙生活の私共は、萬止むを得ざる必要に迫られて起草するもの丶外詩歌文章漫筆などの如き風流韻事には極めて緣遠き方に候。

（元衆議院議員）

○

藤井眞澄

地方閥は學校閥と同じく感心出來ません。併し偉大なる日本民族主義に親しく結べるものならよろしい。

單なる地方閥や學校閥には、私共は何等の興味も有ちません。

（著述業）

青年に贈る一言

正富汪洋

私の生誕五十年は來年ですが、日本流に、今年四月誕生日當日、野口米次郎、尾上八郎、北原白秋、島崎藤村、高村光太郎、その他文壇詩壇の名家發起のもとに、麴町區丸の內、中央亭本店大社交室に於て、祝賀の會合が催され、詩人協會代表北原氏から記念の銀盃一對を、貰つた。その時、つくづく、同時代の、アインシュタインや、エヂソン等の事業を思つて、恥かしく感じた。人は、若い時から、一つの好きな道、正しい道を選んで、それに精進したが最もよい、子どもを敎育するにも、その長所を認めて、傍から助長するがよい。本人が、面白くて耐らないでやるしごと程、能率のあがるものはない、發明や、意見や、作品が影響する所も廣いのだ。こんなことは少年時代から時々思ふのだが、この頃、一層さう感じる。

○

近時の青年に對して言ひたいのは、今日はレヴュウ、明日は麻雀、といつたやうな快樂で、修養に最もよい時代を過さないで前記のやうな自ら選んだ一事業に何にも增す快樂をもつやうになつて欲しい。

（詩人）

○

治郎丸憲三

一、卒業と相前後して病を得、鄉里に於て只管靜養して居りましたが、今や全快しました。秋よりは勇躍して金光敎を通じて、社會敎化に聊か微力を捧げ度いと思つてゐます。

二、在京六年間、本會によつて得たる所は甚大であります。深く感謝して居ます。我が作備出身の士が、一層にその一致融合點を顯揚して、益本會を發展せしめられむことを祈つてやみません。

四、久し振りに鄉里の風物に親しみ、歷史的にも再認識する樣に思はれます。我岡山縣は昔から宗敎、文學、藝術、其他各方面に亙つて傑出したる人材を生んで居ます。現今之に比して國家的人材に乏しい感はあるまいか。一國の休戚を負うて起つの意氣ある人が幾人あるか。黨人は旣に賴むに足りません。

所謂新思想を有する妄者は、過渡期或は搖籃時代の副產物であります。明確なる指導原理を持たぬ錯覺者であります。尊き我國家なくして、何處に我々の存在があると言ふのでせうか。光輝ある歷史をもつ作備の人々の一段の御自重を俟つ次第であります。妄言多謝。

（金光敎布敎師）

○

入江縫

一、本年は殊の外殘暑嚴敷御座候折柄會長閣下を始め會員諸兄益々御淸適珍重大慶の至りに奉存候。幸小生も倍舊の健康を保ち日々東京電燈株式會社へ勤務罷在候間乍餘事御安堵被成下度候。

一、本會も呱々の聲を擧げしより早五十年の年月を經過致其間幾多變遷の跡を留め各會長閣下を始め各會員諸兄の御苦心御盡力に依り本日の隆盛を見感概無量往昔より人生僅五十年人生の一代を經本年よりは層一層新に益々旺盛の域に達し吾々後輩のため羅針盤たることを深く信じ申候。

一、近時青年は獨立自尊の氣概を缺き候樣感ぜられ申候。是れ一面社會の罪とは謂へ今少し勇猛邁進モボモガたらずして辛抱、眞面目、努力、至誠、熟考、事物に處するの氣概こそ望まし次第に御座候。

一、二十有餘年不幸歸鄉の時を得ず何等直面の感想無之候も一般不景氣風は何處の涯迄も波及せる事と察し申候。

一、氣をもんで焦り歩くな世の中は苦樂とも迫りくるまで。

（東京電燈會社）

實業界の中古頭から視て

金平豐次郎

五十年の歲月は實に長いが此先き幾百年續くか否幾千年も

永續させたい希望の懸る我岡山縣青年會は實に多幸多望の生命と使命とを有して居る樣に思ふ。是れ蓋し學生訓育てふ大なる意義を有する縣人親睦の唯一の機關たるが故であらう。

私は五十年以前に之れを企て之を養成し今日を在らしめた中堅たりし先輩に對して、此機會に於て感謝したいと思ふ。我岡山縣は備前、備中、美作三ヶ國の集りで其國々の氣風も異ひ、縣人の總てが比較的に頭は良し、又役にも立つ其代りに口も達者で氣位も高い。そこで相互の理解も不足して居た。其位だから世人一般も聊誤解の眼で見て居つた樣だ。然るに之れを縣人間の相互の理解乃至結合から一般の理解を得る迄に相當に貢獻したのは此の岡山縣青年會であると思ふ。

學生諸君に對する直接の御利益は如何であるか私自身の學生時代には本會の存在も知らなかつたが、モウ二十餘年特別會員に列せられて以來の私の感想では學生諸君も相當滿足せられ居る樣に見受けるので、私は茲に感謝と期待の二つを捧げたいのである。所で

此機會に何か一言せよとの申付けであるから其命令に從ふべく禿頭を撫て見るが空虛の頭からは何物も出ないのであるけれども三十餘年實業界に在りて敎へられた一二を述べて見ようと思ふ。

恩人渡邊詢一郎先生の敎は(1)正直にして勤勉なること(2)命令には絕對に服從すること(3)理窟を知て之れを謂はざることの三つであつた。

恩師子爵田尻稻次郎博士は、流行には先立て之れに追從すな。意義のない眞似はするな。吾輩の北雷主義に眞似るな。必要からやるのなら徹底的にやれ。きたなり主義でも禮服は持たねばならんぞ、と。

恩人村井貞之助先生は曰く、曾て役に立つた人をば、例へ年老つても容易に見捨るなと。

回顧すれば五十年間の文明進化は其物質の上に其思想の上に驚くべきものがあり、我國民の氣風が全く一變した樣に思はれる、昔時の學生は卒業證書よりも實質主義であつた。學校出は自修獨學の者よりも劣る場合を恥として研磨切瑳よく品性技能を高める事に務めた。又獨學自修の方でも俺は誰某の子孫だぞと云ふので家名を辱めない樣に自尊心を養つたものである。日淸、日露や世界大戰等を經て而も連戰連勝の我日本帝國は今や世界の三大强國となつたから、最早島國根性でも行かないから總ての事が世界的になると同時に總ての大變化は當然であらう。けれども田尻先生の言の如く流行追從許りでは、其國は持てない樣に思はれる。第一に我國民性が失はれる樣になつては駄目ではないか。

國民性と曰へば世界で一番問題になつてゐるソヴィエット露西亞の政策だが「働かざる者は食ふべからず」との理想下に「人生には常に壓迫があるのだ。之れには耐へねばならん」

と云ふ辛抱强き服從的な國民性が彼の專制政治を行はしむる所以であらう。

英雄偉人を崇拜する獨逸人とか、伊太利人には常に義勇的發奮心が充ち輝いて居るが故に、大發明や大發見を生み出す樣に思はれる、伊太利の彼のムッソリーニの政策は今や世界的呼物になつて居るが、我日本魂の所有者たる日本人の國民性が判然しない樣では政策も國策も立つものではなからう。

儀式に於ても紋付袴はモウ跡を絕つた樣だ。一定せる國民禮服の確立は必要ではないであろうか。美髮の婦人儀裝や美風は視ることが出來なくなるか。野球競技は每日幾萬人かを無駄に遊ばせ、恰度百人の運動が何萬人の運動停止となるのか、ラヂオの晝間放送はお使小僧に道草をさせる。斯くなれば文明機關の利害如何に想到して老人共の膽を寒からしむるものがあるのだ。

思出してすら、身の毛の逆立つ彼の關東大震火災當時の各人の氣持はモー何れに吹き飛んだことやら。私は忘れる事も出來ないが、其當時は太平生命保險會社で常務重役であつた關係上彼のモラトリヤムの其間に於て百方苦心金策して貸付金や保險金の支拂に應ずべく何百人の社員も私に協力してくれ晝夜兼行で其使命を果したものだ。又私は居住地に於ては、自警團長もやつたものだ。其時の標語は(1)裸と自發、(2)誠と共存、(3)人は奉仕と云ふので役係の人々は皆白襷で互に快く人の爲め社會のためにと活動したものであるが、それから七年にして今や未曾有の大不景氣時代が襲來した。嗚呼眞劍味々々々之れに處すべき國民の覺悟は果して如何あるべきか。將又我國の將來を如何にするか。

近時、歪んだ人をば働きある人だ、惰ける人をば要領がよいとか、理窟のつく限りは何をやつてもよいのだ。多數なれば腕づくでもよいのだ。外國でこんな事があるからと許りに新奇尖端と眞似でも僞りでも、耳新しく目新らしい事をと、恩義も人情も德義も毫も省られる所がない樣な世態に移りつつあるかに思はれる節が多くなつた。現に、學者否學者でない事は勿論であらうが、文壇に立つ人として納稅義務を無視したり、妻の讓渡を行るものもある。この樣な人達の書いた本がどん〳〵賣れる樣では先きが案じられる、學生としても學校騷動を起すものが續出した。これでは敎育の眞價が解らなくなる。親の苦心を無視する學生がある樣では其罪は誰人に歸すべきであるか。

大日本帝國を脊負て立つ我岡山縣青年諸君よ、品性、人格、道德、禮讓、誠實、力行、之等數へ上ぐれば限りもないが、大に之を養つて大日本帝國の精華を發揮すべく、弛び行く我國民性に、撚りをかけて之を判然させて貰ひたいと思ふ、切に青年諸君の奮起努力を希望して已まない次第である。

（會社員）

○

守屋荒美雄

一、近況　神經衰弱症と胃腸病とが癒疾のやうになつて、つくづく老いの來た事を感じながらも、其の老いの馬に鞭を當てゝ、掉尾の道程を辿つて居ります。人間もこんな事をいひ出してはもう駄目であります。

一、會に對する感想　貴賤老少の區別なく、縣人としての意思をピツタリとさして行きたいと思ふの外はありませぬ。

一、近時青年に對する感想　自由獨立の氣魄を失ひ、人の世話になること位は、平氣の平左、否な當り前位に考へるものが多い。從つて忘恩背義は朝飯前のことである。どうか勇往邁進、以て事に成功するの修養をして貰ひたい。そして先輩たるものは、其の成功の道程を能くリードすることだけが、重要の任務と思ひます。

一、鄕里に對する感想　いづこも同じことでありませうが、鄕里に歸ると無職でありながら、人の懷を當てにして、割合によい生活をして居る連中の多いのに閉口する。景氣でも良くなつたら、こんな連中を皆東京につれて來て、就職せしめたなら、鄕里の空が多少明るくなるかも知れぬと思ふ。しかし夫れを東京につれて來ても、手の皮が薄くて、つらの皮ばかりが厚いのが多くて、或は駄目になるかも知れませんね。

（著作兼出版業）

情熱の日本

馬場恒吾

日本の社會運動に關係してゐる青年の中には、一日に一食しか攝らなくて、全力を運動に打込んで活動してゐる連中がある。その社會運動の目標が正しいか、正しくないかは別問題として、凡ての事を忘れて、運動の爲に働く事に對しては尊敬の念を起さずにはゐられない。

◇

人生の目的は何ぞやと、そんな事を問題にした所で容易に答へられるものではない。若し正しき目的が發見せられる迄、自分は何にもせぬと決心したならば、大抵の人は死ぬ迄何にもせずに考へてゐなければなるまい。

◇

人生の目的は何ぞやといふ問題に答へられないとしても、人が全身を焦げ付かす程の情熱をもつてゐる時は、その人の一生は意義あるものとして殘る。太陽は燃える。燃えるが故に引力がある。人間も亦同じだ。

◇

人間は何處より來り、何處に行くかは哲學的にも、科學的にもハツキリした事は判らぬ。併し我々が現世に住んでゐる事丈は疑ふべからざる事實だ。それ故に現世を住みよき世界になさんとする努力に對して、誰も反對するものはあるまい。

◇

意見の相違は如何なる世界を以て、住みよき世界であるかといふ點で起る。それに對してはいろ〳〵の夢想鄕、ユトピヤが描き出されたけれども、人の頭の中で作り上げた理想國は實驗して見てまだ成功した例がない。それは今日迄の理想鄕は多くは働かないで、寢てゐて食つて行かれるといふ境遇を目標として作られた爲である。

◇

人間の性格は働かないで寢るといふ事を以て最上の樂みとすべく作られてゐない。火の出るやうな奮鬪、其所に最上の快樂が發見せられる、只『働けど、働けどなほ我くらし、らくにならざり、ぢつと手を見る』との石川啄木の歌にいふ所が、人生不幸の主なる原因になつてゐる。

◇

世の人々を見よ。何をする熱心もなく、何の爲に活きてゐるかを知らず、火の消えた如き空虛の心を抱いて、只退屈な生涯を引ずつてゐる人ほど慘めなものはあるまい。其人が金持であらうが、青年であらうが、これは生きた墓場の如き感じを人に與へるのみだ。

◇

個人としてもさうである如く、國家としてもさうである。吾々は日本の中に燃える情熱を求める。只東洋の一角に存在するがために存在するのが能事ではない。情熱に燃ゆる日本——それは其國民の各個人が何事かをなさんとする情熱に驅られてゐる事である——さらば吾々は何をなさんとすべきかそれは住みよき世界を作る事である。住みよき世界が何んな世界であるかを知らぬ。併し其方向に向つて、一日一食にも鬪らず、全心を打ち込んで奮鬪する時、情熱の日本は已に生れてゐるのである。

（評論家）

岡山縣青年會創立五十周年に就て所感

男爵　阪谷芳郎

岡山縣青年會は東京築地に在りし初代花房子爵の邸に於て生れ出たるものである、最初の內は會合は多く子爵の邸に於て開催せられた。其の後段々大きくなつてから京橋區山城町

の子爵と關係ある地學協會の講堂に於て開かれたと記憶する。余は今日六十八歳の老人であるが、當時は年少活氣の一少年であつたことは勿論である。今創立五十年を回顧し善い事であつたと余の胸に浮ぶ一事は同縣青年の就學せる重もなる學校に組合を作り規則を設け幹事を選び組合員の入會退會には一定の監督を設け、不良青年の入會を拒絶し會員相互研磨琢勵し青年會の總會に當りては、各組合幹事より其の年の報告をしたことである。此事たる青年に取ては少々窮屈の事であり、入會の出來ざる者は多少の惡口を洩したる者あるを聞きたることなきにしもあらざれども同縣人中優等の人を養成の方法としては頗る效果ありたるを覺ゆ。精義塾、鶴山館、備中館の組織竝に岡山縣武學生養成會の設立と相竝んで今後益々會運の隆盛を致し、所謂世界的人物の我が青年會より輩出するに至らんことを希望して止まず。夫れには今後益々會員諸氏の鞏固不拔の決心を必要とすると思ふのである。

（貴族院議員）

本會の事蹟を追懷して祝意を表す

窪田靜太郎

私は殊の外暑いと云はれた今年の盛夏の一日を暑いとも思はず名狀し難い良い心持で暮らすことを得ました。と云ふのは岡山縣青年會創立五十年記念事業を此の秋行はれるに付て追懷談を試みるか、思出の記でも作るべく幹事から言付けられたので、其の責を果す爲に、筐底を探つて直接間接青年會に關係ある舊記冊子を取出し、其の中最も時代の古いものから繙いたが、取出した資料の中では明治四十年の會報が最古のものであつた。青年會關係の印刷物は大抵保存して居る積りではあるが、古書舊記の堆積せる間に雜然として存し未だ整理してない故に急に發見し難いのである。

偖此の明治四十年の會報を見ると遠い以前に故人になつた先輩や親友や將又有爲の青年諸氏の名が列記せられて、恰も今在ますが如く其の容貌姿勢や風采が、眼前に展開せられて、丁度自分が二十年前に若返つた如き感があり、彼の人があの時に斯く陳べた、此の人が斯る場合に斯くしたと云ふ事まで、後から後から思ひ出されて恰も膝を交へて談んずるが如き感を爲したのである。斯くて私は夕方まで不知不識に日を暮らしたのである。試みに思ひ出の種となつた會報の記事の一端を書付けて見れば同年號には主に三十九年中の事が書いてある。同年の委員長兼幹事長は花房直三郎氏で、委員は阪谷芳郎、木村清四郎、平沼騏一郎等の諸氏で幹事は公森太郎、松尾保三郎の二氏である。

阪谷男は之より以前に長く委員長を勤められ平沼男、木村

氏も後年委員長となられた。

公森氏亦長く幹事として非常に本會の爲めに努力せられた事は私の記憶に深く印せられて居る。其の頃帝大組合長に高橋久四郎と云ふ人があつた。非常な秀才で前途極めて有望なりと聞いて居たがたしか帝大を卒業はしたが間もなく物故せられたことは遺憾至極である。三十九年の秋季の總會に通常會員として、今井田清德、田邊隆二、矢鍋永三郎、横田誠一郎等何れも有爲の諸君が出席せられて居るが、其の中横田誠一郎君が外交官として將に驥足を展べんとするに當り圖らず病を得て死去せられたことは惜みて餘あることである。

思ひ出の多いのは四十年の神田三河屋の新年宴會である。此會は阪谷委員の入閣祝賀會を兼ねたるものである。來會者七十名其の頃としては空前の會合であつた。此の會に於ける阪谷男の演說は青年會の過去の事業を知るに便なるを以て少く轉載せんに

阪谷芳郎氏立たる曰く

「本日の會に最中心として祝すべき、卒業生諸君の出席全くなかりしは、此の席上の花を失ふ如く感ぜらるるも、一面より見れば、全く慶賀すべきことなり。其故何ぞや、曰く新卒業生諸君が、此席に出る能はざるものは、各々其の職を得て、各地に活動せるを意味するものなればなり。今日の世一日も寧日あるべからず。戰後の事業は、其の方面の如何を問はず、皆膨脹的なり、擴張的なり、人材を要するや急なり。幸に諸君の努力を望む。人一度び其の自ら善なり、美なりと、確信することを以て事を起さば、何事かならざるべき。去年日露戰役の始まるや、我岡山縣青年會は、我岡山縣出身戰病死軍人千九百人の精靈を慰めんが爲めに、靖國神社の拜殿に於て、之が招魂の祭を行ひ、兼て遺族の愁眉を開かしめんことを努めたり。次いで是等忠死者の爲めに精忠錄編纂の業を起し、殆其の稿を脫せんとせり。加之武官養成の基金の醵集も、着々其の歩を集めつゝあれば、之が完成の期亦近かるべし。本會が、此の如き事業の中心となり、機關となるも、唯其の善美なるを、自覺するが故なり。然らば之が貫徹は同鄕諸君の熱心を以て、必然美果を結ぶべきものと思考す」

又曰く

「本日の會に最中心とし回顧するに我青年會は過去に於て物質的に、眼に見ゆる事業は、殆ど爲して居ないが、精神的には大に働いて居る。私の記憶する所のみでも明治二十八年日清戰爭後、神田錦輝館に於て凱旋祝賀會を開き出征將卒の勞を犒らふと同時に大に我々當時の青年の元氣を鼓舞した。此の會には三島中洲先生が歡迎文を朗讀せられた、花房義質先生も出席せられ卒先して活躍せられた、斯る催しが暗々裡に青年の奮勵を促し後年對露戰勝の素因ともなつたものと思ふ。又前記の演說中に顯はれた祭典執行の如き誠忠錄編纂出版の如き武學生養成會の基金募集其の創立の如き何れも本會が在京同縣人間に於ける輿論の醞釀宣傳の機關として事業の成功に資したることは多大であると思ふ。前記の如き事業は何れも有益なる事は申すまでもないが同縣人が相集つて是等の事業を爲すと云ふこ

と、其の事自身が同縣人相互の親睦團結を強めることになり不知不識の間に本會の目的を達するものと思はれる。故花房子爵始め諸先生が何事に依らず同縣に關係ある事業と云ふと常に青年會に謀り本會を中心若くは基礎として計畫實行すべく私共に指示せられて居た。夫は恐くは右の如き理由であつたかと思ふ。」

偖本會の功勞者は勿論歴代の委員長委員幹事等の諸君であるが、其の氏名等は本誌上に登載せられる由であるから茲に之を略するが表面の役員でなくて大なる功勞者としては劈頭に故花房子爵を擧げねばならぬ。會報の沿革記事中に明なる如く本會は故花房子爵邸に呱々の聲を揚げたるのみならず、子爵が全權公使として、朝鮮、露國等に駐劄せられた間は、勿論已むを得ずとして、其の外、在京中は日常本會の事を考へて居られ、私が拜眉を得る機會ある毎に常に本會の爲めに有益なる注意を與へられた。令弟花房直三郎氏が、委員長又は委員として非常に本會の爲めに盡力せられたが、恐らくは故子爵の旨を受けて活動せられたことが多かつたことゝ思ふ。子爵に次いで小松原英太郎先生、馬越恭平先生等亦本會の爲めに大なる援助を與へられたことは人の知る所である。又先輩中小松原、小原兩先生等の仲間に關新吉先生と云ふ方があつた。明治二十年前後には大政官參事院から、內務省に勤務せられ、後地方の書記官縣知事になられた。此方も本會の爲めに盡力せられ、常に學生の世話をせられ、河村彌三郎氏の如きも長く關先生の御宅に厄介に爲つて居た。又長く內務書記官を勤められ、後衆議院議員等にも爲られた、先輩に黑田綱彥先生と云ふ方があつた。此方も主として明治二十年前後に本會の爲めに盡力せられ、常々總會等に出席せられ有益なる講話を試み青年に大なる指導感化を與へられた。私が學校を出て內務省に入る頃には內務書記官として在任せられ種々御世話に爲つた。以上の外本會の爲め盡力せられた、先輩は一々枚擧に遑ないが、是等諸先輩は超委員長とでも申すべく何れもたしか委員長の名義は持たれなかつたが、委員長以上の功勞の有つた方々で、我々は永く記憶すべき方々である。前記本會の關係した諸事業の中、武學生養成會の創立は現に存在し、永遠に遺る事業であるから、茲に加へたいことは元來此の事業の發端は、明治三十九年七月一日日露戰役後の凱旋同縣軍人の歡迎祝賀會を、芝公園三緣亭に開いたその席上にある。

當日中岡少將の謝辭中に凱旋者として歡迎を受くるの喜に連れて戰病死者の方が憶はれる。何等か其の忠魂を慰むるの途が願はしい。而して忠魂を慰むるの方法は今回の戰役には我同縣出身の將校、殊に前途有爲の若い青年將校が非常に多數死歿した故、之が補充の方法を講じ後繼者を作ることが、最も戰歿者の忠魂を慰むる所であると思ふ。云々との意味を

演述せられた。此の演說には參列者一同非常に感動したのであるが、就中花房、馬越、犬養、小松原、阪谷、黑田等の諸長老が、格別深く感激せられ、其の結果第一回は慥か偕行社と思ふが、是等諸先輩を初め我々青年會の委員長や、委員たりし樣な連中が會合し、其際少くも十萬圓を醵集すべしとの議を定め、當時藏相たりし阪谷男を推して申さば此の事業の座頭と云ふか、中樞に擬し黑田綱彥氏は自ら進んで、幹事長の如く此の事業の資金醵集を、言はば自分の一世一代の仕事として雙肩に擔はれる事になつた。

其の後屢々藏相官邸等に、集合協議し今日の武學生養成會として創立せられたのが、明治四十年で四十二三年の頃許可を受けて財團法人となつたのである。此の事業に付ては阪谷、黑田の二先輩は殊勳者と云ふべきであらう。勿論多額の寄附金を爲された殊勳者等もあるが今之を省くとして同會創立に關する諸般の事務に付ては當時の大佐故兒島惣治郎氏、主計監草野英行氏、犬丸鐵太郎氏等は最も盡力せられた樣に覺えて居る。斯の如く今日十餘萬圓の基金を有する、岡山縣武學生養成會が一擧にして忽ち成立を見るに至つたのは前記の如き諸先輩の非常なる發奮其他在京及び阪神地方、岡山縣下等の有志者の共鳴と、大なる援助に因るとは雖而も平素本會の如き、强固なる團體が存在して縣人間の意思の疏通が行はれ、共同一致が容易であつたからであることは申すまでもない。加之本會は又會として直接にも右の事業の爲めに應分の盡力を爲したのである。是卽ち前記の阪谷男の演說中に武官養成の基金に付報告せられた所以である。

之を要するに斯の如き光輝ある歴史を有する我岡山縣青年會は今後益々團結を强固にして、其の目的を貫徹することに努めねばならぬ。前記の如き諸先輩に對する我々の義務としても、大に奮勵せねばならぬと思ふのである。今回創立五十年記念祝賀會を催さるゝに當つて往事を追懷し聊所感を述べて祝意を表する次第である。

（行政裁判所長官）

岡山縣名產と優良國產品

難波元弘

岡山は嘗て米の成る木で名を賣つた。藺草、花莚、麥稈亦相當に廣く知られた。水蜜桃が久しく天下一品の名を占め、更に梨、柿、葡萄等種々新奇優良品が順次續出する點に於て、正に日本一の吉備團子以上である。

近來世は益々不景氣濃厚となり、工業界は日に月に沈滯に瀕し、政府其他要路者は、之れが挽回策として國產品愛用奬勵と輸出奬勵の二途を力說し過般商工省は優良國產品數十種の公表をしたが、之れ等優良國產品の折紙が果して從來慣用

の舶來品卽優良品なる感じを消滅することを得るかは甚だ心細き次第である。

一體我國の所謂優良國產品は未だ決して世界市場に於ける優越の地位を占むるものにあらずして多くは只輸入防止程度のものである。今我國輸入工業品につきて見るに多くは皆新奇なる優秀精巧品にして、安價なる普通品にはあらず。故に若し我國より外國に輸出せんとするには矢張り普通品よりも寧ろ高價なる新奇、優秀、精巧品に依つて彼れと爭はざるべからず。然るに從來の產業保護奬勵は、云はゞ粗製亂造に傾き優秀品製造の奬勵に缺くるが如し。此の點につき我岡山縣に於て常に全國に拔んでて新奇なる優良農作物の產出を見るは、一部其地味、氣候の天惠に負ふ所多しと雖も、亦我が縣人の絕えず優秀品產出に努力しつゝある點は、我々岡山縣人として大いに意を强ふする所以である。

（旭硝子株式會社試驗所長）

感想

三宅德業

私は明治二十六年以來通常會員として、同二十九年以來特別會員として、本會に加はつて居ますが本會に出席することは割合に少いので本會の事情には疎いのでありますが、會報等に依り會員が段々增加することを承り、又時々出席して學生諸君の潑剌たる元氣に接し若返つた氣分になるので、本會は之だけでも有益なものと思つて居ます。處で本會創立五十周年に際し記念の爲め感想其の他何か書けとの花房會長よりの御註文がありましたが、前陳の通り會の事情に疎いので差控へて居ましたが、一再ならず御督促に接したので、多年本會の爲め多大の御盡力を下さつた、子爵御先代及子爵に對する義理としても默止するは失禮と考へ簡單に左に感想の一、二を記します僭越の段は偏に御容赦を願ひます。

一、本會の沿革を拜見しますと本會は在東京學生の爲め出來たものゝ樣ですが、それは其の當時の事情が然らしめたに過ぎないので、本會は其の名よりするも少くも全日本岡山縣出身學生の爲めに働くべきものと謂はねばなりませぬ。從て本會の規模は全國的のものとし、事後所も獨り東京のみならず全國は兎も角岡山縣出身學生の相當數存在する各地（特に岡山市）には無くてならぬ筈、從て又之等各地には多數の通常會員及特別會員が無くてはならぬ筈と考へますが、會報に依れば特別會員も非常の少數通常會員は絕無の樣に見えます之は如何にも名實相副はざる次第故本會としては名稱通り之を全國的のものとせねばならぬと思ひます。

二、本會の事業としては唯年に二回位先輩學生相會合して談

話を交へ食事を共にするだけの樣ですが、それだけでは餘りに物足りない感じがします。少くも學生諸君の爲めに寄宿舍なり若は類似の設備をすること位は本會として是非遣らねばならぬことゝ考へられます。是迄在京縣人學生の爲めの寄宿舍として精義塾、備中館、鶴山館等の設けありとは承つて居ますが、此の事業は箇別的に經營すべきではなく是非本會として綜合的に經營すべく、從て單に在京縣人のみで遣るべき事ではなく、必ずや全縣人が協力して遣るべき事だと考へます。然るに未だ今日にて全縣人が協力して綜合的に遣らうと云ふ氣運が熟して居ないのは甚だ遺憾に考へます。

（行政裁判所評定官）

○

杉塚磨

一、官を辭して一年有半、正金銀行に列び大名として末席を汚し居りたるも、有體に申せば目下流行の失業者の一人に御座候。

二、小利口な人許り殖えて、世の中は益々世智辛くなつて行く樣に被存候。

三、鄕を出で、三十有餘年、望鄕の念切なるもの有之候も、凡骨業成らず、未だ鄕黨に見ゆるの機を得ざること深く遺憾と致し候。

（橫濱正金銀行監査役）

岡山縣靑年會五十周年に際して

龍高德平

岡山縣靑年會も、創立以來旣に五十年を經過した。五十年といへば人の一生と略同じで、短いといへば短いが相當長いものだ。會とか學校とかが五十年を無事に經過し、次第に發展して來たら基礎が固まり、最早大丈夫であるといふ意味で五十年記念を祝して式を擧げ、又記念出版とか記念事業とかをするのが常である。

回顧すれば私が初めて、上京して大學に入學したのは明治二十七年で今から三十六年前の昔であつた。當時靑年會の會合が上野の三宜亭でよくあつた。渡邊勝三郎氏などが幹事で世話して居られたのを記憶する。先輩では花房兩先生を初め小松原英太郎先生、阪谷芳郎先生などがよく御出席下さつて御訓話をして下さつた。その頃は煎餅にお茶、お鮨で頗る簡單であつた。少し後になつて宴會には大分馳走が出るやうになり、學生は會費五十錢で平生餘り食べない御馳走を食べ、

先輩の御話を伺ひ久濶を叙して愉快な一夕を過して歸つたものである。稍後になつてから平沼先生、窪田先生などが大に御世話下さつたのである。

以上は私が一寸頭に浮んだけで其他にも會に御盡力下つた方々が多いので、我青年會が今日の隆盛を來したので感謝しなければなりません。

扨此の如き一縣の青年會などいふものは、今後益々發展せしむべきものか、或は然らざるものかと考へて見るに、大きい眼で達觀すると今のインターナショナルの世の中に一縣一國と、小黨樹立の必要はないとの議論もあるが矢張ローカルカラーの會合も時に鄉里のなつかしみを感ずるために必要である。殊に東京のやうな大都會で各自繁忙な業務に追はれ同鄉村の者も知らずに過し、老若の聯絡關係もつき難い所では春秋の好時期に、半日の閑を得て、同鄉の好誼を溫めるのは蓋し人生の一大快事であらう（然し私は餘り度々は出席しません）又後進者保護のために必要の事である。從來我岡山縣に優良卓越せる官吏や政黨關係者、軍人の多く輩出したのは種々の原因もあらうが、我青年會の先輩諸先生の誘導感化も大に與つて力あることゝ信ずる。

以上のやうな理由で我青年會は今後益々發展せしめ有力なる一大團體となり、來る百年記念の際までには各方面の人材が我岡山縣から輩出する樣に指導誘掖に努めることを希望する次第である。

私は昨日秋晴の好天氣に乘じ池上本門寺に詣で御會式直後の混亂の跡を見て前夜の盛大を想見しました。墓地内を徘徊しましたら計らずも（計らずもでは相濟まぬ譯ですが）我青年會の恩人我縣の大先輩小松原先生の墓地を發見し、恭しく禮拜し御在世の砌青年會その他で、屢々溫顏を拜してゐたことを想起しましたから玆に附記致しました。

（昭和五、一〇、一五稿）（理學博士）

岡山縣青年會員
將來の爲に一言

小山善太郎

青年の目的は出世である。出世の目的は、學問である。學問の目的を達せんとせんには、健康であらねばならぬ。健康長壽を達するのは、又衣食住である。之を完全にするには資產である。此資產を造るには青年時代の學問である。其學問を妨げるものは何んである乎。健康である。健康を妨げるものは酒と女である。昔より

酒と女と博奕がなけりや
親にかんだう受けりやせぬ

此卑俗なる歌は、昔も今も變らず、不良青年となる。此三

つである。

酒と女道樂の爲に苦しめる者は多くある。岡山縣青年諸君の父母必しも裕福なる人ばかりは居ない。記者の知人にて每年壹反歩づつの田を賣ると言ふ事を聞く。それは上京中の次男の爲に學資を送る爲であると。親は斯く迄に、子を思ひて田地を賣りてまで子を將來出世させたいからである子は親の心を知らず。

或る所に斯の如き不良青年がある其人は酒を好き女道樂の爲に勉强せず度々落第したのである。其人は每月送りし豫定の學費は不足したのである。又本を買ふから金を送れ、洋服を新調するから金を送れ、已むを得ない爲に友人に金を貸したから又金を送れ、過日の新調の洋服が運動に行き居る時に、物に引かけ破れたから又新調するから金を送れと親は已むを得ず、又送金す。然るに夏休みとなり歸り來たりし時は以前の古ほけたる洋服であつた。

親はなぜ新調の服を着て歸らなかつたかと尋ねしに、數日前に泥棒の爲に取られたから止むなく取替たと。先日洋服の破れた時に時計も、毀れたから買つてくれと已むを得ず買つて歸りは豫定の學費だけ渡して上京さした其際何時の間にか、親の大切なる書畫五六本を持出し上京後直ちに質屋を招きて、金を借りた。二三ケ月の豫定丈の學資を月末に送つた。今度は深夜泥棒が入りて、洋服も時計も取られたから至急に金を送れと電報ありし故に、又々已無送金し親は少し變だなと思ひ居りし時に、來客がありし故に應擧の幅に掛けかへんとして尋ぬるに見當らず、外の二三幅も見當らず、故に悴がどうかせしにあらず哉と不審に思ひ直ちに兄を上京させ下宿屋を調査させしに、本人は學校に行き居る留守中に部屋に入りしに本らしきものはあらず、洋服も見當らず、机の上には鏡の横に白粉やポマードがありて左の方に古本や古雜誌が二三あるのみ、下宿屋の主人を部屋に招き先日此部屋に泥棒が入つた事があるか。泥棒は入りし事はありません。洋服屋は何れに注文するか。何れか知りません。質屋は出入するか質屋さんは度々來られます。先月末も御友達が居らして金を返せと大聲で議論がありました末、質屋を電話にて呼寄せて洋服や本迄、持ち歸りし事が御座ります。其以前にはと尋ねしに夏前に三ケ月も下宿料が留り居りましたが、國に歸りて持ちてくるとの事で御座りましたが、夏休みより御越しの際に掛物四五幅御持ちになりて質屋を招き金を借りて下宿料を戴きました事が御座ります。質受けは自分でするから又後にと暫時の後に弟は學校より歸りて部屋に入ると兄の來て居るには大に驚き、兄は先日新調せし洋服や時計を見せと言ひしにあれは泥棒に取られましたと。馬鹿言ふな貴樣が泥棒だ貴樣の言ふ事は皆な僞りだ。親爺の大切なる掛物迄持ち來りて、皆質屋へ入れてあるではないか。下宿屋の主人の證人があると

言しに顏色を青く變へて惡い事致しましたと。今後は學資は送らぬ事にする。新聞配達でもして食へ何なり共勝手にせよと歸りて親爺と相談の末遂に親に勘當せられて我家に歸る事も出來なくなつた。

斯樣なる不心得の人はもう出世は出來ぬ。斯の如く迄ならずとも其內の一つ二つ位は多く有る事を聞きます。是皆酒と女の爲に最愛の父母迄僞らねばならぬ樣になつたのであります。酒を好み女道樂は不良青年の道行きであります此惡事の初めを愼む事は將來に出世せんとせる青年諸君の爲には必要ではありませんか。備中會の會長貴族院議員阪谷男爵は禁酒家であります。酒を廢めねばならぬ樣な御不自由ではない。又酒を禁じなければならぬ樣な御病氣もない。然るに近來禁酒せられ居るは備中の學生を養成せらる可き會長であり、學生の將來を思ひて自からも手本とせられ居るのである。

嗚呼岡山縣の青年よ此男爵の御心を汲取り學校を卒業する迄は酒と女に近か寄らないと言ふ決心はないか。

酒は一身一家を害するのみならず。每年酒の爲に米を七百萬石も潰して、食糧の不足を海外より輸入して每年、每年、輸入超過の一大原因となり居るにあらずや。金貨はそれが爲に海外に多く流出して居るを知らざるか。國家は之が爲に如何に苦しみ居るか。

國家の爲に一家の爲に一身の爲に學業の成る迄を禁酒せらるゝ事を望むものであります。

上高地の紅葉をながめつゝ

初雪は峯をおほへど山すそはくれなゐそむる錦なりけり

小山人

青年諸君の爲に

いそがずもやすまず登れ富士の山峯の白雪下に見るまで

青年時代

ゆく末は青海原の帆かけ舟かぢとるまゝの西に東に

小山人

（血液循環療法研究會會長）

○

江見章夫

昨日まで教場に在つて教を受けてゐた身が、今日は教壇に上つて人に教へる——これは全く大きな變化であります。學校を卒へて實社會へ出ると言ふことは、男子に取つては中々大きな變化でありますが、小生の如く一朝にして學生と、先生との位置を轉換することは、それ以上大なる變化と言ふ可きでありませう「君子は豹變す」と古から言ひますが、人間の心はそんなに一時に、簡單に變へることが出來るものではありません。小生も當分の間は、教壇に立ち乍らも生徒のや

うを氣分でゐて、授業がなか〳〵捗りませんでした。少し先生らしくなつたのは、やつと昨今のことに屬します。

他人のやる事は何でも容易に見えるものですが、いざその事をやつて見ると案外難かしいのに驚くのは世人の常です。小生も始めは先生などは少し學問さへあれば誰でも出來るやさしいものだ位に考へてゐたのでしたが、實際その職に就いて見ると案外に難かしいのに一驚を喫した譯でした。

高等學校以上の學校ならばそんなでもないと思ひますが、中學校は丁度少年の身心が發育ざかりであつて、他から影響を受けることが最も多大であります。故に中等教育を行ふ者は、餘程の人格者でないと立派な效果を擧げることは出來ない　思ひます。かういふ意味合から申せば小生の如きは最も不適當なる教育者との非難を受くるに充分なるものがある譯です。

しかし、それは兎に角として、今日の中學教育なる者に對し、短日月ではあるが實際教育に當つた一人として小生の偶感を申上げて見度いと存じます。

一體現今の中等教育の教科目と云ふ者は、何時頃出來たものを踏襲してゐるのか、又それを漸次どの樣に改正して來たものか、そんなことに就いては一向知らないのですが、それは少くとも非日本的であると言へませう。改めて申す迄もありませんが、教育はその國その國の國民性に適合したものでなくてはなりません。現在の我が中等教育は、「國民に高等普通教育を施す」のを目的とし乍ら、その實は一向に日本人としての高等普通教育になつてゐないことです。一例で申しますと、中學を卒業しても一寸した手紙一本すら滿足には書けぬといふ狀態であります。英語その他の外國語も結構ですが、自國語が不自由なやうでは中等教育の效果も大いに疑はれます。これは本末を顚倒したものと言ふ可きでありませう。傳統を忘れ國情を度外視するやうな人間が增加して來るのは、かういふ教育制度の缺陷に起因してゐるのではないでせうか。

かういふ風にして不知不識の間に思想を蝕まれた人間が多くなつて來ると、砲火を交ふることなくして何時か我國の存在がなくなつて了ふことになります。『日本』といふ領土はありながら、その領土內には『日本人』が一人も居なくなつて了ふでせう。

然らば如何にしてこれを救ふか。これは大きな問題で小生等如きの到底よくする所ではありません。早晩その道の達者が必ず出て來るであらうことは、小生の期待してゐる所であります。小生はたゞ感じたまゝを（それは杞憂だとの憫笑を受くるかも知れませんが）述べたに過ぎません。蠡測の譏は免れ難い處と存じます。

近詠三つ

秋靄に海の廣さは陽が照りて
秋深く丘べの草は石もあらはに
假寢さめて障子の月の明るさは

（兵庫縣灘中學校教諭）

○

速水滉

拜啓、御問合の條々簡單に御回答申上候。

一、學究として專問的學術の研鑽と學生の教育とに從事致居候。

一、久しく青年會に出席致したること無之、從つて是に對する感想無之候。

一、近時の青年心理は到底自分共の理解し難き程度に變化して居ることを切實に感じ居り候。

一、鄉里に對する感想等申述ぶる程のものは無之候。以上

（京城帝國大學教授）

不景氣に對する一管見

野田澤軍治

今や我が深刻なる不景氣は一面社會上の不安をさへ、感ぜしめつゝあります。斯る事態は單に今日のみならず、將來幾度か遭遇せざるべからざることが豫想されます。

斯樣な不愉快な事態の原因については世間に種々議論されてゐる如く幾つもの事情の錯綜してゐることが考へられます。その多くの原因の中でも最も重大で、然も眞に近いと思ふことは世界的乃至は國內的の富の偏在であります。これは現社會制度の長所であり、且つ短所であると思ひます。

この不景氣の原因が果して、私の考へる如くであると致しますれば、その對策如何と申しますにこれは仲々容易でなく、しかも最善な方法は私共の頭腦では考へられませぬ。識者の中には外國の例に倣つて種々の方策を提唱される方がありますが、これとて大した妙案もないやうであります。日本には特有な歷史と特有な事情がありますから、これが對策も敢て外國を眞似ることは禁物であります。

私は國家乃至は地方公共團體の財政策を中心として對策を講ずることが最も我が國狀に適し、然も最も有效であると信じます、而してその方法は一口に申せば偏在せる富を國家乃至は地方公共團體によつて平均に利用することであります。これを具體的に申しますれば例へば國費を現在以上に時代の趨向を洞察した方法によつて國民に負擔せしめるとか、富の偏在を助長するが如き財政策を排するとか、官業によつて產業を統制するとかその他種々あります。

こゝで愚見の全部を申し述べることは不可能でありますが要するに經濟政策を財政に平行せしめ、而して社會政策の目的を果すことが、我が國をして益々光輝あらしめる最良な方法であると信じます。

（日本銀行調査局）

科學の彼岸

坂田芳衛

やうやく學窓を巢立つたばかりの青書生であるところのわたくしにも、この外界世界は巍峨たる前面の絕壁のやうに、カオスとして迫つて來るのではない。體驗がこれを秩序つけ理性化してコスモスとして把へることを訓へるからである。勿論全部の外界が體驗によつて理性化されはしないだらう。けれども近代科學の發展が日々にこの領域を狹めてゐることをわれ〳〵は知つてゐる。だからカオスとは、外界として對象として與へられた世界とわたくしとの關係でなく、寧ろわたくしがわたくし自らに對する關係にあるのであらう。

わたくしが、わたくし自らにとつてはカオスとして把へ難き定め難きものとして存在せねばならない。詩の世界はカオスである。かくてわたくしがわたくし自らをカオスとして反省するときこゝに詩が見出される。それは確かに秩序の領域所謂科學の及ぶ世界ではない。美しき夢を夢見ることによつていか樣にでも美しく描くことが出來、貧しき思を思ふことによつて如何樣にでも貧しく考へることの出來る世界である。この科學の彼岸にある混沌たる惡魔の世界を、明らかに認識し理解すること、それはいかばかりおほきい課題だらう。わたくしがこの樣に考へることさへ、あるひはメフイストフエレスの詐術に陷つてゐるためかもわからない。

（東京帝大大學院學生）

知識慾と道德的勇氣

林癸未夫

近時の青年（と言つても玆では、主として高等學校及大學程度の學生を指すのであるが）の一般的氣風として、私の遺憾としてゐる點が二つある。其一つは享樂慾が濃厚で、知識慾の薄弱なことだ。上級の者ほど講義を聽かず、圖書館へも入らず、麻雀、カフエー、スポーツ等に浮かれてゐる者が多い。折角の勉强盛りを斯くして空費するのは、餘りにも自己修養の心がけがなさ過ぎる。もつと眞面目に研究して貰ひたいと思ふ。

今一つは道德的勇氣に缺けてゐることだ。是を是とし非を非として之を公言し、所信に向つて直進する斷乎たる態度が

減多に見られない。徒に右顧左眄して大勢順應を事とするかに見える。これは一面利口らしくもあるが、私は寧ろ卑怯と評したい。勿論血氣に驅られて無謀なる行動に出ることは慎むべきだが、併し餘りに利害の打算に鋭敏で、純潔なる精神と邁往の氣魄とを失つてはならないと思ふ。

私は岡山縣出身の青年學徒が、以上二つの弊に陷らぬやう克己自制することを希望して止まない。

（經濟學博士早稻田大學教授）

岡山縣青年會五十年祝賀に際して

青木鐵太郎

本會創立五十年祝賀の御催は諸君愛鄉の情思發露であり、誠に美はしく又結構なる事と思ひます。沿革來歷の記事で御承知の通り本會の起りは、鄉黨先輩の許にて煎餅を嚙り、番茶を啜り、雜談に興を湧したるに始まり、私も上京以來最年少者として、席末に列しました。當時會合者は、數人多くても十人を餘り超えざりしなり。先輩としては、花房、小原、關、小松原、澤井、井上等の諸先生にて、是も極めて少數なりし。其頃の鄉土の觀念は、彼の男兒立志出鄉關の鄉關墳墓の地の意味にて、先づ岡山若しくは備前と云ふ程のものなりしに、今日にては會員幾百名に上り、先輩諸君も多數となられました、著しき發展と申す外はありません。

然しながら反思すれば、時代の趨勢に從ひ、私共の環境も、思想も、變つて來ました。是は諸君に於ても御氣付のことならんか、猶一層の考慮の必要なきか。今日にても諸君往々岡山の爲めとか、又岡山縣人の爲めとか云ふ事を口にせらるゝを聞きますが、夫れは果して如何なる意味か岡山縣なるものは維新後の行政區劃にして、已に歷史的の鄉土にあらず左なくても自動車、飛行機、無線電信により、遠近距離が短縮せられ、思想聯絡により、國境の除去せられんとし、愛鄉の念は愛國の念となり、次で國際愛となり、人類愛とならんとする今日に於ては聊か時代錯誤の譏りを免れざるなきか。五十年祝賀誠に結構なり。紀念事業の計畫誠に結構にして、私は諸君の志を嘉とし其勞を多とし贊成しますが、此際諸君が愛鄉の念を忘れず、同時に又時代錯誤に陷らざるの方案を立てられんことを切に希望する次第であります。

（高砂商工銀行頭取
同信託社長）

所感

花房太郎

效果を急ぐ。これは青年が持つてゐる大いなる弊の一つであらうと思ふ。

青年の多くは、何か一つの仕事を仕樣とすると、それに附隨した樣々の過程を思はずに、直ちにその效果を空想してゐる。

空想から生じるものは、概ね美しいものなのだから、やらうとする仕事の價値を甚だ大きく考へる。

しかし、仕事といふものは何んな仕事でもさう手易く效果の見られるものでもなく、又さう早く結果するものでもない。所が效果の方は空想で美化されてゐるものだから早く結果が見たい。そこで仕事を急ぐ、性急になる、過激になる、それでどうかといへば結果は中々やつて來ないで、徒らに疲勞したり、傷ついたりして終りになつてしまふやうになる。これでは滿足な仕事は完了しないのである。

今日のやうに經濟界や思想界が行き詰つて動搖して來ると、何人でも如何にしてこれに善處す可きかといふことを考へてゐる。勿論諸君にしても是非の論を持つてゐる事と思ふ。

しかし、その結論を決して空想で美化して欲しくないと思ふのである。

この行き詰りが打開され、動搖が鎭まつて新しい世紀が來た時、その世紀に生きる人達は畢竟今の青年達である。從つて今諸君が考へてゐる事が不確實、不健康であれば、次の時代も亦不健康で動搖したものになるのである。

反對に非常に確實で、堅固で、健康なものであれば、來る可き時代も亦强固な基礎のもとに進展する。

これを思ふ時、次の時代を背負ふ諸君の任務は甚だ重大なもので、苟も輕卒を許さないものがあるのである。今日は單に喧噪のみを是れ事とする時ではない。世界的不況といふやうな一つの大浪——これは單に一政黨の政策なぞに依つて易易と乘り超える事の出來ない大きな浪だ——これを乘り越えるには非常な努力が必要である。これを越えてこそ新大陸は發見される。

かういふ今日、時代が諸君に期待する所は大きい。それ丈け諸君は自負を强うして、靜かに確實な歩みを運んで頂きたいと思ふのである。

（子爵、貴族院議員）

○

正宗直三郎

一、花房會長閣下の御熱心さを衷心から感謝いたします、識見に於て、人格に於て、永久に會長として煩はしたい。

一、東京にゐる縣出身學生は三千人と稱せられ、又隱れたる紳士、資產家、篤行の士も隨分あるらしい、之等の全部を

入會せしめ益々一致團結を計りたい、それには現會員諸君が先づ二名づつを紹介すれば易々たることであらう、而して世相に伴ひ女子も入會せしめたい。

一、近時の學生諸君は餘りに卒業後の就職を心配し過ぎて居りはすまいか、要するに獨立の精神が乏しいからではあるまいか。

一、相變らず貧乏忙しいので郷里の事にまで及ばないのは遺憾である、と同時に申譯がない。

一、趣味としての蕙蘭の栽培は將に堂に入らんとして居るかも知れない、願はくは同好の友を得たい。

（三明社代表社員）

○

鳥取快太

岡山縣青年會は唯岡山縣出身者と云ふ名義にもとづく會員よりなるものであります。

本會には會員の共に會する中心の場所と指導者たる中心の人物が必要であります。

本會の中心となる場所に於て立派な人格の人の指導のもとに氣持よく會し氣持よく散ずる樣になることが大切と思ひます。

（東京市役所商工課）

五十年一日の如し

淺沼龍吉

私が初めて岡山縣青年會へ出席しましたのは、二十三年前であつたと記憶して居ります。その後十數回出席しましたが、いつも一兵卒である私には光輝ある五十周年の祝辭を述べるべくあまりに資格が貧弱でありますから之れは先輩各位に讓り、表題五十年の歳月に就て偶感を述べたいと思ふのであります。私は過日或る同業組合の勤續店員表彰會に列席しましたが、席上、その精勵五十年一日の如しとの感謝狀を受けたる某氏答辭の一節に、私が入店した年に新築の祝賀會を催され、主人の友人及び取引先の人々二百餘名を招かれたことがありますが、當時出席された人で、今日猶ほ生存せる方は僅に四名又入店當時の同僚店員六十餘名中現に生存せるもの自分の外一もあらず、五十年の歳月、人事の變遷眞に今昔の感に堪へません云々と述べましたが、岡山縣青年會創立當時の青年で、今日の健在者が當年を追想せられるならばこの店員と同じ感慨に打たれられることゝ思ひます。偖、政治家たり、學者たり、事業家たるを問はず、その成功者たるの一要素は長命者であり、長命者たるの要素は健康者であらねばなりませぬ。成功を望む多數の青年が、學窓を出でて、或は職業に從事し、孜々その目的に向つて、努力奮勵の中途、病魔に犯されて殪るゝもの、或は病弱者となつてその目的を放棄するもの等數ふるに遑なき次第でありますが、蓋し吾人一般の風習として病氣は醫者まかせと考へ、平素自己の健康衞生等の問題に就て頗る無頓着であるため、斯く病弱失敗者が多いのであると思ふ。自己の身體は自己で保護し、醫者に見せる必要なき體軀を作るが第一義であります。自分の例を述べるのは烏滸がましく失禮ですが、私は少年時代餘り健康でなかつたため、又父母兄弟いづれも病身で家庭に醫藥の絶間がありませんので、その不幸を救はんと心掛け、種々の醫書、健康書等を求めて自己治療を研究し大に得る所がありました。十八歳の冬、上京後も處世の難路突破は先づ健康たるを必要條件と考へ、餘暇あれば健康、衞生等に關する書物を讀み、且つ適當と信ずる健康法は努めてこれを體驗しました。その結果、東京生活三十二年間一日として病床に就きしことなく、醫者の世話になりしこともありません。又妻子も私に習ひ、殆んど醫藥を知らぬ程度の健康者であります。それゆゑ私は、何人も心掛け次第で、必ず健康者たり得るとの固き自信を持つて居りますから、屢々病弱の友人に向つて健康法の實行を奬めて居ります。願はくば、縣人青年諸君、自分の身體は自分で保護すべきを自覺し、若干の餘暇を以て、健康法を研究且つ實行せられ次回の百周年祝賀會に出席せられんことを。

（淺沼寫眞機店主）

悠然見南山

今井田清德

日當りのよい緣先から菊の畑越しに秋の山を眺むるところ南畫の景色である。

一秒の音命の音
スピード時代の銀座街頭、五感もしびれる樣な尖端的な忙しい相である。

悠久の大自然と、かげらふのはかなき人生、如何に調和を取り、意義と價値とを求むべきか。主觀と客觀、それは結局知足と靜觀の二つではなからうか。あまりにも生活に卽し自我に沒頭する現代人には、人生の眞骨頂は會得せられずして、不平と不滿のうちに五十年が終始するのではないか、狹き街頭に何の求むるところぞ、「廣野に立てり日は輝けり」の坦懷こそありて然るべしと思ふ。

（遞信事務次官）

岡山縣に對する感想

犬養毅

陶浪君より岡山縣に對する感想を述べよと求められたが、特に何々と述べる程の事もない。吾輩の學生時代に比すれば、今の岡山縣は雲泥の差で、人材も多く事業も盛になり、他縣に比して遜色はない。此處に至つた原因は元來が學問好きの地方であるから學生が多く、從つて多く人材を出したのは當然で政界にも、軍界にも、實業界にも、學者仲間にも、藝術家にも頭角を出した知名の人の多きが爲め今後は之等先輩の推挽で後進は續々成功する樣になるであらう。吾輩はよき感想はあるが、不足を云ふべき事はない。

今の不景氣に付いても、大都市は別として岡山の如きは最も其の深酷の苦痛を感ずる地方であるが、反面より之を見れば、斯の如く敏感なるは平素に於て諸種產業の發達し、現代式機關の整頓しつゝあつた地方たる事を證するので農業の種類も多く、農家の副業の多き岡山縣の如きは、他に比して嶄然一頭地を拔いて居る。

但し慾を云へば一つ二つはある。其の一つは縣地に中心力の缺けてをる感がある。

知友谷川達海君が常に之を心配してをつたが自分も同感である。縣會でも、實業界でも、其聲望で衆を率る程の中心勢力が缺けてをる樣である。今一つは縣地と云はず、大都會と云はず岡山出身の諸方面に活動しつゝある人々の才幹技能に於ては申分なきも概して云へば人に使はるゝには都合よく出來た人が多く、人を使ひ、人の頭となる流儀の人が少いやうである。大器晩成でなく小成に安んずる氣風で頴敏の質が多く、鈍重の人が少い樣である。

一概に吾縣のみ然りと云ふのではないが、吾縣人には慥に此缺點はある樣に想はれる。慾を云へば際限はない。吾縣は先づ上出來の部類に入るべき地方である。

（政友會總裁）

岡山縣青年會創立五十周年を祝す

岡田忠彦

私は曾て埼玉、長野、熊本の諸縣に、官吏生活を過した事がある。何れの縣も東京に雄大な青年會を組織して居て、又何れも立派な會館を持つて居るのである。春秋の總會には青年學徒の間に多數の先輩が參集して、和氣あいゝたる其有樣は眞に、鄕里の山川草木家庭の縮圖であり、名君賢相の流風餘韻も、良風美俗も、傳統も、歷史も、眼前に浮び出でるのである。埼玉縣の如きは會長澁澤子爵が、每會殆んで缺かさず、老軀を運ばれるので、會は宛然村の衆の親しき會合の形を呈するのである。私は招かれて縣の施政方針を說明したことなどあり、今も埼玉縣人會員の一員である。

獨り之等の縣のみならず山口縣の防長會、鹿兒島の三州會等共に基礎の鞏固なる實に驚くべく、又羨望に堪へない次第である。

予に言ふものあり、何の爲に縣の範圍を限り青年會を造るの必要ありやと、問ふ事を止めよ、府縣が雄大なればなる程鞏固なる青年會が存在し、之れが鄕里との連鎖となり、先輩後進の楔子であり、やがて社會進出の上に有力なる助となることは現實の有樣である。

今岡山縣青年會を見るに一つの會館があるでもなく、其金が存せるでもなく遺憾ながら其基礎未だ薄弱と言はねばならぬ。形に於ては甚貧弱であるが、併し此會が五十年の星霜を無事に經過し來つた事其事が其底力の强さを示すものであり、山奥の細流が土を洗ひ、岩を碎き遂に滔々海に流れて大河となるの運命を持ち、又しかあらせたいと切望に堪へない次第である。我岡山縣は我國最古の文明の存する處、舊來の通邑大都として各種各樣の文化と人種とを包擁し傳統に富み、名跡に裕に、吾人祖先の錬りに錬り、鍛へに鍛へた遺傳血液は宗敎に、哲學に、文藝、美術に、科學に、軍事に、實業に、政治に、相寄り相扶けて、光輝を放つべき秋は今目前に横はつて居るではないか。藩閥倒れ、軍閥亡び、薩長の跋扈も一朝の夢と化せんとせる今日吾々縣人が各自の特長を持ちよりて、一の岡山縣文明を築き世界の文化に貢獻すべきは卽ち今なのである。さらば岡山縣青年會よ彌々健全なれ。益益繁榮なれ。玆に謹み祝詞を呈し併て從來御盡力を賜はりし諸兄竝に會員に對し滿腔の敬意を表す。

（衆議院議員）

思ひつくことゞも

森原元夫

青年會も五十周年を迎ふる由、早いものです。私が幹事の末席を汚して居た頃から旣に三年半の月日が流れ去りました。

最近は組合長が凡て幹事となつて居るとの事で好い制度と思ひます。少數の者のみが働く時他の者の反感と冷淡とが存し勝になります。多數の會員が我々の會だと感ずる時會の發展があります。

屢々問題となる事ですが、學校を出て間の無い若い特別會員の數が少い樣です。かゝる若き特別會員が多數であつて、初めて普通會員と特別會員とが有機的に結合せられ、又若き

特別會員自らも稗益する處尠なからずと思ひます。若き特別會員の爲に、制度上便法を講ずるも必要ですが、現在の普通會員少くも幹事全員が卒業後も引續き會と連絡を保たれるならば、問題は自ら解決すると思ひます。

青年會の如きは封建的遺物なりと云ふ者をして言はしめよ。

一國の治績は地方自治の成績にかゝると云はれます。地方自治體にあつては國家に於ける以上に構成員の協力が必要であります。我が青年會員が懷郷の念を緯とし、協力の精神を經とし相倚り相扶くるは青年會のみの爲ならず國家社會に與ふる所大であります。

一時大會の時のみに存する觀のあつた青年會が事務所を得て常設的となりました、而して今や會館の實現も夢想に止まらず、時日の問題となつたことは慶賀の至りです。

（加島信託）

心のふる里

松崎天民

東京に住むでから、二十四五年にもなるが私の心には、故郷の山河が、深く喰ひ入つて居る。東京市民になりきれぬ此の心持は、何うした事であらうか。生れ故郷の美作の自然や人事やが、兎もすれば胸懐に擡頭して、ふる里懐しの情感となつて湧く。

美作の山奥へ歸つても、私の生れた家も、私の育てられた家も、もう他人の物になつて居る。そこには、父祖の墓があり、そこには幼い竹馬の友があるに過ぎない。放浪三十年の遊子に對して、郷人の有つ氣持に關しても、實は餘りに嬉しいものではないかも知れない。

それだのに、私の東京生活の情懐は、春に、秋に、「生れ故郷」を懐しむのである。

あゝ我が心のふる里よ——たゞそれだけでもいゝ。私には「故郷がある」と、よう思ひながら、營々の生活を辿つて居る上に、私は大きな慰藉を享けて居る　備作の天地を、故郷として永遠に、お互に幸福であらうと言つてよからう。

（著述業）

輕薄者立身せず

永井秀太

近頃の青年諸君は立身出世などと云へば老人の寢言の如く考へらるゝ向き多かる可きも、諸君、犬養總裁や宇垣大將に成つたとしたら惡い心持はせぬだらうと惟ふ。偖而茲に情誼

云々の講議は拔きにして、拙者の目に映じたる實例話を致して諸君の會得を願ふことゝする。

其昔明治三十年の頃現今財界知名のK氏と同役で日々机を竝べてコツ〳〵遣り居つた拙者の友人Sが在つた。Sは頭も能くロも八丁手も八丁中々小利口で殊に目先利害の打算に捷く且つ上手なこと實に驚くばかり。當時拙者も同樣に二十圓許りの月給を貰つて同じ下宿屋に居つた。明け暮れの遊び友達で寄席に行つては拂はされ、おそばを喰つては勘定を持たされ、時には北の方に遠征して大部分は負擔せしめられた。毎度のきまり事に付、實に其馬鹿々々しさを充分に自覺しながら、さて其時に當りてはどうも自然なるものゝ如く、自から無據的にさうさせらるゝのだから仕方がない。夫れは實にウマイものにて、決して拙者がヌウ坊式の故からでは無く、總ての友人が皆仕手遣らるゝのだから驚く。それで常に遊びの方面では何時も仲間を牛耳り廻して先達を極めて居るのだから豪い者だつた。ロが汚れるか愉快の一部が獲得せらるゝ間は割込み押掛けで大々親友振りを發揮し吳るゝも、少しく落目不廻りになれば、全くの路傍の人視することは平氣なものにて、其表裏、變顯術の巧妙なること到底常人の思ひも及ばざる處がありたりき。追々お互に歳と共に家庭を構ふるに及びては其心事其妖術愈々妙境に入り、例へば昔し一度ならず二度も三度も熱湯を呑まして放棄した友人が、何かの拍子に幸運に會し時を得て洋行戻りでもする時は、これは又實に驚く許かりの歡迎振りで横濱まで出迎ひに出掛け、宅には妻女を伺せ、舊知、親交、刎頸の友人は我れ一人式を發揮し、到れり盡せりの親善振りは人目を引くに餘りある。然るに僅かに半歳ならずして其友人が不幸に株で一敗又立つ能はざるに到るを見ては、例の漢語の名文句を其儘適切に實現すること毫も昔と異ならず。斯くて人の羽振りを狙うて轉々卅星霜輕薄の總てを盡した、今や頭禿、鬢鬆白を加ふるに及ぶ。

偖而回顧一番往時を追懐するに、前述のK氏は篤實溫厚其ものゝ如く、人の急を救ふに全部を施して惜まず、人に移して厚く身に薄く、友に求めず咎めず責めず、終始友の爲めに盡して他を顧みず、斯くて次第に自ら求めずして、所謂立身出世遂に數千の儕輩を拔きんでて、大なる勤め所の副長を贏ち得たり。其間に夫の惑れなるSは今猶ほ同所の書記級に蟄伏し、日々K君の自動車の後塵を拜しつゝ腰辨、てく〳〵物の哀れを止めつゝあり　そして暮夜猶ほ飢ゑたる犬の如く狼狽匆匆舊友の家庭を伺ひて叩頭垂尾何物かを探し且つ求めつつあり。

諸君以て如何となす。

（醫學博士永井結核病研究所長）

五十周年の祝福と記念

犬丸鐵太郎

岡山縣青年會の創立五十周年を祝賀するは會として慶賀至極であると共に之に參加し得る我等も亦幸福であると思ふ。蓋し過去半世紀間に於て幾多の會員が加はり又幾多の會員が亡はれたであらう、榮枯盛衰の風波には會員も亦遭遇したであらう、本會としても幾多の浮沈弛張起伏を免かれ得なかつたであらう。それが兎にも角にも五十年間永續して其祝賀を俱にすることは眞に幸慶として祝福すべきであると思ふ。

本會からは大臣大將も出て、大學者も生れ大實業家も現はれたのみならず、士農工商各方面の名士が簇出して居る而して其後繼者たる學生會員の數は約三千餘名に達して居る之を創立當時に於て會員僅に四十餘名の尠かりしに比すれば實に雲泥宵壤の差なりと謂ふべきである。此の本會の大發展は素より日本帝國の興隆に基因するものではあるが、往時の學生會員にして現在の特別會員たる人々が、自から自己の天地を開拓して、其地歩を築き上げたる努力に俟つ所多しと思ふのである現時の學生會員は東京の官界又は民間に於て至る處に岡山縣人の卓立せるを見て其偶然ならざるを覺り先輩の奮鬪を忘れてはならぬ。

東京に遊學するの目的は大に智德を研磨啓發するにあるが、旁ら各府縣の人士に交りて採長捨短自己の眼界境地を廣くすべきである。然るに折角東京迄進出して居りながら狹く小さく岡山縣人のみが固まりて巣を造ることは一歩を誤まれば、排他的となり井底の痴蛙たるの虞れがあるから大に注意せねばならぬ。我等は他府縣の人士のみならず遠く世界の人人にも交りて活躍の舞臺を廣くし一方亦鄉黨同閭の誼みをも深くすべきであると思ふ。一石二鳥斯くてこそ帝都遊學の價値を生ずると信ずるのである。而して恰も歐米に遊んで初めて能く日本帝國を理解し得るが如く東京に出て、初めて岡山縣と縣人とを知釋し得るのである。理解してこそ縣人の向上と親和を望むに至るのである。

現下の本會は實に盛大である。之を持續して尙ほ其大を致し、且つ其質を向上せんとするには須らく時勢に應ずる施設を必要とするであらう。例へば現時の會員は多數にして而かも一年兩三回の總會あるのみであるから會員同士と雖、互に相識るといふ譯にゆかぬ。互に知らずしては切瑳琢磨協力補翼の途が開けぬのである。事務所とか會館とかを設置して常時に會員集會の便に供し、先輩後進の連絡親睦を容易ならしむるが如きは、叙上の缺陷を補ふの一急務であると共に、本會創立五十周年を祝福するの記念として有意義なりと思ふ。之を行ふには資金を求めねばならぬ。經濟困難とも稱すべき此大不景氣時代に思ひも寄らぬといふ人があるかも知れぬが、焦眉の急務は捨て置くべきでない。玉石混淆の萎縮論は吾人の執るべき途ではないと思ふ。況んや次期の日本國民次代の岡山縣人を作るの一要素であるから此位に大切なる事業は他にないと信ずるのである。先年岡山縣人は僅に數十名に過ぎざる陸海軍の士官生徒を補育する爲に武學生養成會を組織し、十數萬圓の資金を醵出したことさへある。然るに更に廣く普く國家を荷ふ數千名の一般學生に對しては何等の中心的設備が無いといふことは如何にも遺憾の至りである。岡山縣三個國の大を以て出來ぬことではないのである、必ずや岡山縣人先達の士は後進子弟の爲に進んで寄與を吝まれないと信ずるのである。自己の後繼者の爲に喜んで捐出せらるゝと思ふのである。

頃日岡山縣教育會から縣民教育上の參考に資する爲めなりとて、岡山縣民性の最も短所と認めらるゝ點を指摘するやうにとの書信に接した。思ふに縣下出身者に對して其意見を叩き次代縣民の訓育改善を圖るのであらう。以て縣下に於ても優越なる岡山縣人を作らんとする氣運の勃興せるを見るべきである。縣外に在る我等は本會の五十周年を好機として上記の一活動を遂行し內外應呼して、縣人の向上發展を招來したいと思ふ。如斯は單り後進に對する情誼なるのみならず、吾人が享けたる先輩の德に酬い得るものと信ずるのである。

岡山縣青年會創立五十周年を祝して

吉備の人つとひ親しみすこやかにはや五十年を經るそうれしき

今の世に名をえし吉備の國人は此のまとゐより生ひ立ちにけり

若人の奮ひたつこそ五十年の今日の祝のしるしなるらめ

（前中國葉煙草株式會社社長）

○

佐藤武三郎

青年會報が五十周年記念號を發行するから近況だの種々の感想を書けとの事ですが、大した感想も持ち合せて居らぬ事は眞に恐縮です。先づ近況から申し上げます。我々夫婦に一男二女、妻の弟と下女一名合計七名の家族必しも小人數ではありません。

芝浦製作所を唯一の飯の種として居る技師の末輩の事故、本會に對しても近時の青年に就ても鄉里に對しても感想と銘を打つて申し上げられる樣な事は遺憾乍ら持ち合せず。詩歌

漫筆においてをやです。

三度の一度は青年會の會合にも顏を出し、大先輩や學生諸君の相當に毛色の變つた氣持の演說や、漫談の中に鄉里の言葉を聞く事を樂しんだり、三四年に一度位オケーマに歸つておたびの老松に子供心を呼び起して見る。

其處にはオームスローもメカニツクスも無く勞働問題も競爭入札も無い。人生の安息の處と云ふ氣がします。さうする毎に私は鄉里と云ふ物を持つ事の幸福を感じて居ります。之等が私の當青年會と鄉里に對する感想と云ふ物なのではありますまいか。

少々烏滸の至りですがついでですから、近時青年に對する感想に近い物を一言申し添へて失禮します。

新しく學校を出て來られる人程次第に眞面目になつて來られる樣な氣がします。結構な事ですが野暮に頑なのは世の中の潤を無くします。電車の乘車口から降りた客が小半丁も行つたのをあとから追かけて連れ戻り乘車口から入れて降車口から降り更へさす車掌を見た事がありますがあまり頑にすると世間があゝなつて來ます。もつと潤のある社會を作る樣に若い方の力でして戴きたい物です。

（芝浦製作所技師）

○

畠山藏六

今回本會創立五十周年記念大會を催さるゝに當り、學生委員諸君の努力は特に推賞さる可きで、文字通り寢食を忘れて懸命に奔走せられた事は、會長始め先輩諸氏も充分感銘せられた事と信じます。

由來同鄉の誼は疎ならざるもので、殊に集團生活に於て切瑳の因を爲すものでありますが、兎角功利論にのみ走りたがる近時に於ては、追々懷舊の念の薄らぐは遺憾に思つて居ります。

西諺にも「大河の流末を觀る者は多いが、其源を究むる者は少い」と嘆じてありますが、社會に於て大を成すに從ひ、益々其因て來る處を究むるの用意が無くては叶ふまいと思ひます。

今回の學生諸君の大奮闘は、全く純眞な愛鄉心の發露と見て愉快に堪へず、一言其喜びを申上げます。

（大倉鑛業會社）

近作五句

中塚一碧樓

秋の日わが家へ日かげりをあゆみ

家冷え〳〵おひるもすぎ空の雲

草花に日があたり赤ん坊うまれ

窓のうちにうようよ草花の鉢や儂らや

見るものに萩の刈株そこら青い苔

（俳人）

青年の一考を望む

矢野恒太（談）

岡山縣の人は一般に恰悧である。所謂小才が利く。器用である。故に之を使用するには甚だ調法である。けれども忠實とか、恪勤とか、誠直とか、柔順とか言ふ樣な點では他縣人に比して勝れて居るとは思はれない。寧ろ劣る樣な評判もある。故に使用人としても歡迎すべからざる短所がある樣に言はれて居る。愚直なものは相集り相援けて生きんとするが、恰悧なものは他人の力を藉らずに成功せうとする。故に縣の成功者には縣人の推輓などなしに成功したものが多い。偶縣先輩の下に立ちて事業をしても、必しも先輩の指導や協力によりて事業をなすのではなくて、却つて獨立的に課せられた事業を成し遂げる能力がある。かうなると後輩も先輩も獨立的に身を立てゝ居る。勿論其結果が先輩は之によりて、其職責を盡すとか利益を擧げることゝなり、又後輩は之によりて經驗知識を積み一部の功名をもなすことゝなる。けれども適不適を論ぜず、鄉人を集めて、地盤を作るとか、能不能を問はず鄉人を擁して世に出るとか言ふ風はない。

他縣の人は往々之等の點を擧げて、我縣人を非難する。けれどもこれは却つて我縣人の誇つてもよい點であると思ふ。唯之が爲に近年縣の先輩は後輩に冷淡であるとか、後輩は先輩に追隨しないとかいふ不平を縣人の間に聞くに至つたのは甚喜ばしくない事だと思ふ。鄉黨相援けるといふ事は人間社會生活の一要素たることは疑はないが、此點にのみ依賴して獨立心を消磨する樣な事は大に戒めねばならぬ。

× × ×

特に近年著しく眼につくものは、學校卒業後の就職難と之に伴ふ焦燥的不平である。學校を出れば、必ず相當な（本人が望んで居る樣な）地位があると考へることが已に無理である。事體無理なことを提げて、之が解決を所謂先輩に强ひてもこれも無理である。先輩の力で何んとも、出來ぬ時は退いて自

活の途を工夫するか、徐ろに時期を待つより外仕方はない。

時期を待つて居れば、後の出身者に排けられると言ふ人がある。こんな人は學校卒業以後一歩も進歩せぬ人である。例へば學校卒業後三年間職を得なんだとすれば、其間に得る知識經驗は悉くは在學中の取得の倍にも上るであらう。さすれば志ざす方面に對しては新卒業生の競爭し得ぬ點まで進んで居ねばならぬ。假令又其間充分に讀書や研究に從事出來なくとも、所謂心掛け一つで夜間獨學でも其知識に相當の進境を見ねば已まぬと言ふ工風がありたい。

× × ×

自活の途とは何であるか、獨創的工夫である。縣の先輩には其成功に新に獨創的工夫によるものが多い樣だ。此程も帝大法科の出身者が山村に歸りて村役場の無給書記となつたものがある。そして其希望は十年二十年の後其村の村長となつて村の政治をしたいといふのである。これ等は慥に屬官や手代となつて一生を終るよりも遙に立派な着眼である。

× × ×

來る年も來る年も卒業生の就職に就いて幾度となく相談を受けるが、相談に來る程の人はてんで何等希望も目的も無い。唯五六拾圓の俸給にさへ有りつけばよいと云ふ風である。しかし賴む人は無限で賴まれる方は有限と云ふ風であるから氣の毒だが其大多數は成功しない。而して就職難が加はると共に年々情實的依賴が增加して來る。社長を壓迫すれば何とかなると云ふ心理狀態だらうと思ふ。朋友親戚先輩の壓迫菓子箱土產物などの持來が增す。けれども苟も一會社を經營する社長がそんなことで人の採否をきめる樣だつたら事業は忽ちメチャ〳〵になる。これは余の場合のみではないから、これから就職口を求める人は大いに考ふ可きことだ。

猶一つ注意すべき事は余は縣の青年は就職でも賴まんとする人は中々熱心に上手に取入つて來る。事の成否は兎に角良い青年であると考へて居る中に、其依賴が成功せぬと決すれば忽ち態度が一變するのが少くない。

或は少し懇意になつて他日機會でもあれば何かの便利でも圖りたいと思ふか、未だ思はないかと云ふ頃には、小さな迷惑を掛けて所謂地金を出し、折角得んとして居た信用を根底から覆へすのがある。何んと云つても、世に立つには自己の信用を確立する事が第一であると云ふ根本が教育されて居ない樣だ。尤も此信用とは或る一二の人をうまく欺くことでは勿論ない。自己の人格の完成を意味するのだから暗夜獨坐しても影に愧ぢずと云ふ心掛けが必要だ。さう云ふ修養が先づ日常自分の周圍に居る友人や其他に見える樣になれば上の方へは自然に通ずるとのことである、然るに怜悧な人は兎角一擧に上から信用を得んとする風がある。

（第一生命保險社長）

半世紀間に於ける我岡山縣人は何を爲せしか

木村清四郎

歲月は流るゝが如く我岡山縣青年會も生れて以來早くも玆に半世紀の年月を經過することゝなつた。半世紀と云へば人間の壽命として見れば殆んど一生涯であつて隨分永いとも云へるが、會の如き集合體としては五十年、百年は必ずしも永いものではなく幾百千年中の一段階たるに過ぎぬ。寧ろ短い一時期と觀ることも出來よう。

今此五十年の間に我岡山縣青年會が如何なる經過を爲したかを回想して見ると、勿論會の目的とするところは、在京の我岡山縣人が青年者といはず、壯年者といはず將たまた、老年者といはず、互に相寄つて青年は、先輩と交り、先輩は青年諸氏と膝を交へ、相互に親睦を厚くし共に砌磋琢磨して德性を養ひ知識を交換し、以て國家社會に貢獻せんとするに存するのであるが、私なども夙に東京に在つて、今日では既に物故されて居るが、多くの先輩の知遇を得て、お蔭で世の中の事をも知り、稗益する處非常に多かつた次第である。後推されて圖らずも委員長として數年に亙り會の爲に周旋、微力を致し會員各位と共に只管會の隆盛を圖つた事もあつたのであるが、爾來各位の盡力に依り遂に今日の盛大を見ることを得て、玆に目出度五十年の一期を劃したことは眞に御同慶に堪へぬことである。

而して此の五十年間に、我岡山縣青年會々員各位が國家社會の爲めに盡きれたる事績を回想すれば、轉た今昔の感に堪へぬものがある。卽ち此五十年の間に我岡山縣人士にして或は學問の方面に於て政治、法律、理化學、文學等の各部門に傑出したる學者となられた人も決して少くない。又陸海軍の方面に於ても重要なる人物として、國防の樞機に參與せらるる武人もあり、或は政治家として非常なる頭角を現はし一大政黨を率ゐて政界に活動して居らるゝ人もある。更にまた財政上に於ても頗る重要なる地位に在つて、夙に國家樞要の財務に携はられた名士もあり、其他財界としても、或は金融の樞機に當り、或は製造工業、通商等商工業の各方面に於て夫夫重要なる機務に關與し以て國家の進運に多大の貢獻を爲し又現に爲されつゝある知名樞要の人士も枚擧に遑ない程で、我岡山縣人が學者に、政治家に、軍人に、財政家に、將た實業家に其他各方面に亙りて夫々樞要なる地位を占めて活動せられ又現に活動せられつゝあることは洵に掩ふべからざるの事實である。

云ふまでもなく、此の五十年の間には我日本帝國史上に特

筆すべき對外的の重大事件も多く、殊に日清日露の兩戰役及び世界大戰爭の如きは其の最も顯著なるものであつたが、凡て此等の對外的の重大事件に關聯して我岡山縣出身者が、前に述べたるやうに各方面に於て夫々樞要の地位に在つて、時の要務に參畫し而かも岡山縣人の特色を發揮し、難局に處して不撓不屈の精神を以て、益々國家社會の爲めに努力し多大の貢獻を爲したる其功績の沒すべからざるものゝあることは天下周知の事實である。此點は他縣に優ることあるも決して劣らないといふことは、實に我岡山縣出身者の誇として宜いと思ふのである。

然らば斯の如く重要有爲の人士を多數に輩出し、國家社會の爲めに多大の貢獻を爲したる功績を、願はくば之を過去の事實たるに止まらしめず、我岡山縣出身者は將來に於ても青年と壯年と、將たまた老年との別なく益々一致協力して此上とも國家社會のために努力を怠らず、一層我縣の勢威を擧げ過去を辱しめぬようにありたい。之れ私が今日岡山縣青年會の創立五十年を祝すると共に往事を追懷して會員各位と共に今後益々國家の爲めに奮勵努力し以て彌增し我國運の隆昌を期したいと切望する次第である。

（貴族院議員）

故郷忘れ難し

江見水蔭

岡山市を中心として自然形體は、甚だ平凡で、何等の奇も無い。

けれども矢張故郷としての岡山の自然には、云ふ可らざるの憧憬がある。

今六十二歳の自分が、少年時代に復元した夢を見る。それはいつでも岡山を背景としてゐるのである。

自分は『備前岡山』といふ歸省小說を書いた。明治四十三年であつた。昭和三年には『曉に歸る』と『故郷の寂しさ』とを書いた。

老文士が、故郷に對してどんな感想を持つてゐるか、もしそれが知りたいなら、最近に出版される春陽堂版の文學全集の、江見水蔭編を一讀されたい。

（著述業）

岡山縣青年會五十周年祝賀會當日思ひ浮べたる事

鹽田泰介

小生は岡山縣青年會の創立されしと云ふ明治十二年元旦の

雜煮餅を築地三丁目の花房邸にて祝つて下されて、直ちに故子爵の實弟直三郎氏の兄松田金次郎先生に從つて横須賀に行つたのが造船業に入門の始めである。以來五十年他の工業に從事した者は後世に殘る仕事を成し得た人が多いが、船は二三十年で廢物となるので終生の事業も後に殘らぬのが遺憾なる感をする。唯祝賀會當日會長が、前夜來の雨が晴れたるは恰も今日神戸沖で艦式が行はるゝ爲　陛下の御稜威により、我々も天惠を享くると云ふ意味を述べられたるが、巡洋戰艦霧島は小生造船所の所長で、造船部の長を兼ねて居た時分に出來たので、相當腦漿を搾りたる次第故此際御召艦になりたるを甚光榮に感ずる次第である。又我主戰艦拾隻の內八隻參列し戰艦日向も進水迄自分所長として在任したる故霧島を加へて二隻迄參加し尙吳行幸の御召艦となりたる一萬噸巡洋艦羽黑も、自分永年設備經營に力を盡したる長崎の造船所に於て建造せられたるものであるのは極めて愉快に思ふ次第である。

霧島も日向も小生が長生きをすれば小生より先きに廢艦となりて、何物も殘らぬが我國で始めて歐洲航路の大船を造ると云ふので其頃の大仕事として寢食を忘れて建造に努力したる常陸丸が、日露戰爭の犧牲となりたる爲琵琶歌となつて居るから歌丈けは永く殘るかも知れぬ。呵々。

× × ×

自分近頃の動靜

小生は全くの浪人にて、三菱造船會社の顧問と云ふ職名はあれ共何んの用事もあるのでなく、唯一週間に一度位重役食堂に晝飯を喫しに行く事政府の工業品規格統一調査會委員を命ぜられ居るので、會のある時は勉强して居る。又我國に船舶協會なかるべからずと思ふ故、帝國海事協會の船舶委員會、船舶管理委員會等には懈り無く出席して居る。

頭腦は追々貧弱になる樣であるが、兩脚尙健かで先年は富士、一昨年は白馬、昨年は燕、今年は乘鞍、妙高と高山を一つ二つ征服して居る。又最近は日本鐵鋼協會の室蘭に於ける講演會出席を機とし層雲峽探勝、釜石視察に仙人峠を徒步で越すなど、體力試練に心がけて居る。

郷里に關する事

農村窮乏と云ふ事は喧しく唱へられて居る事なれども、小生の郷里輕部村の如きは僻地なるが爲、進んでなす事業興らざる故か、村債なるものあるを聽かず然れ共臨時の支出には困るらしく曩には郡制廢止の爲農村が郡の中央に位するを以て舊行政區劃範圍各村の會合地となる事あり、小學校に講堂を建てゝ學校の設備を完くし之を利用し度いとのことにて之が敷地建築費を寄附したることあり、又今年は村役場の新築費に寄附を請はれて金錢支出の金額丈けを負擔したる樣なり。

（工學博士）

工業家は其の工場内に研究部と特許部とを設置せよ、國民一般には工業常識と工業所有權に關する常識とを普及せしめよ

廣瀬基

近時我が邦に於て、國産奬勵、産業合理化の聲が到る處に叫ばれ如何すれば、此經濟的難局を打破して國民を幸福に導き得るやに就いて朝野を通じて腐心して居ることは諸君御承知の通りである。而して之に關する具體策は現在の實情として應急的のものが必要であることは勿論であるが、永久不變の産業振興策としては優良なる發明、考案の出現に依るの外はないと考へるのである。申すも恐れ多きことながら聖上陛下には發明に關し、夙に御心を注がせ給ひ、今年の觀菊會よりは特に十名の發明家を召させ給ひ、又先年我阪谷男爵の會長たる帝國發明協會に對し三千圓の御下賜金あり、更に今秋の明治節に當りては、同協會に對し毎年一萬圓宛十萬圓御下賜金あり。實に感激の外はないのである。國民は聖慮の程を推察し奉り御踐祚當時の御勅語中にある「摸擬ヲ戒メ創造ヲ昂メ」の實現に向ひ邁進せねばならぬことを痛切に感ずる次第である。凡そ産業上の强味は天然的資源を無盡藏に有することであるが、併し之れなくとも其缺陷は智能的資源に依り充分補はれる可能性があるのである。試みに米國に就て考ふるに彼は國内に豐富なる天然的資源を有し、之に加ふるに智能的資源に依り之を活用し以て今日の富を來したのである。米國の輿論は「發明は米國産業の基礎を爲すものである」「發明は産業上最も重要なる資本である」と看做して居るのである。米國特許局では熟練なる審査官が盛んに民間に誘致されるので、悲鳴をあげて居るのである。米國と云はず歐米各國に於ける有力なる會社、工場では必ず研究部と特許部とを併置し設備の完璧と製品の改良とを計つて居る。之れでこそ益々産業的信用を得て經濟的戰場裡に「リード」し得る譯である。我邦に於ても近來此點に關し大いに覺醒し來り、民間と云はず、工業的仕事を爲す官廳でも特許課又は特許係を設け研究設備と相俟つて、工業所有權に關し遺憾なきを期する傾向の增加しつゝあるは喜ぶべき現象である。こゝに尙ほ吾人は一層聲を大にして之等の設備の完成を勸告する次第である。之と同時に一般國民特に産業方面に關係ある人々は工業常識を養成し、又工業所有權に關する常識に通じて居ると云ふことは非常に必要なことであると信ずるのである。之等常識の缺乏の爲めに吾邦産業が非常の損失を受けて居ることは否み難いことであると思ふのである例へば好景氣時代に之等常識を有することなくして、諸産業の濫設を見、以つて

今日の不況の一原因を爲したることは爭へぬ事實である。昭和四年に於て我邦に於ける特許の出願數一四、二九六件、特許數五、〇九〇件、實用新案の出願數三三、一一一件、登錄數一二、〇六〇件であつて、一年間に一萬七千件の新權利が生れて居るのである。特許の期間は十五年、實用新案の期間は十年であるから、全體の權利數は非常の數に達して居る。之を等閑視して工場の設備、成品の改良等は思ひも寄らぬことではないか。産業立國の實を擧ぐる爲、國民を工業常識化すると共に、工業所有權卽ち特許、實用新案、意匠商標等に關する常識の常に用意しおくことは、目下の急務であると考へるのである。

（特許局機械部長）

文藝復興時代に生れた青年會何處へ行く

道家齊一郎

岡山縣青年會は本秋五十歲の誕生を祝する爲めに小石川の植物園で盛大な祝賀會を開催した。東京の縣青年會が半世紀に亙る永い歷史を持つて居ると云ふことは確かに縣の誇りの一つであらう。口では五十年と云ふが之れを繼續することは決して容易な業ではない。半世紀に亙る永の歲月、諸先輩の熱心な誘導と學生諸君の協同とは之の貴い歷史の基礎なのである。

岡山縣青年會と云ふ赤兒が呱々の聲をあげたのは明治十二年で、それは我國に於ける文藝復興時代とも稱すべき學校創生期であつた。明治八年に設立せられた東京商法講習所が翌九年に府立東京商業學校となつて、次第に陣容を整へた時代である。之れが今日の商科大學となつたのであるが、更に明治八年に開かれた東京女子高等師範の前身がのびて來た時である。また明治五年から昌平學校内に設けられた小學師範が興隆せんとして居た。明治十年には江戸時代からあつた開成學校と東京醫學校が合併して東京大學となつた。之れが今日の帝國大學である。降つて明治十三年には音樂學校の前身が出來明治十五年には現東京工業大學の前身東京職工學校が生れ、明治二十年には東京美術學校が創立せられた。次ぎに私學に就いて見ると明治十三年に現專修大學の前身である專修學校が設立せられた。之れが經濟を專攻する學校の嚆矢である。翌十四年には明治大學の前身である明治法律學校が生れ更に翌十五年には東京專門學校が出來た。之れが早稻田大學の前身である。之より先明治十二年に東京法學院が開始せられたが明治二十二年に東京佛學校と合併して和佛法律學校となつた。現在の法政大學は之れであつて、法律を專攻する學校の始祖である。降つて明治十八年には現在の中央大學の前

身が設立せられた。慶應大學の前身慶應義塾が慶應四年から存在してゐることは餘りにも衆知の事實である。

青年會よ何處に行く

斯くの如く學校創生期とも云ふべき明治の初年に生れ出た縣青年會は特に知能の啓蒙に努力すべき使命を與へられたのではなからうか。かうした點に於て多數ある各縣の青年會に對し、特色を持つことは學生の團體としてふさはしいことではなからうか。願はくば月に一回でもよいから學生諸君の新しい研究や意見の發表と先輩の各方面に於ける有益な講演や討論を開きたいものである。また或時には擬國會を開いても面白いではないか。縣の先輩は多士濟々ほんものゝ大臣や次官や貴衆兩院議員も澤山あるではないか。縣人丈けで眞の政府の內閣でも立派に出來る筈ではないか。然しかうした會合に先づ第一に必要なものは場所である。が、悲しいかな無產者である縣青年會は五十歳になつても相かはらず手から口への其の日暮しで、家すら持たぬとは情ないことである。然し五十歳と云へばこれから眞に働く時である。この青年會が活動する以前に呉々も願ひたいことは貧乏人の入り易い現代潮流たる唯物主義に餘り深入りせぬことである彼等の得意とするブルジョア排擊をやめて自助と協力の下に進むことである。

ロッチデールの協同組合に倣へ

青年會の活動の爲めに、英國ロッチデールの消費組合のエピソードを提供して見よう。英國マンチエスター市から約十一哩の處にフランネルの特產地ロッチデール市がある。小じんまりとした工業都市であるが、世界の協同組合の發源地として世界に有名である。こゝのフランネル職工二十八名が團結して彼等の運命の改善を計るべく消費組合の設立を決意した。彼等は自助と相互の協力によつて各自の生活の開拓を計るべく、血の出る樣な思をして十四日毎に二ペンス宛の醵金をして、彼等の企業資金を貯へた。彼等が組合の基礎を確立する迄には幾多の困難と戰ひ遂に彼等はその初志を貫徹して一八四四年に、僅かに二百八十圓の資本を持つて消費組合を設立した、先づ生活に必要な食料品を購入して、安價に分配して漸時事業を擴張して今日ではイングランド、スコツトランドのみでも數千萬磅の賣上を有する樣になり、今では世界を風靡する一大運動となつてゐる。先年ロッチデールを訪ひ消費組合發祥の家と二十八人のパイオニヤの壁にかけられた寫眞を見て感慨無量であつた。岡山縣の青年會は他力本願から自力に更生せねばならぬ、さりとてロッチデール式に必ずしも一片を貯蓄しろと言ふのではない。それには色々の方法があらう、舞踏や、映畫や、音樂會で基金を募集することも自力に據る一方法と言ふことが出來る。かうした努力は必ずや理解ある先輩によつて酬ひらるゝであらう。今これを書き

乍ら彼のスマイルスの自敍傳の開卷第一ページの有名な一句を思ひ出した「天は自ら助くるものを助く」と。

（專修大學專務理事教授）

先輩に對して

龜山孝一

世間には矛盾した樣に感ぜられる教訓がある。然しこれも解釋の仕方に依つては決して矛盾したものでは無いと思ふものがある。先輩に對する處世訓に就いてもかゝる例がある。

或る人は「先輩に倚賴すべし」と云ふ。或る人は「先輩に倚賴すべからず」と云ふ。矛盾した訓戒のやうに感ぜられる一寸聞くと後輩なるもの何れの訓戒に從ふべきかに迷ふのである。

然し之は決して矛盾した訓戒では無い、解釋の仕方が惡いから矛盾したやうに見えるのである。と云ふのは「先輩に倚賴すべし」と云ふのは先輩を尊敬し先輩の言に聽從せよと云ふ意味なのである。「先輩に倚賴すべからず」と云ふのは先輩だけを賴みにして自己の獨立獨行心を失つてはならぬと云ふ意味なのである。

先輩に倚賴すべし、而も倚賴すべからず。何んだか可笑しい樣に感ずるが右の二つの教訓を合してみたのである。之を右の如くに解すれば先輩を尊敬すべし先輩の言を聞くべし、而も先輩のみに倚藉して獨立獨行心を失ふ勿れと云ふのである。先輩に對してはかうあるべきではなからうか。

（內務省事務官）

鄉土の魅力

土師清二

（赤松靜太）

鄉土をなつかしむ心を、ふんだんに持つてゐるのは、他國で相當に生活してゐる人々である。

折角志を立てゝ他國に出て働きながら事志と違つて惡戰苦鬪してゐる人々は『村へなんぞ歸るものか！』と寧ろ彼の村が彼の敵であるかのごとく憤りに似た顏さへ見せる。その時きつと彼の心には、嘗つて彼より以前に村を出た人が慘めに落ちぶれて歸つて來た時の、村人の浴せた評判が思ひ出されるからに相違ない。

それから又素晴しく成功してゐる人は鄉土を厄介扱ひにする。この人達は同鄉であるの故を以ていろ／＼な面倒を持込まれるからであらう。本當にそれはうるさく面倒であるに違ひないが、さうした面倒のために鄉土を厭ふにはあたらない。

鄉土を思ふ時、私は必ず鄉土の山川草木を思ひ浮べる。平

凡な山川草木であらうとも、郷土であるかぎりなつかしい。それから子供の頃を思ひ出して見る。これもなつかしい。大人になつてからのことは考へない方がいゝのではないかと思つてゐる。

郷土をなつかしむ心は、子供時代をなつかしむ心であるやうだ。

（著述業）

入會のことば

公森太郎

幹事の陶浪君が度々足を運ばれ、是非今度の會報には何か書けとの御催促でありました。實は自分は近頃全然馴れぬ仕事に新米として從事してゐるので、人一倍の努力を要する次第故、到底必要以外の閑事をやる餘裕がないと、御斷りしたのですが終に斷り切れず、大急ぎでこんな出鱈目を書いて、入會の御挨拶に代へる次第であります。

私は大正三年以來、帝國政府の命により、隣邦支那に使し又は駐在して、今年の八月中旬まで前後十有餘年を經過しました。任國で懇意な内外國の友人が增すに從つて、手が廻らず自然故國に於ける親戚、故舊、友人には次第に緣が薄くなり、往々彼は支那人になつてしまふたのか、などと噂されて居るとかいふ事を聞く程になりました。然し一日と雖も故國を忘れた事はありません。身は異域にありながら、心は度々故山に通ひ、幼少の頃に深く印象せられた、故郷の山川、風物、知己、朋友は夢の中に、幻影の如く現はれて來て、懐郷の情禁じ難いものがあるのは、常のことでありました。こんな思ひをして、海外勤務をして居るが、これがどれだけ國家の爲めになつてゐるかと、反省した時、自分の短才愚鈍の爲めとは申しながら、慚愧に堪へないものがありました。今年の四月上海の花見の頃、ふと左の五言の惡詩を得ました。

十年羈旅客　異郷老殘躬
獨歎春風裏　囘頭往事空

お上への御奉公も、二十三年勤續といふことで、モーよからうと思召したので御座いませう退官の恩命に接し、埋骨の覺悟を以て、勤めて居ました、支那を本年八月に引揚げ、同時に日本興業銀行に勤めることになり、これからは、故國の都で餘生を斯業の爲に捧ぐる事に致しました。是に於て、長らく疏遠となつて居ました方々と舊交を溫め其の御指導によつて、時勢に遲れて居つた、此の身を改善して行きたいと思つて居る矢先花房會長より、入會の御勸誘を受けましたので即座に入會致した次第で御座います。私は學生時代に無論會員であつたし、又幹事として一ヶ年間、會務を御預りした事もあるから、當然に會員だと思つて居ましたが、そこがそれ

海外生活者なるが故忘れられてしまつたのでせう。これからは皆様にも、忘れられぬ様に努力したいと考へます。殊に元氣旺盛第二の日本の柱石ともならるべき青年諸君と親しくお交りが出來る本會の事であるから、本會のお手引で、一つ老骨も若返つて、青年諸君と共に、天下國家を談じて見たい氣持ちがします。

入會の御挨拶を述べて、陶浪幹事への御約束を履行する事に致しました。

（日本興業銀行理事）

幹事への書簡

早川鐵治

肅啓、秋季の候益御清康御勉學大賀の至りに奉存候　先日は態々御來駕被下候て何か青年諸君に有益なることを認め差出す候樣達て御希望には御座候得共其節も申上候通り小生今日までの境遇は岡山縣人特質の何事に對しても大事を取ると云ふ大切なる注意を怠り候爲め永々浪々の身に相成候儀に有之斯る不心得の逆境者より御希望の如き事共申上譯は無之と存じ候間、折角の御來趣に候得共右重ねて御斷り申上候　草々頓首

○

工藤壯平

東京の眞中に居て同郷人だといつても、情を牽くのが夫れ程切でない。同郷といふ理由で特殊の關係を持つことが少いからだ。忙しくてつい紛れて居るからでもあらう。然し自分の經過して來た朝鮮や滿洲で、曾ては一種言ふべからざる懐しさを感じたものだ。他人から力になつて貰らふとも、力になつてやるとも思ふのではないが、別殊の引力を持つて居たといふのは慥だ。

同郷心は之を解剖して見れば、祖先からの長い間の交渉があつたことの先天的靈能、慣習や土語の共通、直接間接の相識、其の風物を共にして居たといふ同情共鳴、そして自分が故郷を忍ぶ時に懐かしく思ふに連れての聯想などであらう。或は幾分近い血が通ふて居るといふこともあるかも知れぬ。

世は愈忙しくなる傾向がある。一切の交渉は益普遍的に進む。同郷といふ因果關係は次第に濃くなるとも思はれぬが、せめて故郷を忘れぬといふ精神を保存したい。これが又國の强みだ。縣人の會合は此の道理を根基として行きたいものだと思ふ。

（宮内省御用掛）

同縣の關係を通して詩を觀る

鶴岡　伊作

この程同縣の富谷泰州翁の所から、私が嘗て作つた北郭移居の詩を何處かで見たと云ふのでその次韵の詩を寄せられた序に七十七の自壽の詩を示された。翁は故山田方谷先生の門人でまさしく同縣の先輩であるから未見の人ではあるが何となく懐しく感じて返禮のしるしに左の次韵の詩を贈つた。

富谷泰州翁七十七壽言。次二其自壽韵一。

草莽龍鍾是逸氏。老來意氣轉淸新。唯知仁者樂而壽。豈厭詩人窮且貧。物外早無二名利累一。身餘不レ受市朝塵。推敲一語爲レ君祝。修禊浴沂春復春。

詩は無論まづいが、心持だけは現はした積りである。同縣人であると既見と、未見とを問はず何と云つてもその間に一脈の情味が通つて居るから、我青年諸君もこの情味を基礎として平素から相互に接觸を保つて行かれることが肝心だ。

次に、この頃佛山堂詩鈔を見て居ると圖らずも、次の如き詩が見付かつた。佛山堂詩鈔は、豐前の村上佛山の詩集であることは今更云ふまでもない。

病中備前藤本鐵石來訪。賦二一詩一使二人代書一以示。

抱レ痾連日鎖二荊扉一。秋氣凄凉霜露飛。籬下花殘唯白菊。門前客到自二黃薇一。千山信レ杖君謀是。二頃把レ鋤吾跡非。伏枕這回殊可レ憾。唱酬難レ得筆同揮。

この詩は病中でお目に掛れぬから已むを得ず一詩を作つて御覽に入れると云ふので別段他意ないやうであるが、この詩に對する批評を見ると誠に怪しからぬことが書いてある、それはかうだ。

池内陶所云。往年鐵石入レ京訪レ余。爲レ之忙二了半日一矣。今讀レ之深愧二君之得レ計也

後藤春草云。婉拒妙妙

これでは丸で體良く前門拂を喰はしたと同樣だ。併し一面から云ふと鐵石先生も所謂慷慨悲憤歌の士で能く人の所へ押掛けて、先方の迷惑も何も構はず盛に議論をせられた有樣があり〳〵と窺はれる。兎に角今の青年諸君も鐵石先生のやうな氣慨と自信があるなら。何處へ出掛げて議論をせられても一向差支ない。況んや同縣の先輩諸君の所に於てをやだ併し私は青年諸君をおだてる譯でも何でもない。

次にこの程同縣の奥無聲君から、永倉新八翁の傳を讀むの詩を示された。無聲君に依ると新八翁は維新の當時彼の有名なる寺田屋事件に關係し能く危地を脫して、今尙ほ鄕里に餘生を樂んで居らるゝとの事である。無聲君は新八翁の息子と

懇息であるさうだが、私は何等の關係もない。併しその家柄が如何にも奇であるから次の如き志感の詩を作つて無聲君に贈つた。

奥無聲君寄下讀二永倉新八翁傳一詩一。次韵志レ感以示。

丈夫可レ恥是無爲。落々雄心掣二老羆一。學レ劍十年憐二志大一。挺レ身一擊見二才奇一。孤懐上國潛行日。遲暮家鄕逸樂時。獨想二其人一何限意。夢魂空繞北山陲。

それからついこの頃同縣の山田濟齋君の、所からその先考知足齋先生の知足齋詩鈔を贈られた。知足齋先生は山田方谷先生の令嗣で明遠先生の事で今回その五十回忌辰に當り、濟齋君が、右の詩集を印刷して記念とせられたものである。この詩集の中に知足齋先生が、その鄕里長瀨（今の伯備線方谷驛の所）に居られた時の詩があるが、その詩は如何にも能く長瀨の地形を言ひ現はしてある許りでなく前に述べた佛山堂詩鈔にもこの詩に似通つた詩があるから今兩者を竝べて左に記載する。

甲戌歲晚作十首中之二　　知足齋

一區幸領好田園。農業兼レ儒里巷尊。垂レ釣試レ耕唯所レ欲。正レ訓授レ讀未レ辭レ煩。朴淳成レ俗交常簡。貧賤從レ天樂自存。隔レ水營々行路客。那知咫尺有二桃源一。

偶詠　　佛山

農業兼レ儒跡自安。朝名市利不二相關一。一生淸福眼知レ字。宿世良緣身住レ山。牽レ犢試レ耕何作レ累。呼レ童授レ讀未レ妨レ閑。今朝最有二會心事一。煙雨西疇得レ句還。

どうです兩者殆んど符節を合する如きものがあるでせう。これは知足齋先生も村上佛山と同じく早くから意を仕進に絶つて鄕里に隱遯せられたから、その心持の似て居るのも誠に當然のことである。長瀨即ち方谷驛の地は伯備線に乘つた者は誰でも知つて居る通り、高梁川に臨んだ幽邃閑雅の仙境で殊にその地に關係ある儒者の號を取つて驛名としたこと抔も全國に類例のない所である。又この長瀨の地は方谷先生の居られた當時、長岡藩の蒼龍窟主人即ち河井繼之助が態々遠方から尋ねて來て、當世の時務に對する方谷先生の敎を請ふた所であると聞いて居る。この點になると佛山が病氣とは申しながら遙々尋ねて來た鐵石先生に門前拂を喰はしたことは如何にも遺憾で、せめて前に擧げた詩評でもなかつたら岡山縣人として一層佛山に敬意を拂つたであらう。私は別に詩を以て任じて居る者でも何でもないがかやうに縣人の關係を通して色々の詩を見て居ると誠に趣味津々たるものがある。殊に岡山青先會も今生は五十周年に當り、山田知足齋先生も同じく五十回忌辰に當るなどこれ等も何かの因緣があるやうに思はれてならない。

（元專修大學理事）

青年諸子よ須く立て而して眞劍味なれ

宇垣一成

我が國は古來瑞穗の國と稱せられてゐる。其の瑞穗の國が米が豐作であれば、鼓腹擊壤の反對に農民が苦境に陷るなぞといふことは、奇妙な現象であつて、而も夫れが現在の事實であるが如く我が國の經濟狀態は不安定で、如何にも公私經濟が行きつまつて居るかに見える。經濟國難の聲の高いのも强ち誇張の言草ではない。又思想方面に於ても世相は今尙依然として憂ふべきものが多く、國民精神の作興を要する事が益々必要となつてゐる。思想國難は矢張り我が邦家の前途に低迷してゐる。其他產業の不振、敎育に於ける師弟情誼の滅却等誠に容易ならぬ多事多難に當面して居るのである。就中國民精神の弛緩より來る思想國難は眼前に展開しつゝある。各種國難の主なる誘因たり動機たるものである。然るに世人は案外に呑氣に太平樂をきめ込んで、國家百年の計を忘れて居るものが尠くないのは誠に寒心すべきである。斯くの如く目下の我國は明に重大なる國難に直面し、形態こそ異なれ國の盛衰浮沈に關する大事たることに於いては、かの元寇の役と、日淸、日露の役とも、更に差異はなく、只前者と後者と異る點は銃砲劍戟を以て裝ひたる眼に見える外敵が襲來して來るか、眼に見えざる精神的の內敵が國民精神の頽廢を企てゝ來るかにあるのみである。右の如き外敵に對しては我等の祖先、我等の先輩は常に擧國一致、勇敢に美事に之を排除し打破して、國家を泰山の安きに置き、且つ國威を四海に發揚したのである。然るに今日の眼に見えざる內敵は耳障りの好き平和の美聲を看板としてひし〳〵と押し寄せて居る。經濟的壓迫と共に階級鬪爭乃至は文化享樂等の主張の下に我が傳統的精神を腐蝕して、國家を靡爛に導かんとしてゐるものがある。從つて考へ樣によつては軍艦や銃砲を向けて來る敵に比し層一層厄介であり、又危機であると申さなければならない固より世人も此の重大なる世相に對して全然無關心であるとは云はぬ。

卽ち敎化總動員と云ひ、國產奬勵と云ひ、緊縮節約と云ひ夫々相當に必要なる施設が看取せられてゐることは誠に結構な事である。併し吾人の見る所を以てすれば夫等の諸事業が掛け聲の大なるに比して效果は存外貧弱ではないか。宣傳は普く行き渡つてはゐるが、實行に徹底を缺いでは居らぬか。國民に日淸、日露戰爭前後に於ける樣な熱烈な緊張振りが充溢して居るであらうか。盛に國難などと呼號して居るけれども、國民の腦裏に響き、琴線に觸れて居る程度は遙かに過去の戰爭當時のものよりも低い樣である。現在程度の國民的自

覺緊張を以てしたのでは、當面せる複雜多岐なる國難を打開排除して、皇運を扶翼し、國連を進展せしむることは覺束ないのではないかと心竊に感じて、誠に痛心に堪へぬものがあるのである。

彼の歐洲大戰間交戰諸國民は國家の運命を賭し、國資を傾け加ふるに巨萬の人命を矢ひ、惡戰苦鬪、年を閱する事數星霜の長きに亙り、つぶさに辛酸を嘗め偉大なる國民的試練を遂行しつゝある間に、獨り我が國民は戰場圈外にあつて金儲けをして、一朝にして成金國となり知らず識らずの間に輕佻奢侈の惡風を生じ、加ふるに戰後思潮の混亂期に際しては深く世界の眞況、國體の眞髓を究め且察することなくして附和雷同して國民精神の靡爛を招いたのであつた、此の萎靡しつつある國民精神を振作し、緊張し、正順を失はんとしつゝある世相を善導し、邦家前程の指針を誤らしめざる爲めには、先づ青年が修養鍛錬を積み決然立つて此の難局の衝に當るの氣慨を以て奮鬪することを、余は切に望んで止まざるものである。

世間では、今に口癖の樣に青年は所謂第二の國民であるとか、青年は未來の國家を背負ふて立つべきものであるとかいふて居るが、余は夫れは最早實際に適しない陳腐に近い言葉となつてしまつたと感じて居る。何んとなれば、現在の靡爛に瀕する世相を作り、頽壞の種子を蒔き之を培養し來りたる人々に、之れが匡救改善を望んだ所で其の多くを期待することの難つかしいのは、掛け聲の大なる割に實效の擧り兼ねて居る現在の事實が證明してゐる通りであるから、眞の革新改善の大事業は純眞無垢で過去現在の世相に、惡因緣を有せざる青年の手によりて完成せらるべきが順道であり、又捷徑であると考へるからである。實に青年は一國元氣の中樞であり、國家の第一線に立ちて國民をリードすべきものであると謂ふ方が更に一層適切になつたのであると余はつく〴〵感じて居る心身剛健にして、純良有爲なる子弟のある家庭が明るく强く又未來があると同樣に、一國の建設も、興隆も、復興も、將又其の將來も、實にその國、青年心身の修養鍛錬の程度如何によつて卜されるのである。而してその修養鍛錬は祖國の歷史と世界の大勢に目覺めたる自覺ある信條に基いた換言すれば、國家觀念と正義の信念を基調とした自覺に立脚したる眞劍味と努力に俟つべきものであることは勿論である。

最近余の知人は復興途上の獨逸を見て次の如き所感を寄せて來た。

『獨乙の現狀及將來に對して悲觀する人でも、一度大學の圖書館と、學校の實驗室と運動場とを連ねて、青年の心身鍛錬の熱烈眞摯なる樣子を見るならば、どんな悲觀論者でも一躍樂觀論者となるであらう。』と今此の所感を見るも全く余の信ずる所と符節を合するものがあり國家的實務に自覺したる青

年の力が如何なることを爲し遂げ得るかは、一時は再起絶望と迄云はれた獨逸の現狀に見ても明である。

青年諸子よ、三千年の光輝ある歴史を有する、皇國を向上の途に進むるのも將又降り坂を辿らしむるのも、其の主體は實に諸子の修練行動の如何にあることを銘記せられなければならない。余は力強く「青年諸子よ須らく立て而して眞劍味なれ」と呼んで止まないものである。

（陸軍大臣）

故郷にて

尾上柴舟

◇父の遺骨を津山なる妙願寺の墓地に埋めて

墓穴をのぞくが如く並ぶかな父がながめて老ひしその山

ふたたびはわが見ぬ柩あまりにもをとなく早く土に埋るる

こゝにその柩はふかく埋めたりあゝいづこにも父はあらざり

◇公園にて

ふるへつゝ初花さけり故郷は奈義の嶺おろし雪をさそへば

◇舊友

四十年（ヨソトセ）の昔に今をかへしつつかたればわれらをさなかりけり

◇父の墓をつくりて

どつしりと大き墓石据へたれば父がこのみの墓なりにけり

すつきりと出來たる父の奥津城に心安んじ水捧げけり

◇大雪の早朝鶴山城址にのぼりて

とのぐもる空の下びに群立てる雲の山松風いまだなし

行き逢ひて遠く來ぬるを呼びかけて雪の山守杖かしくれぬ

山の末水のいくへもうちけぶり雪の國原見の極まらぬ

岡山縣人としての老生

昌谷彰

故郷と謂へば、何となく懐しく同縣人と謂へば自ら親しみを感ずるは自然の情と思へど、老生は二三歳の頃父母に伴はれて上京し、小學校より大學まで修業時代を東京に暮らしたれば故郷と謂ふ言葉に深き感じなく、又亡父が常に舊藩主松平家へ出入し津山青年協和會創立の議にも與り、更に鶴山館成るや其館長に擧げられたる等の關係の爲め青年協和會には創立の時より出席し、同郷人との交際はなしたるも別に郷土の思ひ出話しあるにもあらず、同郷人と他府縣の友人との間に交情の異なるものあるを感ぜず、況んや岡山縣青年會あることは友人の水川復太君や渡邊勝三郎君より聞き及びたれども入會の意思さへ出でざりき。此の如く老生が故郷又は同縣人に對する感じの薄かりしは、各府縣の人々の集合地なる東京に生長したると、郷里に墳墓なく、親戚なく、從て之を訪ふ機會なかりしとに由るものならんか。大學の業を卒へて後地方官となり、東京を出てより同郷とか同縣とかの關係より親き交際をなす人々を各地に見て稍羨ましき感を生じ來ると共に、同縣人なりとて訪ひ來らるゝ人に逢へば何となく親しみを感ずるに至り、京都にて初て岡山縣人會に列席して、漸く岡山縣人らしくなり、大正二年より住所を東京に定め得るに至て、岡山縣人茶話會に列席して先輩諸君の教を受け、岡山縣青年會に入會して青年諸君と談を交ふることゝなり、愈々眞の岡山縣人となりるを自覺するを得たり。更に今春四月同郷黑田英雄君、川村清一君等の御世話になりて津山を訪ひ初て故郷の山川を看、此處が君の生れた場所なりと松原の蔭を指示されて一種形容し難き感に擊たれ、幼時より產土神と聞かされたる八幡宮に參詣して懐舊の涙を催し、故郷のなつかしみは此なりと謂ふことを知り得たり。元來老生の家は祖先以來備中に住し、祖父の代に津山藩に仕へて作州人となりたるものにて、備中と云ひ美作と云ひ共に岡山縣内なれば余は家代々の立派な岡山縣人なり。唯東京にて生長したる爲に長く故郷に對し、同縣人に對して親しみの薄きを覺えたるも、既に同縣諸君の親交を得老生自らも故郷及同縣人に對する感情の一變したる今日及ばずながら郷土の爲め同縣人の爲に盡くしたしと思へど、最早還暦の老人日晩路遠其自覺の遲かりしを恨むのみ。今春歸郷の際詩あり作の拙なるは論無きも、事實を飾れる點は一もなし錄して同縣諸君の叱正を仰ぐ。

嬰孤出國不知還
北馬南船塵滿顏
今日來過夢中路
白頭初看故郷山

（前樺太長官）

虚禮と謝禮

武野藤介

ボーナスの有難さも、マルクスの「剰餘價値」に指摘された今日では、考へて見ると馬鹿々々しいものだつた。が、私は勤人ではないだから、さう云ふボーナスとは甚だ緣遠い。それよりも、リカルドの指摘した地代說のほうが、もつと馬鹿々々しいものに考へられるのだ。この地代は直接、私達の棲む家の家賃にも影響してきてゐるのだから。

都會は郊外へ郊外へとひろがつてゆく。

東京の近郊でも、武藏野の名殘りは僅かに、赤瓦や青瓦の文化住宅の立ち竝ぶ間に點綴して、竹藪を背負つてゐる黑ずんだ藁葺きの、柱の傾いた百姓家にだけ見られる。風致を添へてゐた檻の並木も、道路をひろげるためにはらはれなければならない。到る處に湯屋の煙突が立つた。こゝろみに、二本の鐵路を大根畑の中に走らせてみるがいゝ。その鐵路の兩側には、忽ちにして人家の密集をみるであらう。棲む者は皆な都會に働き場所や勤め先を持つてゐて、朝晩の驛々の雜沓は、それだけでも郊外發展の凄まじさに愕ろかされる。

地代はさがることを知らない。リカルドの地代說は、海を越えて、その旭東日本の、武藏野の郊外へも撒き散らされてゐるのだ。そして百姓は鋤を捨てゝ土地を貸した。現に、私のうちの地主の如きは、その息子に農學校を中途退學させて、そして神田の某私立大學の政治科へ轉校させた。また、或る百姓の悴は、コエタゴの杓を持つてゐた手で撞球のキューを握るやうになつた。彼等はリカルドその人は知らなかつたけれども、毎月々得るところの地代は、さがることがなくてのほる一方であることを充分に知つてゐたのである。

いつかも——私のうちの地主は、私にこんなことを云つてこぼしてゐた。

「……百姓をよしてからと云ふもの、家族の者がつぎ〳〵に病氣して弱らされてゐます。

けれども、地主の家は新築され、塀をめぐらし、白壁の倉も建ち、お寺のやうな玄關の式臺も出來た。そして村には町制が敷かれたのである。この上は、政治科を出る筈の息子が、町會議員にでもなつて呉れゝばいゝのである。電話を買つたのはその下心とも思はれた。

が、つひこのあひだ、この近くに土地を借りて家を建てた知人の、或る中學教師の細君の訪問は、甚だ私を憂鬱にした。

「あなたのお宅では、毎年、盆暮に、どう云ふものを地主のところへ持つていらつしやいますか」と、彼女は私に云ふのである。

「地主へ？」

——私は考へてみたこともなかつた。

「盆や歲暮になると、どこの地主でも、その玄關先へ、借地人のところから持つて來た砂糖袋だの菓物籠などが、いつぱいに飾つてあるぢやございませんか。」

「然しさう云ふ贈物なら、むしろ、地主のはうからこちらへ持つて來て貰ひたいものですな。なにしろ土地と云ふ奴は、その地主が腕を拱んで遊んでゐても金の入るものですからね。」

——さう云つても、意味の通じなさうな顏をしてゐるこの訪問客に、私は重ねて斯う云つてみたのである。

「學年末になると、生徒の父兄から、あなたのところなぞ、いろ〳〵なものを貰ふのでせうね。今年の春の砂糖袋でも持つてゐたら、それでも地主のところへ持つていらつしやい。」

云つて終つたあとから、私は甚だ憂鬱になつた。商店なら景氣と云ふこともあらうが、地主の玄關先の、その借地人に對する暗默のプロパアガンダだけは、どうしても私の腑に落ちないのである。が、この二ツの小話はすべて實話である。

單なる比喩ではないのだ。

謝禮は勞力に對する當然な報酬である。その勞力が「正しい行爲」であれば、その報酬としての當然な謝禮は、これを要求する權利があると云つてもいゝくらゐだ。謝禮と虛禮の區別はこの一點の差である。

私達はその日常生活に於いて、如何に多くの「虛禮」にわづらはされてゐるか。そして、これを虛禮と意識してゐると、してゐないとに拘らず、それがまたどれだけ、私達の考慮の時間を費してゐるか。一中學教師の細君の訪問はその一例に過ぎないのである。

教師はその當局から月給と云ふものを貰つてゐる。贈物を携へたその子弟の父兄達の訪問は、多くの場合、勞力以外の謝禮である。贈賄である。若しもこの贈賄がなければ、彼等の生活が保證されない、と云ふのなら、彼等はその當局に對してこそ、これを要求する權利を持つてゐるのだ。不當に低價されてゐる月給の「値上げ」を要求すべきだ。

一事が萬事である。私達の周圍にはこれに似た「虛禮」が餘りに多過ぎる。私達は、上述の地主の一例の如く、もつと「眞實」を知らなければならない。

（著述業）

スポーツ

松枝保二

青年を毒するものは柔弱であり懶惰であり不活潑である。これを征服するものは正氣、剛健、質實、横柄等である。青年の大多數が落者の病弊に陷る時、それは亡國の因をなすものである。この柔弱不活潑等亡國の病因を一掃するもの、ス

ポーツに如くはない。

當今、わが國に於けるスポーツの旺盛は、この意味よりして洵に慶賀に堪へないことである。

×

スポーツは青年の花であり興國の實である。ます〳〵スポーツの旺盛を望んで止まないものである。

しかし、スポーツにも競技本位のスポーツ即ち選手本位のスポーツの旺盛なると同時に、一方には普遍化した大衆のスポーツがなければならぬと思ふ。今日のところではまだスポーツの大衆化といふ域にまでは達してゐないやうである。

×

無論、スポーツにも種々相あつて、外國から來たスポーツは、悉く競技本位のものばかりで、その本來の性質そのものが選手制度本位に出來上つてゐるので、これから競技といふものを取去つては、その精神は根本から破壞される。ある選ばれたる選手が專門的？ に競技をして、一般大衆は所謂ファンとしてその快味を味うてスポーツの精神を體得するところに、これらのスポーツの味がある。

×

そこへゆくと、在來の日本固有の武道は大分趣きが違ふ。勝負といふものはあるが、所謂競技といはれるものとは大いに本來の使命と性質とが違ふと思ふ。

しかし、これも時代の相違で、封建時代の武士階級にのみ限られた時代と異り、一般の青年や學生の手に渡つて來たのだから、これを在來の武術といふ一語で取扱ふことは出來なくなつた。スポーツといふ言葉があてはまるかどうかは別として、少くともスポーツ化した形式だけはとらなければならぬ時代となつて來た。

この頃、各武道の統制ある競技が行はれるやうになつて來たのは自然の勢である。

×

私は決して外來のスポーツを排擊するものではないが、今日のわがスポーツ界の傾向を大衆的に見て、餘りに專門的な競技本位に墮し過ぎてゐると思ふ。が、決してこれを止めてしまへといふ癖論ではない。それはそれとして一般大衆はそのファンとして競技の快味を外間から味はふと同時に、別に大衆自らが味はひ得るスポーツの存在を高調したいと思ふ。

これを一例でいふならば、學校でも都會や農村の青年團でも、運動會等を催す時、餘り專門的な選手本位の陸上競技ばかりでなく、一方に大衆自らが何人でも行ひ得る昔ながらのカーニバル式の運動會があつてもいゝと思ふ。

×

私はスポーツの旺盛をいやが上にも高めると同時に、わが國在來の武道の精神をもこれと竝行して高むべきであると信

ずる。スポーツの大衆化、武道のスポーツ？ 化、さうしたところに、興國の正氣は勃然として興らざるを得ないと思ふ。

（文部省囑託）

偶感

太田收

今や我國は金解禁の實行、內閣の緊縮政策の徹底、加ふるに世界的不景氣等の原因に依り財界は極度の不況に沈淪し世を擧げて不景氣を呪ふ聲が都鄙に充滿して產業は萎微し失業者は增加し國民思想亦次第に險惡ならんとしつゝあるの狀態であります。

而して此等の原因を除去して民心の安定を圖り國力の發展民禍の增進を來す爲めには固より其の因つて來る所を究め必要なる施設の改善を爲し以て國民一致の努力に之が解決を俟つべきでありますが此等の事については問題が餘りに廣汎多岐に亙る嫌がありますから此處には最も手近な、そして前回にも一度意見を述べました關係もあり旁々再び教育問題に就て申述べたいと考へます。

近來よく農村の疲弊不振の問題が論ぜられるのを聞きます。而して其の中に教育に關する事項が屢々重要なる論點となつて居る場合を見受けます。即ち一例を擧げますと農村財力の窮乏に依る小學校教員の俸給減額乃至不拂問題、不就學兒童の激增、中等學校以上の學校在學生にして中途退學する者の增加等でありまして今や義務教育費國庫負擔の問題は政府の重要政策として何等かの形に於て解決せられねばならぬ實際問題となつて來ました。事實地方自治團體府縣市町村に於て最も窮乏を告げてゐるものは實に教育費であるのであります。

歷代の內閣に於ても教育行政については夙に教育制度審議會乃至調查會等種々の機關を設けて之が改善に相當留意して來た樣でありますが其の委員又は役員は多くは昔流の教育者等が選任せられて居る爲めに、過去の教育については相當識見も具有して居るものゝ多くは時代の流れに疎く時勢に適したる意見を立てる事が尠い爲めか見るべき施設の改善も行はれないのであります。

而も國家は年々多額の教育費を支出して居るのでありまして來年度豫算について見るも軍事費に次いで顯著な額に上つて居るのであります。而して之が最も有效に使用せられてゐるかと申しますと遺憾乍ら結果は必ずしもさうでありませぬ。それは現在の教育制度に大きな缺陷が在る爲めで此の制度の根本的改革に依つて要を補ひ不要を省き最も有效に活用出來る方法はいくらもあり得ると考へられるのであります。

大學高等專門學校の多きに過ぐるのは既に天下定論のある

所であります。之が廢止併合を行ふのも改革の一方法でありませう。

由來我國の學校教育は之を其の實際から觀て一種の職業教育、又は資格教育とも稱すべき外觀を具へ現在はその弊に墮し切つて居ると云ふ事が出來ます。卽ち之に入る者は學校を卒業しさへすれば直ちに相當な職業と相當な地位にありつく事が出來、立身出世の登龍門として考へられるの風がありました。故に子弟を學校に送る事は一種の投資とさへ考へられ殊に中以下の農工商業者の子弟は其數も多く此傾向は次第に顯著となり父兄は只有意識たると無意識たるを問はず徒らに子弟の「華かなる青春の夢」を煽つて遂には無理算段をして迄も之を都門の學校に送り果ては貧富を論ぜず子弟の學校教育を其の虚榮の具にまで持ち來すに至る極端な過程にすら進んだのであります。

此の傾向は歐洲大戰當時經濟界空前の好況に惠まれ人の需要が極めて旺盛であつて學校卒業者の賣行亦素晴らしく事實、教育を投資としても充分の利潤があつた事、と當時比較的學校の數も少く吾も他人もと學校入學希望者の增加せるを俸とし之を利用する政黨人に依る官立學校の濫設及び學校經營者の企業的心理よりする私立學校の擴大等々諸々の風潮に助長せられて今日に至つたものであります。然るに一度好況の夢から醒めて世は整理時代に入るや從來無限にまで增加膨脹するかに見えた諸産業も行詰り新なる人の需要は激減して學校卒業者は忽ち就職難時代に逢着したのであります。卽ち此處にも需要供給の原則は適用されて生産過剩に依る商品の暴落賣行不振の現象と同樣に學校卒業者に對する世間の評價も低下し更に其の賣行は今や全く皆無の狀態に立至つたのであります。産業界に於て生産制限が唱へられ企業會社の整理が行はれると同樣に學生製造會社たる學校に於ても此の理論は當然に行はれなければなりませぬ。

最初から投資の目的を以て學校に入つた子弟、之を送つた父兄は玆に至つて臍を噛むも及ばないのであります。固より斯る制度の存在を許した社會狀況の惡かつた事は否定出來ませんけれ共漫然只學校に行きさへすればよいと假定して實行した輕擧は戒めねばならぬ所であります。更に注意すべきは此等學校に入る子弟の學資金は總て地方農村から都會に集積されるものでありまして、之は如何なる形式に依るも殆んど全部は再び地方に還歸しない所の資本であると云ふ事であります。家産を傾け子弟の教育に專念する傾向の多い地方農村の實例を思ふ時農村疲弊の重要なる一原因として子弟の教育費が擧げられるのは亦宜なるかなであります。一方世を擧げて就職難を嘆ずる今日、年々出る所の數萬の學校卒業者は多くは其日より失業者となるのであります。彼等の學んだ學校は實際に卽した職業教育を授けて居りませんから獨立して職

業に從事せんとするもそれは不可能であり農村に歸らんとしても既に依食するの資を有しませぬ。勢ひ遊民として世を呪ひ社會を否定するが如き危險なる思想に走り易く、學校に於て慣らされたる口頭の理論癖と青春の激情は驅つて實際運動に趨くに容易ならしめます。有識者の赤化運動の尖鋭なる事は事例の明かに示す所でありまして此等の失業問題を取扱ふに當つては一般勞働者のそれに比して更に深甚の注意を要すべき事勿論であります。

斯く考へ來りますと現在の教育制度について又其狀態につき邦家の爲め眞に寒心に堪へないものがあるのを痛感します。東西古今の歷史について見るも教育制度の運用其宜しきを得ると然らざるとは一國の興亡の依つて岐れる所、其の缺陷は實に國家百年の禍根であります。

而も國家は年々莫大な費用を支出して此等高等諸學校の維持增設に汲々とし之努めるに拘らず結果に於ては年々失業者の數を增大せしめ危險思想の蔓延に助力するの觀さへある有樣で而も一方又之が取締りに多大の費用と努力とを費してるるのであるから實に矛盾此上ない譯であります。

改革の方法は種々ありませう。學問の蘊奥を極めその發達を圖るには眞の英才を教育するに止むれば足り、幾萬の子弟をして總て高等の教育を受けしめるには當りませぬ　故に現在の大學高等專門學校は斷じて其數多きに失するものであります。之と同時に一般には實際に卽した職業教育を授け、時代の進運に伴ふ科學の研究を奬勵し以て産業の發達人類の福祉增進に寄與せしむべきであります。人物經濟の上より云つても斯くする事が理想的でもあり又實際的でもあると考へるのであります。

世の識者にして之を憂ふるの士亦天下に尠くないと思ふのでありますが、之が改革に當つては種々の困難就中政黨の關係、周圍の情實等仲々に煩瑣なる問題を生じ易い爲め之を實行する人がないのでありませう。けれ共吾々は一日も速かに斯る大政治家の出現を望んで止まないものであります。

と同時に國民一般も從來の如き教育に對する誤つた觀念を捨てゝ、より本質的な思想に基いた考へ方に立歸りたいと念ずるのであります。

由來我が岡山地方は比較的教育の進んだ所でありまして人文の進步亦見るべきものがありますが、同時に又その弊害も尠くないと考へます。口に農村の不振を唱へ却つて之が原因を爲す誤つた教育觀念に捉はれたる如き行動に出づるは矛盾も甚だしいものと云はねばなりませぬ。徒らに空虚な高等教育讃美に共鳴して地方農村の開發を忘れる如きは最も戒心を要する所であると考へます。

時間と紙面に餘裕がありませぬので充分に意を盡す事の出來ないのは甚だ遺憾でありますが將來學に志されると否とを

問はず鄉黨青年子女諸君に於かれ多少の御參考ともならば望外の幸であります。

（山一證券會社常務取締役）

○

黑田英雄

岡山縣青年會は、明治十二年に初めて會合が催されてから、既に五十年の歲月を經て本年秋其の祝賀會が開かるゝに至つた。恰度私の生れたのも明治十二年であるから、私と同じ年齡と云ふ譯である。私は之の五十年の間大した仕事もなし得ず慚愧の至りであるが、然しこれから一つ大に社會に働かうと考へて居るのであるが、岡山縣青年會は、其の間岡山縣と云ふ鄉里を同じくする人々を互に結び付けて、其の親睦融和を圖り、社會に目に見えぬ大なる貢獻をなし來つた事と思ふ。

今日の社會に於ては、各自が單獨で、孤立して居ては、到底充分に仕事をして、世に貢獻することは出來ない。例へば、先般縣下で行はれた大演習の樣な場合を考へて見ても飛行機ばかりが如何に優秀でも、亦砲兵ばかりが如何に卓絕して居てもいけない、全體の機關が聯絡調和して機能を發しなければ、全體の勝利を得ることは出來ないと思ふ。社會に於ても、さうであつて政治にしても、事業にしても、學問にしても色色の方面の人々が互に協力して始めて大なる效果を擧げることが出來るのであると思ふ。

以上の意味に於て、國民の各方面に於ける聯絡協調の完全であり强い國は、國威も揚り國も榮ゆるのである。然して國民の一致協力は小さな各方面に於ける色々な團體とか、會とかによつて、充分に結び付けられるならば、やがてはそれが集つて大なる一致が出來ることゝ思ふ。鄉黨の一致團結は、往々閥と云ふ樣な言葉をつけられて非難を受けるが、これは惡用せられた場合であつて、これが爲めに其の大なる利益を否定することは出來ない。

岡山縣は特に社會の各方面に有力な士を多く持つて居る。從て岡山縣青年會も將來益々其の使命を完ふすることに、お互に協力することが、獨り鄉黨の爲めのみならず、國家の爲に誠に望ましき次第と信ずるのである。

（大東京鐵道社長）

入會の辭

沼田賴輔

私は目下原籍は、東京市であるが、前後十餘年、岡山縣に在職して、その生活の大部分は、岡山縣に在住したので、岡山縣は、恰も第二の故鄉の如き感じがする。殊に長女は、岡

山縣高等女學校を卒業して、岡山縣人に嫁し、長男は私立金川中學校を卒業し、岡山縣人を妻としてゐるのであるから、家庭的にも、岡山縣とは離るべからざる關係をもつてゐる。この關係からして、世間では、往々私を誤認し、岡山縣人としてゐるものが多い。先般花房會長から、青年會に入會を勸められたので、私は會長も、亦、矢張私を岡山縣人と誤認して居られる事と速斷し、縷々事情を開陳して辭退したところが、今回同會幹事陶浪捷太君より、會長の思召を傳へて再び入會を勸められるので、その誤認でないことを了解し、喜んで茲に入會することゝなり、所謂準岡山縣人となつた以上は、少々自己宣傳の嫌はあるが、私自身私が準岡山縣人である資格を享有して居ることを告白する必要がある。却說私が前後十餘年岡山縣に在職した事に就ては、微力ながらも岡山縣の爲に貢獻した事は多少あるのである。卽ち自己の專門とせる歷史家の立場よりして、神社の昇格運動に携はつて、いづれもその目的を貫徹した事である。その重なるものは、吉備津神社の昇格と、和氣神社の昇格とである。

誰しも知る如く、吉備津神社の御祭神は、畏くも孝靈天皇の皇子に渡らせ給ひ、而も國家に大勳あらせられるにも拘はらず、當時は國幣中社であつたので、私は吉備社記を著はして、祭神の神德を顯彰することを圖ると同時に、當時の神宮佐佐木元孫氏とともに、昇格の當然なることを、時の當局に勸說したところが、その說の至當なることを認められて、吉備津神社は、一躍官幣中社に進められることゝなつた。こはもとより神德の然らしむる所ではあつたらうが、私の微力も、亦、與かつて少なくはなかつたのであると思ふのである。私が今春三月危禍に罹つた時、現官幣中社藤井宮司は、數ならぬ私のために、病氣平癒の祈願を修せられたので、生死の境に彷徨した私の病氣も、奇蹟的に平癒して、今尙餘命を保つことゝなつたのは、全く吉備津神社の冥護によることゝ信じてゐるのである。

次に私は、村社和氣神社は、和氣淸麿公の祖神を祀つた神社で、而もその地が、公が呱々の聲を擧げさせられた發祥の地であるので、其地の敬神家三島政太郎氏と共に、その昇格に盡力したのであつたが、これも亦當局に認められて、一躍縣社になつたのである。

以上は私が、職務外に盡力した重なる事であるが、職務上に關聯した事は、もとより當然の職責であつて、こゝに申上ぐべき筈のものではないが、その重なる事は、岡山縣の鄉土地史の研究に沒頭し、その著作としては、岡山縣地誌を始めとして、吉備女鑑、備前法華の由來、畫聖雪舟、岡山縣史、備中畫人傳等がある。其他、斷片的の物として、當時の山陽新報の紙上に於いてもこれが紹介を忘らなかつたのであるか

ら、是等の事柄は、當時の新聞を讀まれた人、卽ち青年會員諸君の父兄の方は御承知の事と思ふ。

又私が在職中私の教授を受けたもので、今は知名の士となつてゐるものは少なくない。文理科大學の楢崎博士、石川縣警察部長麻生亮藏、現代議士難波清人氏の如き、今も互に師弟の思情をつゞけてゐる。尙私の學統を受けたものは、永山卯三郎氏があつて、今回大演習の刊行物は大抵同氏の手に成つてゐる。其他在京の師範學校卒業生諸君は、每年同窓會を施行する每に、私を招待して、その舊誼を溫められることは、私の感謝して措く能はざる次第である。

明治四十四年上京以後は、吉備群書集成の編輯と校閲とに與かり其後事情あつて、一時中絶することゝなつたが、最近に至り、森田敬太郎君、正富曉君等の盡力によつて復興することゝなり、兩氏の依囑によりて、目下これに携はることゝなつたのである。

右述べた如く、私は岡山縣人ではないが、私の事業の半は、殆ど岡山縣と關係は絶えないのである。卽ち岡山縣人に比して、岡山縣に貢獻した事は少なくないから、世間が私を誤認して、岡山縣人と見做すも無理からぬことであつて、今回岡山縣青年會長が私を會員に推された事も、蓋、如上の事跡を認められた事であつて、自惚ながらも、準岡山縣人の資格ある事と信ずるものである。

さりながら、私の岡山縣に在職したのは、旣に二十年の昔であつて、齡も旣に六十の坂を超え、從つてその頭腦も、亦、古くなり、近代の青年諸士と相伍することは、到底覺束ない事であるが、何卒鄕里の父老に接する心持を以つて、斯學の相談相手になつて下さらば、これに勝る私の喜びはないのである。僭越ながら、以上を以つて、入會の辭といたします。

（昭和五年十一月十八日）

（文學博士、東京考古學會副會長）

希望

小山松吉

青年諸君は口を開けば、國家の爲に努力せねばならぬとか、社會の爲に貢獻せねはならぬと言ふのである。併し國家社會の爲に力を盡すには先づ其の地位を得なければならぬ、地位を得なければ如何なる抱負も經綸も之を實行することは出來ないのである。

學窓に在る青年諸君が社會の各方面に活躍して居る人々を見るならば、奇異の感を懷くことがあらうと思ふ、それは社會に於て相當の地位を得て居る人の中に、新らしき學識もなく才能も認められないやうな人が可なり多數居ることである。諸君は此等の人々が如何にして優勝劣敗の活社會に於て

成功し得たかを怪しまるゝであらう、諸君は斯る事象を見て、社會に於て相當の地位を得るには學問や才能は必ずしも之を要せないと速斷してはいけない、學問とか才能とかは社會に於ける成功の一要素たることは勿論であるけれども、此れが唯一の要素ではない。學識のある者は往々にして空理に走りて實務に通曉しない、才智ある人は才智に任かせて事務を眞面目に執らないのである。故に社會の各方面では正直にして眞面目に實務に勉强する人を必要とすし、縱ひ學識はなく才能も亦十分でなくとも、之を信任し之に樞要なる事務を取扱はせるやうになり、此の如き人々を重く用ふるに至つたのである、從つて正直に勉强する人は追々に地位が進み重役にも爲り社長にも爲るのである。青年諸君は此の事象を深く觀察して、社會が如何に正直なる實務家を必要とし居るかを知らねばならぬ、換言すれば現今の社會は多士濟々であつて博識有能の人が雲の如く居るやうであるが、正直なる實務家は官界にも實業界にも案外に尠いのであることを了解せねばならぬ。諸君は此の點に著眼し、學校を卒業し就職せられたならば、其の職務は諸君の學識才能に對しては甚だ不滿足であつても、自己の職責を尊重し正直に實務に勉强せらんことを望むのである、諸君にして正直に實務に勉强せられたならば、是れこそ虎に翼を加ふるやうなものにて諸君の成功は疑ひないと思ふ、是れ諸君が他日相當の地位を得る所以であつて、是に於てか始めて國家社會の爲に力を盡すことが出來るのであると思ふ。

（檢事總長）

懷しい若き日の思ひ出

（三十有餘年以前の岡山一中野球選手）

水谷竹紫

何と云つても少年時代の思出ほど懷しいものはない。

時は明治三十年前後、今の岡山一中が、まだ單に岡山中學と云つて、西川べりの師範學校構內にあつたときの事である。（後に今の御城の內に轉じたが）

私はたしか、その時代、長崎縣の大村中學から轉じて、岡中へ入學したものだ、そして可なり校の內外を荒れ廻つたと覺えて居る。

柔道、劍道、ランニング、ボートそれらの運動はもとより野球にも相當身を入れたものであつた。

當時の日本の運動界は、東京では第一高等學校あたりが牛耳を取り、關西では同志社などが主位で、中學界では岡山中學などが優秀の部に屬したものだと記憶する。

野球は、當時同志社から轉じて來た溝口の勝さんがズバヌ

ケで、此の人が凡てをリードして居た。溝口君は岡山市の素封家杉山岩三郎氏の令息であつた。

此の人の指導で我々は中學時代の多くの時間をグラウンドに費したものだ。たゞ――グラウンドと云つても校庭は大變狹かつたので、試合となると、最初の時代が旭川河口の三角洲、後には上道郡の旭川鐵橋下の廣場で行はれたのである。

そして、當時の選手の面々と云ふと……

なるほど三十年の昔である、もう故人となつて居る人も可なりにある。第一にその溝口君が故人だ――、大正六七年の成金時代に神戸で活躍した津田資郎君も今は亡き人となつて居る。速水篤二郎君の令兄速水金次君も亡くなつて何年になるか……が、また同時に、今日では時めく名士も少くない。

古い方から云ふと、今は安田に勤めて居る山口經治君、當時經さん經さんと云つたものだか、此の人が溝口君に次いで捕手であつた。當時マスクはあつたにしても、今日の樣なものではない、擊劍の御面のやうなもので、それを被ると、よく見えない、うるさいので當時の捕手は大抵マスクなしであつた。山口君もマスクなしでやつて居たので、眼鏡に球を打ちつけて眼を負傷された事もあつたと思ふ。

投手には大森勝造君が有名であつた、此の人は陸軍を途中辭めて米國へ渡つたと云ふが消息を知らない。愉快な大男で、ボールをやつてその罰として眉毛を半分剃られて登校した事もあつた。小生は主として遊擊手又は三壘手で、一壘手としては今の海軍少將西崎勝之君が確實な捕球で光つて居た。同じく海軍に居る熊谷君も小柄でスマートな選手だつたし、人造肥料の坂田愉三郎君も投手としてならしたものだ、近い頃興銀に來た公森太郎君はどうだか知らぬが、最近陸軍少將となつた中崎三郎君も在學時代はごく短かつたが、矢張り野球場の人であつたに相違ない、有岡寛治、淺野晋一郎等の人々も大に活躍された面々で、勸銀の大橋信吉君も捕手として有名であつた。此の人はニックネームをモンサンと云つた、或は今でも竹馬の友仲間ではさう云つてるかも知れない。恐ろしく廻りクドイ仇名で一寸解釋を要する。

何でも當時漢文の先生に大橋と云ふ人があつた、その顏貌頗る怪奇で、モンスターと云ふ仇名があつたさうだが、それを轉用して、此の大橋君に持つて來たのである。大橋君こそよい迷惑、今日では知つての通りの好紳士だがその當時だつて紅顏の美少年で決してモンスターではなかつた。

紅顏の美少年と云へば、當時內山下の城內にあつた小學校に二人の美少年が居た、それが野球が巧い仕込んだら大したものになるとあつて、わざ〳〵コーチに我々が出かけものだが、それが後に岡中に入學して選手となつた。一人は今の貴族院の池田長康男で、今一人は鶴見祐輔君なのである、池田君はスンナリとした見事なフォームで投手を勤め、鶴見君は

例のグリ〳〵した眼を爛かして捕手を勤めたと記憶する。

今は岡山市會に牛耳を握つてる山崎定太郎君、銀行家の松尾保三郎君も矢張その當時の選手であつた。

御自身こそボールを手にしなかつたが、いつも球場に現はれて、今日で云へば、彌次隊長とでも云ふべき人物に、今は宮內省に御用掛を拜命して居る、書道の大家工藤壯平君があつた。

此の男がまた非常に愉快な人物で、學校はそつちのけで、手習ばかりやつて居た、小野鷺堂氏の「このはな帖」だの「假名の手ほどき」だのと云ふ習字手本と首つ引で、快々坊と號し、中學の二三年時代に印判なんか作つて唐紙だの畫仙紙などに早くから、見事な文字を塗りつけて居たものだ。

小生とは極く親しくいつも同じ下宿に居たものだつたから、小生が球場へ出ると、それを應援に出て來たファンであつたらうと思ふ。

住友の國府精一君第一銀行の明石照男君……此の面々は野球はやつたかやらなかつたか、一寸思ひ出せぬが、運動場で親しかつた事を思へば或はやつたのかも知れない。

つひ先年まで滿鐵の理事であつた岡虎太郎君もたしか野球の選手であつたと記憶する、が、それよりも思出の深い話は、同君などと共に、ボートで瀨戸內海を乘廻した事であつた。當時校規として漕艇區域は兒島灣內に限られたものだか、何しろ血の若い我々ども、あんな池見たいな狹少な灣內などは喰ひ足らない、一つ外海（と云つても瀨戸內海なんだが）に漕ぎ出して、大に烏城男子の意氣を見せようなんどと氣張込んで、一氣に對岸の高松に乘りつけ、それから多度津に進み、金比羅に詣で（こゝで大に珍談があるのだが他日の御笑草にしよう）あの邊の海を數日漕ぎ廻つて歸つて見ると、學校は大騷ぎ、我々がボートで出て行衞不明と云ふので、水上警察の搜索隊は出る電報は八方へ飛ぶなんかと云ふ始末で、當時の校長服部綾夫先生からダイブ油を絞られ、停學幾日間と云ふ處罰を受けたものだ。

（此の仲間には、以前岡山縣青年會の幹事をして居た大月良輝君も居た、今はどうなすつて居らるゝか御互に久しく御無沙汰して居る）

特にも私の御世話になつて居た保證人が、花房子爵の先々代端連翁であつたので、服部校長は何かと云ふと翁を引張り出して相談對手とされたものであつた。特にも此のボート一件のときなどは大變に御心配をかけたものだ。

翁としては頗る迷惑、いやもう今から考へれば、誠に恐縮その者である。

しかも翁の高德は、腕白で亂暴で始末の惡かつた小生を叱りもせず、常に春のやうな溫顏で孫のやうに可愛がつて下すつた事を思ふと、かう書いて居る今でもその墓前にひれ伏し

たいやうに思ふ、……懐しい思出のいみじき一つである。

今一つ、その當時、第三高等醫學部（後に醫學專門學校……更に今日では岡山醫大）の校庭によく野球を練習に行つたが、その時分に我々を親切に指導して下すつたのは……一寸御名前を思出さないのは恐縮だが……松の木の悅さんであつた。

松の木の悅さんとは無論ニックネームである。當時の醫學校の校庭にはその中央部に一本の見事な松の樹があつた、練習の餘暇、選手連はいつも此の松の樹の下で休息する、從つて此の松の樹と醫學校のスポーツマンとは切離されない聯想をもつて居る。處が此の悅さんは、いつ行つても必ずグラウンドに出て御座るので、誰も居ない時でも必ず此の松の樹の根本さへ見れば悅さんを發見する事が出來る。そんな譯で、我々はいつの間にか氏を呼ぶに松の樹の悅さんと云ふ事になつて了つた。

此の悅さん、眞黑な顏のスマートな遊擊手で非常に快活な方であつたが、今はどうして居らるゝか、何れ今日では立派なドクトルに相違ないが、どなたが御存知の方はあるまいか、懐しい思出の一挿話として再び御目にかゝりたいもの と思ふ。

それから野球選手ではなかつたが、柔道の强い人に濱野英太郎君があつた。この人も海軍の軍人で餘程以前に少將に進まれたと思ふ。當時小生も柔道が得意で、校内で他には誰れとも負けなかつたが、濱野君ばかりには齒が立たなかつた。巨軀のしかも柔和な方で、在校時代に既に我々よりも遙かに大人びて居られたと記憶する。

それからまた……

いや、かう話して行くと、牛のよだれのやうに際限がない、何れ他日、何かの機會に話させて頂くとして、今日はこの邊で打切るとしよう。

まだ若い〳〵と思ひながらも、指折り數ふれば、もう五十の坂に達した。往年のクラスメート、若草のグラウンドに血を沸かした面々も、或は半白の霜を頂き、或は可なりテツペンを光らして、難かしい顏をして御座る人もあれば、愛兒乃至愛孫を撫でながら、美しい好々爺ぶりを發揮して居らるゝ方もあるに相違ない。

何としても懐しい思出である、スキートな回想である。

今は野球狂時代、かう云ふ昔の人々が相集つて今一度球を手にして騷いで見たいと思ふが、さてどんなものか、

一昨年の病患に片腕を斷つた、半ば癈人の小生ながら、まだ氣だけは若い。腕がなくなつたから球は握れないが、昔取つた杵塚、アンパイヤー位の世話役は結構勤まると思ふ。

どうだい。經さん、モンさん、坂田の愉公、池田さん、鶴見さん、雲の上人の工藤の快々坊も、時々は 下界に出現し

たらどうだ。……

（著述業）

○ 山田準

方谷驛開通式賦此

白雲幽處一川縈。恍聽當年絃誦聲。新置山陽方谷驛。後人當有憶先生。

拜丸川松隱先生墓于備中西阿知村極樂寺

掃苔平昔願。始入阿知村。邸廢松安在。寺幽墳儼存。首丘全晚節。浴露感天恩。拜罷倍追慕。百年吾道尊。

三島中洲先師十年祭。雷堂學長五年祭。賦奠

垂老猶期聖道隆。招魂此日感何窮。師翁父子後先逝。宿草碑陰悵立風。

高梁松山町村併合記念式。紀喜

峯園水抱自成鄕。併合周年歡滿場。何啻江山眼前好。人和方見大高梁。

臥牛山。舊藩板倉公居城址。舊稱御山城

參天喬木鬱崢嶸。古道苔寒石自横。八代藩公遺德在。邑人猶說御山城。

知足齋府君五十年忌賦奠

一代行藏自有緣。祭壇新奠舊詩編。秋風吹冷兩行淚。紅葉青山五十年。

（二松學舍專門學校長）

現代青年に與ふべきもの

永井潛

吾邦現代の青年生活の最大缺陷は、所謂「學生生活（スチューデントライフ）」なるものゝないことである。講堂へ出て、ノートを取つて、下宿に歸つて試驗勉强をする、唯是れだけである。師弟の感孚も、交友の親愛も、パブリック・ライフの準備も、一切皆無であつて、可惜この大切なる時と機會とが全然空費されて居るのは、實に遺憾千萬である。そこへ行くと、米國、獨逸、わけても英國の學生生活の實によく行つて居ることは、周知のことであるが、私は、昨秋瑞典ウプサラ大學を見學した時に、『ナチオン』と唱へられる寄宿制度を參觀して、非常に興趣を覺えた。これは、恰度、我邦舊藩關係の寄宿舍を、大學と結び附けたもので、鄕土を同うせる大學生が、共同の建物に起臥し、そこには圖書室もあれば、ダンスホール等もあり、眞面目な講演會もやれば、愉快な鄕土祭もやる。そして夫々を同鄕出身の教授が統轄指導して居る。隨つて其の中に行はれる生活は、英國のカレッヂに見る樣に窮屈でもなく、さりと

て又亞米利加のフライターニチーに見る樣な自由でもなく、程よい中間を行つて居る樣で、誠に良い制度と思つた。念ふに岡山縣の青年諸君は、五十年の歷史を有つ青年會があつて、他縣の青年に比すれば非常に幸福であるが、更に一歩を進めて、この『ナチオン』の如き理想的の寄宿舍が出來て、夫れが模範となつて、漸次他の縣にも普及したならば、現代青年に與へらるべき最大の賚物であらうと思ふ。

（理學博士帝大教授）

鷲羽山

田村剛

自分は鄕里のことを偲ぶ毎に、人文的な事實よりも、餘計に自然や風景に興味を惹かれる。それは私の職業がいつの間にやらさうした性格を生みつけて呉れたのであらう。否正確には、私の性格の特質が、私の職業を授けたのである。

實に思ひ出せば、皮肉な運命ではある。諸國の山川を庭先のやうに心得て、飛び歩いてゐた脚の男が下ノ關の遭難以來、遽に隻脚男となり、水を離れた魚のやうに、哀れな境遇に陷れられて了つた。

當然此頃は、出歩く機會は少くなつて、夢に登山を樂しみ、幻に山水を恨むやうにもなつた。それでもまだ義足を鳴らしながら、一人前には歩いてゐる。歩いてゐるのではない。乘り廻つてゐる。山へ行くには必ず駕籠の世話になるのだ。

此間久しぶりで、香川縣の坂出町から小艇に乘せられて瀨戸內海を橫斷して下津井に上陸したが、こゝで保勝會の人々に迎へられて、やはり駕籠で鷲羽山に登つた。そして私は意外な絕勝を發見して暫くはうつとりとして無言でゐた。恥かしいことに、私はかうした風景が鄕里にあらうとは夢にも知らなかつたのである。

少しく先に、脇水理學博士もこれに登つて、超八景の讃辭を與へたさうである。勿論私もそれには同感である。日本アルプスのやうな山は歐洲にもカナダにもある。然し鷲羽山の海の展望に比べられるものが何處にあらうか。それは量と質とに就いて、優にアルプスの偉觀に比肩しうるものである。然も此種の海景は世界の何處にも求め得ぬであらう。私は此風景をどんなに大げさに紹介しても、決して批難せられるやうな懸念はない。

岡山縣に誇るべき事物は尠くないであらう。然し鷲羽山の雄觀は、確かに縣下の大名物の一つたるを失はぬと信ずる。まだ見ぬ人、少くも縣人にして鷲羽山を知らぬ人は、是非共一度は訪れて賞ひたいと思ふ。それは縣人の義務といふも言ひ過ぎではないであらう。

（林學博士）

進取の力と指導の力

佐々木良一

一

何時の世に於ても、如何なる國に於ても、進取の力は青年に在り、指導統率の力は壯年若くは老年に在る。此の二つのものが相倚り相助けて玆に始めて立派なる事業が成就し、幸福なる社會が組織されるのである。これは古今東西の歷史の證明する所で、決して吾人の一家言ではない。

青年は活氣に富んでゐるから、一旦事に當れば思ひ切つた仕事もするのであるが、平生は先づ修養時代である。されば世故に長け、經驗を積み、所謂酸いも甘いも嘗め盡した先輩、卽ち壯年若くは老年の人々から、指導され誘掖され、始めて完全なる人格を造り上げ、赫々たる功業も成し遂げるのである。

二

遠き外國の例を引くまでもない。明治維新の鴻謨を翼贊した人々の事蹟を見れば、直ちに了解されるのである。乃ち維新志士の多くは青年血氣の人々であつたが、これ等の人々を指導し誘掖し統率した者は、水戸に於ける戸田蓬軒、藤田東湖、信州に於ける佐久間象山、長州に於ける村田清風、九州に於ける藤本鐵石の如き、孰れも四十五十若くは六十の老輩であつた。京都に於て三條岩倉等の新進氣銳の公卿を激勵し鞭撻して、發憤興起せしめたものも亦鷹司政通、三條實萬等の老公卿であつた。『善く歌ふ者は他人をして其の歌を繼がしむ』と云ふ諺があるが、此等の人々は取りも直さず自ら善く歌ひ、又よく後進をして其の歌を繼がしめたものである。

若し世故に長け、經驗を積んだ先輩が、青年の指導誘掖を怠り、後繼者を造らぬとすれば、それは自己の事業を放棄するもので、次の時代は暗黑と謂はねばならぬ。之と同時に活氣ある青年が、唯だ其の活氣のみを恃んで、經驗あり思慮ある先輩を輕蔑し、何等學ぶ所なきに於ては、卽ち亦『歷史は繰り返す』と云ふ人間社會の法則を破壞するもので、唯だ自己の前途を亂雜にするのみである。愚の骨頂ではあるまいか。

三

我が岡山縣青年會は、創立以來已に五十年の星霜を閱し、今や其の記念號を發行するの運びとなつた。これは明かに上述の弊風から超脫して、先輩と後進との間が、圓滿に調和されてゐる證據である。卽ち先輩は常に其の經驗によつて指導と誘掖とを怠らず、青年は又先輩を尊敬し、生きたる津梁、生きたる指南車として其の經驗と思慮とに學ぶ所あり、之を

自己の活潑々たる氣力に加味して、身を立て道を行ふの心懸けがあり、遂に五十年の久しきに亙つて、何等の波瀾もなく、益々盛大に發達しつゝあるのである。これは吾人が他に向つて大に誇りとする所で、國家社會の爲にも洵に喜ぶべき現象である。

四

近來は社會思潮の動搖と共に、青年學生の氣風も大に廢頽し、苦々敷き學校騷動が到る所に勃發しつゝある。大學、高等學校、中學校は固より、女子大學、女子齒科醫專、各種女學校にまで波及し、遂には日本の先覺者によつて設立され、日支の學生を收容する上海の同文書院にまで飛火して、全學生の放校處分と云ふ報道さへ傳へられてゐる。實に憂ふべき傾向である。殊に最近一兩年の共產黨事件に多數の學生が連座してゐることは、掩ふべからざる事實であつて、此の外にも優れた智能を持ちながら、治安持維法に觸れて、每日の樣に檢擧せられて來る多くの青年學生がある。此等は大抵二十二三歳から二十七八歳迄の前途有爲の人々である。予が職掌上、每に之を目擊してゐるのであるが、その此處に至れる動機や心理狀態は種々雜多で、一概に論ずる譯には行かぬ。併し彼等の環境に大なる缺陷のあることは亦歷然たる事實であつて、換言すれば我が青年會の如き良風美俗の下に陶冶されなかつたことが、彼等をして前途を誤らしめた大なる原因の一とも云ひ得るのである。

五

畏るべきは環境の力である。予は此等の憐れむべき青年學生を見るにつけ、忌はしき學校騷動を聞くにつけ、環境の力が彼等を驅つて茲に至らしめたことを想うて、慄然として懼れ、慘然として悲しみ、國家の前途を憂慮して已まないのであるが、一面に我が青年會の如きものがあつて、穩健著實なる發達を遂げつゝあるのを見ては、亦頗る心强く感ずるのである。從つて今回の創立五十年を記念すると共に、先輩後進の間を一層よく親密にし、相倚り相助けて益々其の隆盛を圖り、徐々に之を全國に及ぼして、上述の如き不祥なる事件を一掃し、以て國家の元氣を維持せんことを切望する次第である。

（司法省秘書課長）

賴山陽の詩に就て

田邊碧堂

頃日友人から新刊の賴山陽詩集なる洋綴本を贈與せられたから、先づ卷首に揭げある此本の輯註者たる木崎某の序說を讀んだ。驚いたのは山陽を呼ぶに非詩人を以てせることである。此筆法で推すと、唐宋の大詩人も亦緖餘の事で、非詩人の詩であることゝなる。李白は供奉で今の親任官待遇の御用係、杜甫は工部員外郎で官吏、王維は尙書で今の大臣である。歐陽修は太子少師で今の宮內省の大臣、王安石は大政治家で宰相、蘇軾は翰林學士で地方官もしてをる。其他支那では儒者が一面に詩人と目され、又詩人として自ら任じてをる。山陽が修史家文章家として、其一面に詩人たることは、此等の人々と同じ行き型である。當時京師での俗謠に書は貫石詩は山陽に學敬所と、世間から山陽を目するに詩人を以てせしこと。又山陽が死期迫れる數日前に、尺牘を篠小竹に贈つた其文中に『賴襄が藝は詩を以て爲第一樣に候』とあり。如此山陽自身も詩人を以て任じてをる。是ぞ當然なり。然るに故さらに『非詩人の詩として之を愛す』と云つたのは抑も何の意なりや。詩人を小さな一種の專門業と誤解して、山陽を此窠中から抽け出さしめんとする僻見か。或は近時評論家が往々山陽の詩に粗笨の點ありと批難せるを氣にし、辯護の爲にせるにあるか。斯して然らば支那詩人の閱歷を考慮せず、舊幕時代陋巷に詩作是業として、蟄居せし人々の境遇に思ひくらべて、偶ま〳〵山陽の地位閱歷は唐宋の大家にも比準すべき、詩人としての大宗たりしを忘却してのことならん。かかる妄評に對して論議する要はなきも、世間往々詩人たるものゝ、古往今來大臣鴻儒政客高士、何れの地に處つても堂々たるものであることを氣付かれぬ方もあらんかと思ひ、山陽を非詩人なぞと論定することの非禮非義なるを明かにせんため此處に數行の文字を並べることゝせり。

（大東文化學院教授）

五十周年を迎へて

小川義章

岡山縣青年會が東京に設立せられて本年は恰も其五十年に當るといふことだ。十月二十六日にはその記念祝賀會が小石川植物園に開かれて古くは親しく創立に携はられた犬養阪谷の兩先生、新しくは今日尙學窓にある青年諸君が一堂に會して過ぎし日の思出、來るべき日の希望を共に語つて會の隆盛を祝した。私も久振りに出席して、之迄名前のみ聞いてゐて未だ馨咳に接したことのなかつた縣出身の知名の方々に接面し、又久濶の先輩知己に會つて面談するの機會を得て、晩秋の午後を殊の外愉快に且有意義に過した。

五十年といへば決して短い歲月ではない。その間に我青年會からは幾多の人材を社會に送り出したことゝ思ふ。東京に殘留してゐられる方のみに就て考へても想像もつかない程の數であり、それが各々社會の樞要な位置にあつて働いてゐられる。更に地方に散在し、鄕黨に歸つてゐられる方々のあることを想到すると實に無數といつてもよい。私は岡山縣の物資

の生産力が他縣のそれと如何なる比例をなすかは知らない。然し人材の產出といふ點にかけては他にまして頗る豐饒な地であると思つてゐる。勿論之は鄕黨出身の先覺者の並々ならぬ指導や後輩の一方ならぬ努力によつたものではあると思ふが、人の力よく地の利を制すで我が岡山縣の前途、從つて青年會の前途また洋々たるものであると思ふ。

東京の味覺の世界に於ては眞夏には岡山特產の桃、初秋には岡山特產の梨、晩秋には岡山特產の柿がある。何れも斯界の王座を占めてゐるもので東京人の味覺の世界になくてはならぬものだ。一流の果實店が岡山特產品をおかずしてはその估券にかゝはるかの如く、競つて之を陳列してゐるのを見て私は常に輕い誇りを覺えてゐる。それと同じに今日我國の政黨會社學界社交界に於てそれ自體を重からしめるといふ意味に於て岡山縣出身者を擔ぎ、或は擔がんとしつゝあるのを見て私は興味深く且愉快に感じてゐる。

鄕黨のつながりは何にも增して親しみを覺ゆるものだ。黨派や職業や年齡や地位はその前には解消して終ふ。誰れでもよい、幾人でもよい。社會の要望を背負つて立つて華々しく而も實質的に働き得る人々が青年會より輩出することを待望する譯である。

（東京帝國大學學生主事）

岡山縣青年會五十周年記念式に際して

大橋信吉

去る祝賀會には極めて多數の來會あり盛會であつた。明治十二年以來半世紀の長きに亙り續いてきた事はその間多少の消長はあつたにせよ、この種の會にしてはよく續いたものだと思ふ。人生五十年とみれば、本會五十年の歷史は決して短くはなかつたであらう。然し永遠に存し尙發展の道を辿るべき本會の齡は五十年といつても猶發展の餘地が多いと思ふ。祝賀會當日犬養毅先生の言はれた樣に同先生等が東京へ出て來られた當時は縣出身の先輩にして、同氏等の鄕關を出た青年を指導すべき人が乏しかつた。いや殆んど無かつたのである。そこで同氏等進取の氣に燃える青年は自ら努力奮勵よく自己の地步を拓き、他に賴ることなく獨立獨行よく今日の地位を克ち得られた。見よ、他の府縣にして藩閥に固まれる所を、明治の維新以來若干の俊秀の士を出して朝野に覇をなすことを得たが、今日衰ふるものが少くないではないか。これはみな先輩の援助に仰ぐこと多く、努力を惜しんだからであらう。

木縣出身の學生も先輩が今日の大をなしたのはそれぞれ各

自が獨立獨步よく自己の地位を獲ち得たことを考へて、自ら努力を積み先輩に依賴せうとの弱氣を起さないに限る。併し先輩は自らが苦しんで來た過去を考へて學生の努力に對してその努力の報いられる樣成功を助ける樣指導を與へ便宜を圖つてやることを努むべきである。

（日本勸業銀行理事）

所感

平賀潤二

岡山縣青年會が創立されてから五十年を經過した。最初は小規模だつたにしろ、これ丈けの會がよく盛大に、無事に續いて來たものだと今更の樣に思ふ。此の由緖ある會をどうしても續けて行かうとする强い心の努力が會員の間に無意識に働らき續けて居たからだらうか。若しさうだとすればその心持ちは一體何處から生れて來たのだらうか。又その樣な心持ちがなくとも會は續いて來たかも知れない。夜の次には晝が來る樣に會が出來て五十年經つたと云ふ事は或る點から見れば平凡な當然の樣にも考へられる。折角今迄壞さないで持つて來た硝子鉢だから、今壞れるのも惜しいからまあ持ち續けて行かうと云ふ程度の氣持ちで居た人も中にはないではなからう。古い會員の方々や役員の方々はもつと〳〵積極的な愛着を此の會に對して持つてゐられるに違ひない。私は學生役員として此の會に列つてゐた當時から、一體會員の方々は此の會に對してどんな氣持ちで居られるだらうかと度々考へて居た。創立當時の會員の方々の心持ちと比較的新しい會員の方々の心持ちとを比べて考へて見ると、そこに面白い差異が見出されるだらうと思ふ。

此の意味に於て青年會創立五十年記念事業の一として此の所感集が編纂されることは私個人としても非常な興味と期待とを持つて居る。願はくは洋々たる希望と淡々たる愛着とを盛るであらう此の所感集が會員相互の强い楔となつて、老いんとする青年會五十年を心から祝福してやり度い。

（芝浦製作所人事課）

默々

田中寛一

世の多くの人々を觀察して見ると思想や感情を容易に表出する傾向の人とその反對に容易に外に表出しない傾向の人とがある。前者は之を外向的な人物、後者は之を內向的な人物といふ。外向的な人は言葉巧みで社交的であり、內向的な人は言葉數も少く獨居を樂む。社交的な人は人から愛され易いけれども尊敬はされ難い。之れに反して內向的な人は親み難

いけれども一度親めば永久の交りとなり、尊敬を受けることが多い。一般に內向的な人は人として一層發達したものである。小供よりも大人の方が內向的であり、女子よりも男子の方が內向的であり、文化の發達の著しい民族は野蠻人よりも一層內向的である。又同一個人でも素面で居るときよりも酒を飲んだときの方が外向的である。世に大事業をなす人は多くは內向的な傾向の人である。これ等の諸點から見ると內向的なものが一層發達したものだといへる。

之を歐洲人について見るに南歐人は概して外向的な傾向が强く、北歐人は內向的な傾向が著しい。それは日常の動作の觀察にも現はれ、又種々の社會現象の統計的研究や文藝の特徵からも之を窺ふことが出來る。而して日本人は之を全體として見れば北歐人と同じく內向的であると私は考へる。然るに近來外國殊に米國風の文藝、運動乃至は風習が盛になつて、日本人のこのよい傾向が破壞されつゝあるのではないかを憂える。外向的なものは勢力の浪費をする人である。それでは大事業は成し遂げられぬ。われ等は內に蓄へて、終日獨居して淋しさを感じない樣な默々の人となる修養をしたいものである。默つて働け。これが私の自ら誡める言葉である。

（東京高師教授文學博士）

所信を述べて
青年諸君に望む

野中勝明

余の始めて東京に來りたるは明治十三年一月中旬である。上京の目的は當時家兄の購讀し居りたる曙新聞と云ふ東京から來る新聞に陸軍幼年生徒三十名を募集す、希望者は同年一月二十日迄に願書を差出すべしとの廣告ありたるを見て之に應ぜんが爲めであつた。其頃には鐵道と云へば日本全國中唯京濱間と阪神間に布設せられてあつたのみであるから、急いで上京するには勢ひ海路に依らざる可らず。依て當時最大最良の飛脚船と稱せられたる外車輪の東京丸に乘て單身東上したのである。其頃我國文化の程度は略ぼこんなものであつた。當時は西南の戰亂鎭定後既に三年を經過し明治新政府の基礎も確立し國會開設請願運動等で天下猶ほ多少騷然たるものありたれども日本勃興の曙光は朧げながら既に之を認め得たのであつた。

本會の成立は其前年にして同窓の學友にして半年許り早く上京し居りたる有森新吉、村上祐、佐藤悠次郎の諸氏は皆既に其會員たりしが故余も亦時々其會合に列したるが、當時の會員は四十名許りにして其內學生の數は二十四五名もありたるが實に微々たるものであつた。獨り學生の微々たるのみでなく岡山縣人にして當時の在京者は舊藩主及之に類する人々は別として其他は極めて少數の文官と極めて少數の陸軍將校があるのみにして、（海軍將校は一人も無かりしと思ふ）實業界方面には名の知られたる人は一人も無かつた樣である。唯獨り儒者操觚者の間には我縣人中にも名を天下に顯はしたる士少からざりしも之を除いては當時の岡山縣人は殘念ながら實に不振の狀況にあつたのである。之に反し當時羽振の良かつた薩、長、土、肥、諸國の士は至る所に幅をきかし、政府の要路は悉く以上諸國の士に依て占められ新興の實業界に飛躍するものも亦多くは以上諸國の士であり學生に至りても最も多數を東京に出し居りたるは矢張り以上の諸國であつた。然るに我縣出身の學生は既に前にも述べたる如く實に寥々たるものにて當時余等同鄕諸友と相會する每に之を痛嘆したのであつた。

然るに以來五十年其間年を逐うて我縣出身の學生は增加するに至り殊に大正年間は其頂上に達し一時は一大學に數百人東京全部にて各種之を合すれば三千人にも達したるやに聞く五十年前を回顧し轉た今昔の感に堪へざるものあり。而して本會は其間多少の盛衰こそあれ未だ曾て絕えたることなく連綿として今日に至り而も猶ほ漸次盛況に向ひつゝある。此の一事は本會の爲め特筆すべき事にして又同時に之に依て自ら本會獨特の性能眞價をも表象せるものと謂ふ可きである。而して一方學生の漸次增加すると共に他方我縣人にして社會の各方面に進出し國家社會の爲め大に貢獻されつゝある人物人才の輩出も亦顯著にして之を往時に比すれば全く其面目を一新したりと謂ふ可きである。是れ縣人として甚だ喜ぶ可きことである。然かも又退いて考ふるに明治維新前後より今日に至る迄の間に於て我國をして驚く可き長足の進步を成さしめたる大業に參與して特に大に力ありたる功勞者の數に至ては遺憾ながら他に對し猶ほ未だ大に遜色なしと謂ふを得ず。此點は縣人として一大恨事である。去りながら過去は追ふ可らず。それ能く將來に於て此の恨事を一掃するは一に現在及び將來の青年諸君の力に待たざる可らず。而して余は特に諸君に向て之を熱望する所以のものは、只此の恨事を一掃せんが爲めのみでは無く時々刻々移り行く世界の大勢は近時長足の速度を以て世界統一の運命に向ひつゝあるを以て我國の前途は益々多事多難なる可く之に處して他日臍を噬むの悔を遺すこと無からしめんが爲めには我國民は一大覺悟と一大準備とを要すべく此大業に當るべき人物人材は幾人ありても足らぬからである。本問題の如きは此紙上を借りて敢て論議せんと欲するには非ざれども我國の前途は前述の事由もあり頗る多事多端なるべきを以て我が有爲なる青年諸君の將來成すべく成さゞる可らざる事業は頗る多かるべし。諸君は須らく世界

將來の大局に着眼し目前の小事に齷齪することなく一意奮勵學ぶ可きを學び修むべきを修め究むべきを究め以て他日祖國の爲め大に盡す所あらん事を熱望して止まざるものである。

（飛行協會理事）

所感

坂田愉三郎

東奔西走旅行續きで、殆ど閑がなくつい〳〵其まゝにして居たら、陶浪君の熱心なお談しで後ればせながら一筆責ふさぎにでも書かねばならぬ事になつた。

實は私は此の青年會の方には出席率から云ふと甚だ不成績の一人で、數へる程しか出た事がなかつた。今度五十周年の祝賀會があると云ふので大橋信吉君と私とが委員の内に加へられ、食事係を仰せ付かつたが、此の大橋君が又私以上の出席不成績者で何だか今迄の罪滅しに御用を申付けられた樣な感がして、くすぐつたかつた。多分大橋君も同感だつたと思ふ。

右樣の次第で本會に對しての深い感想も持たないが今回の祝賀會に出席して、犬養先生や阪谷、窪田諸先生のお話しを聞いて見ると、發會當時と今日との變り方もわかり、なる程五十年も續いて來たと云ふ事は、かゝる會としては如何にも珍しい貴い歴史であると思つた。

かういふ會も客觀的の立場から見て居たら各會員個々の變遷推移も極く冷靜に見る事が出來ようが、自分が會員となつて出席して見ると、さうはゆかない、いつも自分を中心にして上下を見る樣になるので自然自分より先輩の方々はいつ迄たつても先輩としての敬虔の情に變りもなく自分との間隔にも變りを自覺しにくい。處が自分より後輩の人を見ると實に其變化が早く、いが栗頭が分髪になる、金釦が背廣になる鼻下には八の字が生える、話をして見ると年々内容が充實して、中中名論も出るといふ具合で逢ふ度毎に自分の追附かるゝ事をつく〴〵感ぜずには居られない。然も其追附かるゝ事が少しも不愉快でなく、自分迄が潑剌たる生氣を注入せらるゝ樣な氣がする。それにかういふ御連中と話をして居ると自分の腕白時代の事ども次から次に思ひ出されて尙更若々しい氣がして來る。確かに之れは吾々にとつて大切な若返法だと思ふ。

陶浪君の話しによれば水谷武君が岡山中學時代の思出話しを書いて呉れたとかいつて居たから、嘸ぞ吾々の惡戯盛りの事ども數々書かれて居る事と思ふ。何んといつても學校時代の思出でとして地方の中學時代位面白いものはない。東京だの大阪だのといふ樣な大都會の學校ではあの味は出て來ない。

色々の點から見ても地方に鄕土を有つて居るものには生れながらの都會人士よりも興味が多い。まして吾々の樣に中國の沃野に鄕土をもつ者は一層幸福である。此の同鄕の人々、老いも若きも一堂に集まつて會合すると云ふこんな樂しい事はまたと無い筈である。

私はいつも此の種の會合に出る時は、若い人からは生々とした活氣を吸收し、同窓連中とは懷舊談で大に笑ひ、先輩諸氏に對しては幾分でも若い吾々の氣分を味つて頂かうといふ樣な考へで出席するのである。

どうか古い歴史を以て今日の樣に隆盛になつた本會の如きは何日迄も同鄕人士の爲めに樂しい會合として有意義に存續して貰ふ事を希うてやまない次第である。

（大日本人造肥料取締役）

○

河村董

晩秋の寒天に百數十尺の煙突の頂上に凍傷を忍び飢渴に耐へ百三十時間餘を頑張り通した怪青年の行爲は非難すべき點多々可有之も主義のために捧げんとする鬪志と哨風霜雨を凌ぎたる體力とは驚嘆すべきものにして、流石に元氣なる青年ならでは出來ぬ仕業と存じ、尤も此の如き突飛なる如何はしき仕業は爲さなくても爲せば爲し得る青年は幾らでも可有之と信じ居候。何卒夫等强靱なる體軀に宿れるハチキレンばかりのエネルギーを巧みに拘制蓄散し邦家のために、自己のために正當に十分に發揮せらるゝ樣祈りて已まざる次第に御座候。

（陸軍中佐陸軍省兵務課長）

富士薊

次田潤

昭和五年秋の半ば富士の裾野に遊びてよめる歌七首

秋晴れの富士のすそ野の松原にむらさきにほふ富士あざみの花

名も知らぬ小草花咲くしば原をさまよひありくめくら蜘蛛あはれ

日はななめ裾野になびく穂すすきのしろく光りて富士おろし吹く

十九夜の月すみのぼるおほ空にほのぼの見ゆる富士の白雪

ありあけの月しらじらと明けゆけば朝日照りはゆる富士のねの雪

村雲をはらひのけたる富士の嶺に朝日照り添ふのどけきあした

紙ひとひら裾野の風に舞ひあがりやがて雲間に消えにけるかも

（學習院教授）

所感

小川鄉太郎

岡山縣青年會は創立五十周年祝賀式を擧げた。まことに芽出度いことだ。

「人生五十古來稀」といふ筆法から云ふと、人の生れてから死する迄の道を辿つたともいへる。嘸々色々の曲折があつたらうと察せられる。創立當時の人今尙健在の方もあらんが、少くとも七十歳以上の老齢に達せられてゐよう。それ等の人より五十年の歴史が聽きたいものである。私が初めて此會に入れて貰ひ、會合に出席したのは、三十餘年前のことだが、その時席に今の阪谷男や故人となられた花房さん（元の統計局長）が居られた。田舍より東京に出た許りの白面書生が、天下知名の方に近づき得たことを何より喜んだ當時の印象が今に殘つてゐる。今筆を執つてゐる間に其當時を想ひ起し感慨無量である。

岡山縣青年會五十年の間に擧げた事績は頗る多からう。其中に就き私は備前備中美作の三國を打つて一丸としそれを故鄉とし、其何れよりの出身者にも同じ故鄉に生れたと云ふ感じを持たしむるに至つたことが最も顯著なる功績であらうと思ふ。備前や作州は從前大藩であつたから、それだけでまとまつた故鄉觀があつたらうが、備中に至つては從來諸藩分立であつたから全く選を異にして居た。私は備中の生れであるので、餘計にさう云ふ淋しい感を持つてゐたものである。岡山縣青年會で三國を包んだ故鄉觀が養はれ、そこに何とも云へぬ「大キイ力强イ家」に生れたやうな自覺が出來た。それが私の一生にも少からぬインフルエンスを與へたことを自白せざるを得ない。

岡山縣青年會は五十の齡を重ねたが、人と異り死期は無い。人は變れど會は永へに續くであらう。

其の益々發展して行くことを切望して已まぬ次第である。

（大藏政務次官）

會に對する感想

岡正一

今年の春頃、鄉友正宗直三郎君から、岡山縣青年會に出席するやう御勸誘を受けたのでありますが、私は本年六十七歳の老齢でありまして、青年會などに出席する資格はないのでありますから、一應辭退致しましたけれども、正宗君の懇切

なる御勸誘に絆されて、其の春季例會と稱する日比谷松本樓の會合に出席致したのであります（本年十月の五十周年記念祝賀會には病中で遺憾ながら缺席致しました）偖出席致して見ますと當日の來會者には、白髮童顏の長老あり、俊材高德の紳士あり青春燃ゆるが如きの希望に充ちたる學生あり、和氣藹々の裡に各自の抱懷する所を吐露して、全く少長の別を忘れ境遇の如何を問はざるものゝ如く、其間に同縣人と云ふ一脈融和の氣分が溢れて居るのを見まして實に感激の情を禁じ得なかつたのであります。そこで私は、私かに我が岡山縣青年會の意義を考へますに、これは固より眞の青年者は、其の儕勃として會合と云ふのでは無くして、眞の青年者は、其の抑塞し難き鋭氣を發揮して、先輩老成者の動もすれば因循姑息に安んぜんとする惰氣を刺戟し功成り、名遂ぐる先進の士は其の蘊蓄圓熟せる才識を以て、動もすれば奔放矯激に失せんとする青年の鋭氣を調節し、玆に老少合流せる一青年界を現出せんとするのが、我が岡山縣青年會の眞意義ではあるまいか。但私は社界の落伍者でありまして、一木材會社の番頭として餘生を送つて居る者でありますから、斯の如き意義深き會合に參加する資格ある者ではありませねが、今後は同縣人の誼みを以て其の席末を汚すことを容さるれば實に無上の光榮を感ずる次第であります。

（木材乾燥工業支配人）

縣同人の進むべき道

川端審三

青年會將來への使命

岡山縣青年會五拾周年記念會が盛大に行はれた。縣人として此上も無い悦びを感じたものである。此機會に何か記念事業を遺し度いとの計畫もあり、自分も其委員の一人として末席を汚がす樣にと御指圖があつたのであるが、顧れば私は明治四十三、四年の頃かと思ふ、慶應義塾組合の幹事として有松先生の會長時代に出席してお世話をした以後少しも出席する機會が無かつたのである。別にそれには深い理由も何も無い、そして學校卒業後何時の頃よりか會員名簿に自分の名前が載つて居た。誰か私を知つて居られる方が入會手續をして下さつたものと想像して居つた。

と言ふのは慶應義塾には古くから岡山三田會と言ふものがあつて、其方の幹事の仕事が學生の身分としては重荷であつたので、自然縣の青年會迄其當時手が出せなかつたのでは無いかとも考へて見て居る。それは兎も角も犬養先生を初めとして野崎廣太、木村清四郎、坂田實等の諸先輩初め其他の先輩、幾多の同窓同縣人の御指導を得て毎年春秋二季に會を開

いて居つた。そしてお互の聯絡と團結と先輩の御指導とを得て來たのであつた。

由來岡山縣は三國にも亙つて其所屬の藩も相違して居る。岡山、津山、高梁（其他小藩の澤山あつた事は先づ措くとして）と備前、美作、備中と成つて居る地勢の關係上大分ローカル、カラーにも自然に特異の點が無いでも無いが、共通的な所は誰もが、頭腦明晰と言ふ特長がある。又一方には是が却て缺點とも成つて居るのであるが、其結果案外自我が強い、俺がと言ふ事が鼻にぶら下がつて居る。小藩分立、教育隆盛であつた結果だと言ふ先輩も有る樣な次第であるが、要するに維新當時に各々聯絡が無く纏まりが無かつたのは事實らしい。犬養先生が先日記念會當日に仰せられた樣に、阪谷先生のお話にもあつたと記憶するが、發會當時は實に少數の縣人であつた。然るに現在は何ふであらう、備中は實業界に、備前は文藝界に、作州は學術界にと大別して見ると其發展の跡には斯う言ふ傾がある。勿論大數觀察であるから例外のあるのは當り前であるが、其外に縣人共通には政治と言ふものを論ずる趣味を以て其實行にも適して居る。此點では他縣人に優れて居つても劣つては居ない。皆樣の顏觸れを拜見する時には、實に百花燎亂の趣が有る、縣人の誇りが有る、此發達助成には少からず此青年會が寄與したものと確信して居る。其結果動ともすると俺の主義が出て同縣人團結と言ふ事を無視されては成らない。百尺竿頭一歩を進めて、此青年會は同縣人團結的行動と聯絡的精神との實際の訓練をする道場とすべきものである。十本の矢を束ねて折る事の困難な平凡な事實を誰も能く知つて居つて、實行しないのが實狀である。此人間性としての弱味、縣人としての傾向を、撓めて行くには先輩後輩を一堂に集めて常時是等聯繫の楔となるべき道場と成り得る同縣人の倶樂部が尤も必要な設備だと考へて居る。

誰も反對しないで必ず贊成する事である。青年會が五拾年記念事業の大目的を此處に持つたのであるが、時期尙早と言ふ譯か、それとも現在の不景氣が然う導いたのか、兎に角研究して徐に實現を期する事に成つた。併し私は其建設物迄新築しないでも宜敷い、差當り借家でも宜敷いから、同縣人倶樂部の常設的集會場設置の實現を期待し度いのである。

現在の岡山縣人諸氏の力で出來ない事は無いと斷言する。一致して進めば新築迄を多少の時を要するのは止むを得ない勿論大に考究した上で實現さるべきものであるかも知れぬが、集會所の設置は何でもないと考へるのである。是等の目的實現の爲めに倶樂部設置計畫委員でも置いて直に其實現を企圖すべきである。

斯くして吾等の團結的精神の訓練が何を醱酵するかは今更申上ぐる必要は無い、藉すに二十年を以てすれば更に〳〵偉大なる岡山縣の舞臺が轉回されるのは分り切つて居るのであ

る、而して縣人の向上と發展とが縣と言ふ限界を超えて國家、民族の爲めに寄與し得る事の重大性に特に考へを持つべきである。他の縣には早くから斯かる計畫は實現して居るのである。既に遲いのである。出來る丈け早く實現する事を熱望して止ま無い。委員として何か書けとの仰せもあり、其所感と希望とを申上げた次第である。（五、一一、二四）

（樺太工業會社參事）

犬養と宇垣

——縣出身の先輩（一）——

木村毅

岡山縣出身者の中今の所首相の印綬を帶びる可能性がありさうなのは犬養毅と宇垣一成である。私はその兩者に少し宛の間接な繫がりをもつ。

私は名を犬養と同じうする。これは犬養崇拜の父が同じ名を私に食つ付けたのださうで、私は今それがために少なからぬ嫌氣を自分の名に感じてゐる。改名しようかと思つてゐる位だ。

宇垣が、朝鮮の代理總督をしてゐる時、私の兄木村靜雄は元山で府尹をしてゐた。元山の府尹官舍は、朝鮮の府尹官舍中最も景色がいゝ。宇垣はそれが氣に入つて數回巡察に來たさうだが、何でも或る時公園に美しく咲き盛つてゐたダリヤの花に眼を留め、それを所望して剪つて京城の總督府官舍に持つて歸つた事もあるさうだ。

その兄は前年自働車の奇禍で落命した。宇垣は任充ちてもう東京に歸つてゐたが、すぐ兄の許へ弔電を寄越した。又夫人からは兄の未亡人へ細々とした見舞狀が屆いた。あゝ云ふ下級の役員の事まで忘れずにゐてくれた宇垣夫妻の懇情に遺族が感謝してゐたのは無論である。

その翌年第一次の普選があつて、その前後ではなかつたかと思ふが、宇垣に農民黨を作らんとする下心があると新聞に見えた。そして岡山縣出身の文筆業者と會見した事がある。多分美土路先輩などの肝煎りであつた。

私の所へも招待狀が來た。私などが人選に入つたのは亡兄との繫がりの爲であつたか、それともその前學生時代に美土路先輩のお宅を訪ねたりした事があつたので、その方からかこれは未だに疑問としてゐる。だが、當時日勞黨の中央委員だつた私は、色々な誤解を恐れて出席しなかつた。

この縣出身の兩大先輩が一は老來益々壯健で政戰の馳驅に暇なく、一は長かつた病漸く癒えて再び臺閣に活躍するのは、兎に角鄕黨の先輩と云ふ點からは慶賀すべきことである。次には片山潛氏について語るであらう。

（著述業）

郷土についての感想

米川正夫

わたしは自分の郷土に對して、二つの矛盾した氣持ちを常に感じてゐる。一つは人として當然もつべき心持ち――己れの生まれ育つて來た環境、知らず識らずの間に美しい淸純な情操を養つてくれた、山水草木に對する根深い愛と思慕の念であるが、いま一つは暗い反感であり嫌惡である。第一の感情は人間自然のものであるから、別に說明を要しないけれど、第二のものは特殊な生活事情によるものなので、一言釋明しなければならぬと思ふ。わたしの幼年少年時代は極めて淋しい孤獨なものであつた。父の偏屈な非常識的性格と、その他の家庭內におけるさま〴〵な事情のために、わたしの家そのものが妙に孤立した、他と交涉のないやうな生活をしてゐたのである。幼年時代のわたしは家の中では父の狂暴な憤怒の發作に壓倒され　外へ出ると町の人々の冷笑的白眼と、子供たちの罵詈嘲弄に戰々兢々としてゐなければならなかつた。かういふ譯で、小さな城下町のどこを歩いても、いつも敵國にゐるやうな氣持ちがして、まるで自分が何か知らぬ間に惡い事でもして、そのために罰を受けなければならぬ、さういつた風の味氣ない感じが、始終わたしを附き纏つて離れなかつた。かういふ事情のためにわたしが今のやうに非社交的な、臆病な意久地なしになつて了つたのか、それとも生來臆病な意久地なしであるがために、世間の人々のわれ〳〵一家に對する輕蔑と冷笑とを、一そう誇張して考へるやうになつたのか、それはわたし自身にも分からない。が、恐らくその兩方であつたに違ひない。しかし、かういふ事は言へると思ふ――もしわたし達の家があの小さな狹くるしい田舍町でなくて、東京とか大阪とかいふ大都會であつたら、わたしの幼年時代の生活はもつとのんびりして、あゝまでみじめに萎縮しきつたものにはならなかつたに相違ない。人間がお互同志に無關心な都會では、世間といふものゝ重壓かあれほど病的に働きかけはしなかつたに違ひない。

もつとも中學時代になると、生徒が單に町の子供たちばかりでなく、隣接地方を抱擁してゐるので、幾らか世界が廣くなつたやうな氣がしたけれど、萎縮し歪曲せられきつてゐたわたしの性質と、依然として變はりのない家庭の狀況は、ここでも若々しさ朗かさを幾分なりとも回復してはくれなかつた。で、やつと中學を卒業して東京へ出る事になつた時には、全く牢獄の中から放たれたやうな心持ちがあつた。そして自分に長年あれほど苦しみを與へた故郷の町を、もう永久に見ることが出來ないやうになつても、一向に哀惜も憂愁も感じなかつたらうと思はれるほどであつた。わたしは元來臆病で

意久地なしで、世間といふものを恐れてゐた癖に、その反面妙に誇りの高いところがあつて、他人に對して一種の優越感を抱いてゐた。これは十二三の頃から文學に耽り出した影響なので、文學者は世間の滔々たる俗人に比べて、何か非常に高尙な偉いものであるといつたやうな、笑ふべき粗笨な概念がいつの間にか頭に滲み込んだものらしい。その頃わたしはある投書雜誌に、「國の連中の粗野な卑俗な岡山辯を聞くと、音樂的に諧和した自分の氣分を亂されて不快だ」などと、今から思ふと恥づかしくて穴にでも入りたいやうな、齒の浮くやうな獨りよがりを書いたものである。しかし、その當時としてはこれもある程度の眞實みを持つてゐたので、その後もかなり長い間、わたしは汽車が岡山縣內へ入つて、車內に岡山言葉が聲高にあちこちで話されるのを聞くやうになると、すぐ高粱に於ける特定の町とそこに住む特定の人々を連想して、急に周圍が狹くるしくなつたやうな、一種特別な不快さを經驗したものである。

自然にしても、町の人々はすぐに山紫水明の地といふけれど、當時國木田獨步の『武藏野』などに心醉してゐたわたしには、摺り鉢の底のやうな狹くるしい山間の盆地に、何の面白みも感じることが出來なかつた。たゞ時々歸省する時、車ががら〳〵橋まで來ると、川に面した本町通の裏側が白壁を竝らべて、その上に城山のこんもりした姿が浮いてゐる遠望だけは、非常に詩的なものを持つてゐるけれど、その他には在來の日本畫的見地から見てさへ、特に誇りとするほどのものはないと思つてゐた。

けれど昨年五六年ぶりに歸省して、これといふ用事もなく二三日滯在し、一切の仕事や家事の雜務から解放された安易な氣持ちで、遠い追憶に身を委ねた時、わたしは山の襞や赤い斑點の一つ〳〵にも、淋しい家中町の塀のくづれにも、そこからさし覗く木々の梢にも、町裏の畑の畦道にも、ほのかな幼年少年時代の思ひ出が織り込まれて、わたしをその遠い遠い昔に呼び戻さなければやまないのに、ある悅ばしい驚きを感じた。どんなに呪つても悔蔑しても、故郷はわたしの生活の一部分を取り殘した土地なのである。それはわたし自身なのだ。故郷の土に骨を埋めようとか、老年を故山に養はうとか、さういふセンチメンタリズムは今のわたしにはないけれど、故郷をわたしの生活、わたしといふ人間の出發點として、靜かに和やかな愛情を內心ふかく劬り守るやうな、さういふ年齡にわたしは達したのである。

偶吟

昨夏故郷高粱を訪ふ

ふる里に旅人として我くれば水の音さへ淋しかりけり

初戀ひの思ひ出もなき里なれど歸ればそゞろ躍るわが胸
山よ我が若かりし日の悲しみを汝は今日まで祕めてありしか

本年八月長男常男を失ふ

哀しみて破るゝなかれかく思ひ忘れんとする淋しきこゝろ
忘れんと願へど日ごと面影の薄るを覺え心おのゝく
かくしつゝやがてはつひに涙なく亡き子を思ふ日や來るらん

露西亞の歌

小夜ふけて鋪道に響く辻馬車の蹄の音にしくものぞなき
（莫斯科）

高原に羊むれゐて默々と草はみ居れば秋の風ふく（高架索）

（陸軍大學教授）

世相雜感

千輪　浩

單なる變化、從つて强烈なる刺戟、多樣雜多なそれ等の單なる渾沌たる集團、集團の個々別々な部分的變化の繼起こそ、現代社會の特異的狀態である。焦噪と不安と動搖とに閉ざされ、煩勞と享樂と自棄の情態が溢れ、巧智と欺瞞と、詐僞の橫行を、現代世相の特性とすることは、不幸ながら、當然生ずべき結果と認められるであらう。意氣と努力と純眞性とに輝くべき人々も、現代社會狀態によつて、其情態に、行動に、此世相の刻印を受けて居る、但し、假令、斯かる世相の種々相が、過去の時代に、これほど著るしいことは、なかつたにしても、これから、直ちに、現代人と過去人との評價を云爲することは出來ない。過去の人々が、「自分等の……時代には……」の言によつて、間接に現代人の評價を示唆することは、時代の進步を見ないが爲めである。けれども、現代人も亦此世相、傾向を時代の進步の必然的結果として、これによつて、自分の行動の是認を强ひんとするならば、これも亦、眞に時代の進步を認めたものでないと云はねばならぬ。現代人も其批判者も此點に注意せねばならぬ。

我々が認める、總ゆる形狀、姿態は、常に、同時にある他

の事物や人、背景、卽ち周圍、環境によつて、特性附けられて居る。其程度は、事物や周圍の性質如何んによつて、種々になるが、嚴密に云へば、特殊の人、情態の場合を除くと、殆んど常に、此點が認められる。それが爲めに、同じ人、事物が、存する周圍狀態境遇の如何んによつて、自然に認められる特性が、多少變つて來る、或時に目立つた人も、他の時には目立たなくなる。背景によつて、色も、形も、多少氣付き方が違つて來る。飾窓中のネクタイも、買つて歸るとそれほどにないことがある。

これと同樣に、我々文化人の社會生活上に於ける行動、動作の外的樣相は、時々の周圍の狀態、事態によつて多少の變化を生ずる。それが善かれ、惡かれ、事實、或程度迄變つて來る。其變化が精神未發達に基くか、個性に基くか、故意の手段としてかくなるかは、一樣に云ふことは出來ない。その變化の因つて生ずる精神的條件によつて、此樣相變化に、素朴や稚氣や純眞性、竝びに巧智、欺瞞や亂暴が認められる。

世相も亦、時々の社會狀態、文化によつて、特性づけられた特異の種々相を呈する。此意味で現代人の傾向、世相は、現代の社會、環境狀態を離れて、獨立に、其眞相を把むことは出來ない。現代人の行動の樣相は、決して過去の社會狀態に於て、現代人が示したものでないことは、過去人の行動樣相が、現代社會狀態に於て過去人が示したものでないと同樣である。然るに往々にして、現代人、過去人が、其各時代の周圍と獨立に、其行動樣相、世相から、直接に、價値判斷せられる場合がある。云はゞ、上述の自明の事實を忘れ、時代の進步發展が考慮せられないが爲めである。これを思ふ時、過去人の世相、行動樣相を一も二もなく、現代人に模倣させ、强るんとすることは、誤つて居る。或意味では現代人を過去人に逆轉せしめる恐れがあるとも認められよう。

併し、上述の如く見るとしても、現代人の行動樣相、傾向は、時代の進步が來たした必然的結果として、總てを是認せんとするのではない。現代の世相は、現代の表面的狀態にのみ捉はれて、云はば、單なる時代の變化狀態に捉はれ、眞の時代の進步に基いた純眞の世相ではないからである。

周圍環境の變化のまゝに、變つた樣相を示すとき、動物や子供に於ける如く、無邪氣と可憐、稚氣とが認められ、素朴的純眞性が現はれる、我々は未開と未發達情態に於て、此樣相に接することが出來る。それと共に、周圍環境を無視した行動に、野蠻と無謀と低劣とが表現する。これも動物や未開人や子供が、他面に於て示す樣相である。何れにしても、之等の場合には、環境の變化も進步も、意識せられないで、それを手段として用ひないで、自然に斯かる行動樣相が表現するが爲めに、我々は斯かる樣相に接して、直ちに無邪氣や可憐さの素朴的純眞性を直觀するのである。行動樣相の變化も、

周圍環境の變化も、何等意識的手段として利用されないし、事實、手段となつて居ないからである。

然るに、現代人の行動樣相、世相も、目狂はしい、雜多な、秩序なき、單なる變化に、追從して居る、又はせんとして居る。そこに、平靜のない焦躁、不安と享樂、自棄の情態が生ずる反面に、回避や卑屈の情態に陷る所以がある。動物や子供、未開人でない文化人、殊に明敏な我が現代人は、社會狀態、周圍の變化を意識しながら、恰も變化のまゝに動いて居るかの如き情態を示して居る。外貌的、表面的には、一種の可憐さと素朴性があり、從つて、同情すべきであるかの如く思へる。けれども、眞に變化のまゝに動く人は、自己の行動や周圍の變化を意識しない、意識してこれを利用する所には、無邪氣と純眞性とは、影をひそめて、巧智と狡猾と欺瞞とが現はれて來る。販賣の手段に利用し、政策に利用せんとする商策家と政策家の巧智、狡猾と欺瞞が認められる所以である。現代人の巧智、小悧巧、陰險、皮層性、浮薄性は、明々なるが爲めに生じた樣相に外ならない。動的な持續的進展、運動そのものは、其事物の、時々の、變化の奥に、ひそんで居る。從つて、表面的變化に目を奪はれる者ほど、眞の運動、進展は、直接認められない。皮層的外觀の樣相の變化著るしいほど、眞の進歩、運動のない、變化の單なる、速かな繼起のみが氣付き、變化相互間の關係把捉から生ずる、纏つた動的形態、秩序、統一、眞の進歩、一つゞきの運動は、認められなくなる。故に、變化のみに眩惑され、又は、それに追從することは、又はそれを利用せんとすることは、進歩せる時代の眞相に隨ひ、それに應じて居るのではない。過去と違つた社會狀態を認め、それに從はんとして居るのである。斯かる行動によつて、現代人の行動や自己の行動が、過去と違つて居るのみならず、進歩して居る現代に、應づるものとして、是認し、是認を强ゐんとするものあらば、時代の進歩を認め得ない人であると、云はねばならぬ。

複雜な多樣の刺戟、事態は幼稚なる者に於ける程、多くの刺戟、事象の單なる並列、繼起の無秩序的集團として認められるのである。又一定の目指す所ない情態に於て、斯かる複雜な狀態、事態に對する程、漠然たる、渾沌たる事物の羅列をより多く經驗する。確かに現代世相も亦斯かる情態の反映である。

將來のない、指導的地位に立つことのない人々が、其時々の表面相に應じ、それを利用せんとすることは、暫く看過しても、意氣と努力と純眞性とを以て、將來の社會を指導せねばならない人々が、其明敏さを、巧智と狡猾と欺瞞とに變相せしめ、其溢ふるゝ力を、卑屈と自棄と無暴とに、消化せしめんとすることは看過することは出來ない。可憐や無邪氣や同情は、自ら求むべきではなく、又意氣に富む人々が、假令

それを求め得ても、それで滿足すべきではない。素朴的純眞はよいとしても、明敏にして、それが求め得られないとすれば、寧ろ意氣ある純眞、を示さねばならぬ。

學校時代から、既に、實地經驗なき、社會的訓練なき商策家、政策家たらしめんと、多くの人々が希ひ、又かくならざるを得ない現代青年に同情し、現代社會狀態を悲しまざるを得ない。社會人を擧げて、指導的政治家や、學者さへも、斯かる商策家、政策家たらんとする現代に於て、斯かる結果を生づることに不思議はない。經驗を積み得ない、在學中の人々に、無暗に、役立つことのみを强ゐんとし、劣つた、未發達、無經驗の商策家、政策家たらしめんとすることは、學校と社會とを混同し、青年と成人とを混同し、其意氣ある純眞性を奪ひ、低劣と卑屈と巧智と欺瞞とを結果せしめるものである。現代社會が斯くせざるを得ない狀態であることは認めても、青年は成人ではないこと、現代は過去ではないことを認めて、將來ある人として理解せんことを望むと共に、現代人が其明敏の輝きによつて、時代の變化に眩惑されないで、一層社會進歩の實相を直視、それを目指して、意氣ある純眞性を特性とする、自己の特性を認識し、それによる體驗を得んことを望む次第である。

(東大文學部助教授)

岡山縣青年會創立五十年に際して

平沼淑郎

今より五十年前故子爵花房義質君の邸に同縣人中の有志者が會合して本會を創立したことは會員周知のことである。小生はこの時まだ十七歳の青年であつて學窓の間に日を消しつつあつた。故に時々集會の席末に列つて先輩諸君の高風に接しその座談を聽くぐらゐのことに止つて、何等會務に與ることはなかつた。明治十七年今の東京帝大の前身東京大學を卒業して新聞記者となつたときから、聊か自分の說も吐き、先輩諸老と膝を交へて、遠慮會釋なく談じ相話する機會を捉へ得ることになつた。

その頃のことであつた。犬養木堂翁——當時はまだ翁ではなかつた——の不平談を聞かされたことを記臆してゐる。その事を述ぶるには當時の實狀を略說して置く必要がある。近來は會社の重役であらうが、學校の先生であらうが、新聞記者であらうが、辯護士であらうが、藝術家であらうが、職業の何たるを問はず、苟も先覺者の地位を占め得てゐるものは衆生敬仰の標的となつてゐるけれども、その時代には官尊民卑の風がまだ盛んに行はれてゐて、且事實上先覺者を以て任

じてゐたものは大抵皆官吏であつたのである。そこで會合のあるたびに彼れ等がいつも上席に座するといふ不文の慣例を生じてゐた。今日から見れば不道理至極のことのやうに思はれるけれども、時勢の實際が然らしめたのであつて、已むを得ないことであつたのであらう。さればこそ木堂翁の發憤談が出たのである。それは、岡山縣青年會に出席するのは強ち不快とするのではないが、いつも局長だとか書記官だとか木ッ葉官吏が上座から我々を睥睨するのが甚だ癪に觸はるとかういふのであつた。洒々落々そんなことにはあまり頓着しない小生も新聞記者の身であつたので、また左袒せざるを得なかつたのである。さうしてこれがために席上翁と相識るの機會を捉し得たのであつた。紙上に載せた拙文が甚だ謫劣讀むに堪へざるものであつたに拘らず、口の惡い翁に賞められたこともあつた。蓋し後進奬勵の厚い心持から出でたのであらう。

小生の新聞は滔々たる歐化主義の奔潮に對抗して國粹を發揚することを目的として、ゐたために賣れ口もだん〳〵減つて、遂に明治十九年に廢刊の已むなきに至つた。それから小生は青年の教育に身を寄することに決心し、岡山宮城の兩縣と大阪とに轉々し、青年會の地方會員となつたために會合に出席することもなく、たゞ風の便りに盛況を耳にしたのみであつて、從つて會務がどうなつてゐるのか頓と存じなかつた。明治三十六年に東京に轉任しその翌年早稲田大學に就職することになつてから、圖らずも青年會の委員に擧げられ、森本邦治郎君が委員長であらせられた時代に日比谷の松本樓で委員會に列した。もと〳〵創立の際から興味を感じ必要を知つてゐた本會のことであるからして、當時病餘の身であつたに拘らず、勉強して會合に出席した。然るに、意外にも青木鐵太郎氏の後を襲いで委員長の職を汚すことになつて、その始め本會創立の元勳花房子爵が薨去せられ、小生が本會を代表して棺前に弔詞を捧ぐることゝなつたのは、坐ろに創立の當時を追憶せしめ、小生に取つては實に感慨無量の一幕であつた。

爾來十有二年委員長の椅子を占めてゐたが、その間重患に罹つて會務に鞅掌することを得なかつた場合もある。また逐年教職が繁劇になつて、一意專心會務を見ることが不可能となつた。しかし故河村彌三郎君を始めとして委員幹事諸君が熱誠を以て小生を輔助せられたので、どうかかうか職責を盡すことを得たのは、今日に於いても心竊かに感謝してゐるところである。想ふに會務の振否は委員幹事諸君の熱誠如何に由ることが頗る多い。況んや小生の如き無能此上もなきものが委員長の職に居つて、しかも長年月の間その無能を繰返しつゝあつた際に、本會がともかく二三事業を遂行し得たのは全く委員幹事諸君盡力の賜と謂はなければならぬ。これを感

謝せずして將何をか感謝しよう。

小生委員長を罷めて、子爵花房太郎君がその後任に就かれた。五十年前父君が首唱者の主人公となつて創立されたる本會がまたこゝにその令息を戴いて會運の隆盛を圖るといふことになつたのは、また奇しき因緣とや申すべけん。同君はなほ春秋に富み、鋭意熱心事に當られてゐる。小生の如き無能多病の老軀とは全然選を異にしてゐる。これに加ふるにまた鋭意熱心なる委員幹事諸君を以てしてゐる。前途頗る多望であると謂つてよろしからう。殊に名譽會員の制を廢せられたる英斷の如きは、創立當時の時勢から馴致したる一種の舊套を脱却せられたものであつて、木堂翁また微笑して、當年の鬱懷を消散したと言はれるかどうか。聊か所感の一端を述べて五十年記念會報の餘白を塞ぐ。

（法學博士早大教授）

ダヴァオの話

有松昇

ヤップ、パラオ等の委任統治區域を見て、フィリピンのダヴァオに入港したのは、丁度本年の八月中旬であつた。摺れ違ふ澤山の漁舟は、マニラに於て見たのと同じく、どれもが私の乘つて居る船の日の丸の旗を見て、盛にハンケチを振つて居る。よく見ると其等の漁舟には、皆日本文字で船名が刻まれて居る。皆日本人なのである。私は去年上海から支那海の附近を航海した時、支那のジャンクが遠く數百浬の波路を越えて出稼ぎに出て居るのを見、又今年になつてからも、バタビヤ、シンガポールなど遠方に行つた時も、到る處支那人の發展振を見て、全く羨望に堪へなかつたのであるが、今遠く南洋の一隅に來て、思ひ懸けなくも此の日本人の發展振を見て、非常に驚き且愉快に感じたのである。更にダヴァオの港に入つて見ると、そこに碇泊して居る船は五隻、而もそれが皆日章旗をかざして居るのを見た時、何と云ふ悦びの瞳を見張つたことであらう。誰しも外國に旅して經驗のある人は、斯かる場合に斯かる悦を味ふことを思ひ浮べることが出來るのであるが、こんな偏僻な地方で斯くも盛大な邦人の發展振を見るに及んでは全く一種の誇をさへ感ぜずには居られまい。

ダヴァオ州に於ては人口十五萬人の中、勿驚十二萬人は日本人が之を占めて居るのである。試に一度自動車に乘つてダヴァオの原を馳驅すれば、見渡す限り打續く麻山は、何れも皆日本人の開拓したものであることを知るであらう。日本人小學校は毎年增加し行く子弟を收容する爲、增築に增築を重ね、將來愈々發展の機運に向ひつゝある。

最近アメリカ政府に於ては、此の趨勢に神經を惱まし、第

二のカリフォルニアとして漸く日本人排斥の運動を起さむと企てつゝあるやに聞く。併し茲に面白いことには、如何に政府があせつても、土地のフィリピン人自體が中々承知しないと云ふことである。それは麻山の栽培並麻山の開拓には非常な精根を要し、此の難事業は日本人でなければ、到底やつて行けない。若し日本人を排斥するならば、麻山は全然衰滅し、切角開けかけた此の地方が忽ち又もとの寂寥に歸つて了ふ。即ち日本人を排斥することはフィリピンの自殺であると解し、極力排斥運動に反對を示しつゝあるのである。私は實に此の話を近頃の痛快事として聞いたのであつた。

ダヴァオに於ける日本人は、殆ど皆沖繩縣人である。私はダヴァオから更に尙セレベス島や其の他南洋諸地方を視察して來たのであるが、各地に開拓の使命を荷なひつゝ、健氣にも奮鬪しつゝある同胞の大部分が、大抵沖繩縣人であるのに一驚を禁じ得なかつたのである。私は岡山縣人が國内に於ては、各地方各方面に亙り相當發展して居る事實を知つて居る丈けに、何故もつと海外に澤山出て居らぬかを不思議に思つたのである。今や、不景氣と失業との波は、滔々として我々の生活を脅かしつゝあるの時、洋々たる南海の天地に翼をひろげて雄飛せむ同胞の一人も多からむことを我が邦の爲に希はざるを得ない。而して勇敢にして進取的な我が岡山縣の青年諸君にも此の一言を呈することが、敢て無益ではなからうかと思ふ次第である。

鄕感

（衆議院事務官）

平松市藏

岡山縣青年會五十周年記念を迎へ、盛大なる記念會を催され又た會報記念號を發行せらるゝことは、鄕人として欣喜に堪へざる所であります。殊に本會が縣出身青年の指導誘掖の爲め、先輩諸賢の御盡力により繼續五十年を算し、益々發達することは國家社會の爲めにも亦慶賀すべきことであります。元來鄕人の會合は精神的には種々なる意味に於て、殊に道義的に必要なことでありますが若し巧利主義的見地よりすれば、直ちに現實の利益を得るではないとか、又初對面の人達と直ちに親友となつて助け合ふことが能きるでもないとか云ふので、先づ御義理一片のものゝ如く誤解することがないでもないが、之は甚だ誤つた觀方であります。

縣人會と云へば、特に或目的を定めない限り、同縣内に生れ出でたる緣故に因りて親交を厚くし、互に人格の完成を期せんとするもので、其の結合の動機因緣なるものが、吾々の生成化育の本源に於て情誼上道德上の共通性を有する所から、極めて純粹であり、趣味的であり、又平等的である。此の如

き動機因緣の會合なるが爲めに、先輩、後輩の別はあるけれども、差別的階級的氣分を離脫して、白頭の先輩も青年に歸り、紅顏の美少年も氣焰を揚げ、現實の世間的には見ることが出來ない世界が生れ超世間的の極樂氣分になり得るのであります。

此會は自己生成化育の本源を自覺反省すること。權力利害を超越した純眞高尙なる道義の世界に遊ぶことであります。然らば此會は天上の樂園、地下の淨土として先輩後輩混一融合圓一無礙となり益々發達することゝ存じます。

（辯護士）

センス・オブ・ナンセンス

出隆

たまには故鄕に歸る、
そして中國山脈を眺める、
そして成るほどなと思ふ。
そして誰れの句だかを想ひ出す——
「初冬の山々同じ高さかな」だ。
全く同じ高さではない、
たしかに高低（たかひく）がありはする。
それのに、矢張り「同じ高さかな」だ。

たまには故鄕を想ふ。
そして故鄕にゐる人々や
又は故鄕から出て來てゐられる
えらい人々のことを想ふ。
たしかに高低（たかひく）がある——
それのに矢張りあの句は面白い、
「山々同じ高さかな」だ。
どうしてだか知らないけれど——

「どんぐりのせつくらべ」ではない、
どんぐりも居れば西瓜もゐる。
みんなちがつてる、それのに矢張り
山々同じ高さかなんだ。
たれもかれもがみんな
自分と同じ高さをしてるからだらう。
自分よりか低い自分はゐないか、
自分よりか高い自分はゐないか。

馬鹿なこと（ナンセンス）を言ふなと言ふが、
馬鹿がなさすぎるんだらう、
馬鹿がわからなさすぎるんだらう。

それほど利巧がありすぎる。
たまには故郷に歸つて見るが、
地藏さまも地主さまも
みんな利巧な顏をしてゐる。
みんなわかりがよい。

それでだらうか　でなからうか、
みんなの鼻すぢが
目まで通つてゐるので
ナンセンスのセンスが拔けてゐる、
それだから、山々までも
丸々として同じ高さなのか。

（東大文學部助教授）

魚と岡山

加宮貴一

人間には元來殘虐性があるものには違ひないが、最近の僕にはそれが釣魚の形をとつて猛烈に現れて來た。

魚釣り、などと云つて一言に輕蔑する人があるけれども、熱中してみると、中々文章などでは表現し盡せない妙味があるものだ。

去年長女を亡くした時には、周圍の者が、それをまるで僕の釣魚のせいにして了はうとしたが、僕はそんな魚の祟りなどといふものを信じる程神祕家ではない。

何處で何時讀んだか忘れて了つたが、魚には痛感がない、といふ事を、金科玉條のやうに振廻して、釣魚が殘酷でないといふ事の辯明にしてゐるが、その眞僞はとにかく、僕は事實今迄一度も魚を鈎にかけた瞬間、殘酷だと感じた事は決してない。生きてゐる魚の脇腹へ出刄を通すのとは、全く違つた感覺である。

昨夏、岡山の友から、あのなつかしい烏城々下、所謂旭川のお城下の深淵で、盛んにボラが釣れてゐると云ふことを聞いて、僕はどんなに岡山をなつかしく思ふ一方、岡山も變つたものだといふ氣持をつくづくと感じさせられたか知れなかつた。

ボラがゐるといへば、少くとも潮が利いてゐなければならない。中學時代、殆ど夏季は毎日のやうに和船を漕ぎ暮したあのお城下に、滿潮時に河水が逆流して來るといふ事には少しも氣付かなかつた。又、あの邊にゴカイやイトメがわいてゐようとは想像もしなかつた。その事實を、今漸くボラが釣れるといふ話から想像出來た程の自分の迂濶さが可笑しい位だ。

いや、或ひは旭川の傾斜がゆるくなつたのではないか、と

考へられさへもする位である。小學校時代には、深祇小學校裏の柳川の土橋の下には、大鯰が棲んでゐた記憶がある。それが今は何うだらう、柳川の上を電車が馳つてゐるといふ噂である。（悲しい哉、未だ見たことがないのであるが……）

曾ては西川筋でも澤山鯉や鮒がとれたやうに思ふ。今は？夏でも目高もゐない下水同樣の川になつてゐるのではなからうか。

魚の變遷は、卽ち都會の發達の變化を最も雄辯に物語る。花のお江戸時代は、あのお茶の水あたりで盛んにタナゴが釣れたらしい。が、今は？　メタン瓦斯の湧く下水溜である。東京近郊には、次第に魚が影をひそめて、今では二三時間汽車に搖られて行かなければ、いゝ釣りが出來ない狀態だ。

岡山のお城下の深淵には主がゐるといはれてゐた。今でも、僕はそれを信じてゐる。僕の知つてゐる鶴見橋の下では、香魚がヤスで突けた筈だ。今度岡山へ行つたら、旭川で主の大鯉を引かけて——僕は絕えずこんな風の空想を抱いて、歸鄕の機を待つてゐるのだが、旭川よ、何卒、素晴らしい勢力で發達してゆく都市岡山のいろいろな汚水の爲にけがされないでゐてくれ。鯉の主の代りに、目のかすんだボラが釣れたりなどする事を想像すると、僕の心臟は人知れず痛む。

雲泉と平咸

正宗得三郎

（一）

釧雲泉の履歷はよくは分つてゐない。然し雲泉山人墓銘に略傳が傳へられてゐる。それでも雲泉は有名だが、小橋平咸と云つても知る人は實に少ない。その人が岡山縣下にゐたと云ふ事は、同縣の人でも餘り知られてゐない。この平咸は明和元年生れの人で、竹田より十二年も前の人である。

その平咸が雲泉山人に偶然逢つたと云ふ事はその會ひ方が面白いので、嘗つて私は短文を何かに書いた記憶があるが、今一度想像してみよう、それは多く口碑と略傳とを種にした想像である。

（平咸は明和元年岡山縣和氣郡香々登（カゞト）に生れた人で、小橋陶復、名は信咸、姓は平、字貞公、通稱市藏、又姑射山人と號した。父名は信敬、通稱得三郎、香々登西村伊部村の名主を勤む、陶復その職を襲ふ。資性溫雅にして風流を樂み名利に走らず、幼より畫を好む、稀ま西肥の人釧雲泉の來遊せしに逢ひ、山水を學ぶ、墨竹は明の季息齋の筆法に倣ひ頗る雅致あり、又書を

雲溟高青に學ぶ。（中略）伊部の陶器に竹を描きて風趣を添へしは陶復より始まる。風韻雅致を樂みて苟も名利に走らず、蓋天性なり、文化五年伊部小屋谷の山麓に草庵を結び四隣に梅樹を植ゑ風月を弄す。姑射山人と號す。居ること五年一朝風症に罹り、手足不仁なり、畫を廢し家に歸り蓐にあること八年、文政三年十一月二十六日歿す。（享年五十七）（尙左の略傳は岡山市の島村氏より知らせて貰つたものであるので併せて載せる）

（釧雲泉は、西肥島原で生れた。今日溫泉岳と稱へてゐる山は、昔は雲泉岳とか雲仙岳と云つてゐたのである。この雲泉岳は雲泉の生れた土地の爲めに、雲仙岳を雲泉岳と改めたとも云ひ、又雲仙岳の下で生れたので、雲泉と雅名したとも云つてゐる。嘗つて竹田がこの山を眺めた時、土人は山に雲仙岳あることを知りて人に雲仙あることを知らざるを嘆惜して雲仙山圖を描き上に、畫師雲仙を憶ふと云ふ名文を記してゐる。雲泉は餘程風流の人で又酒を嗜んでゐた。墓銘中。山人嗜酒又好茶、以有潔癖割烹灌漑、必手親爲之、游歷所到筆墨頗料外、心齋酒器具而行、）

○

私の村は瀬戸内海に濱した漁村である。村から二里半程行くと、陶器に有名な伊部と云ふ村がある。伊部から香々登に行く途中に大が池と云ふ相當大きな池が、道と、山の間に碧面を堪へてゐる。私は幼少の頃、兄に携れて、この香々登に毎日曜、會堂に通つてゐたが、この大が池に着くと、やつと來たと思ふ目標にもなり、時に憩ふて、池から、向の森のお宮を眺める事もあつた。

雲泉は九州から長旅を續けてゐたが、三石から片上を經て伊部村に來た。振割荷物を肩にしてぶら〳〵大が池まで來たが、あまり長閑なので、寧ろ疲れを覺えた。見ると池が春日にきら〳〵と輝いてゐる。堤には若草が崩えゐて、蒲公英が咲いてゐる。當もない旅の事で、そこに荷物を下して、草の褥に寢そべつた。さうして陽炎の燃えてゐる池の面を見てゐるうちに遂いうとうとゝして仙境に這入つた。盧生の一夢ではなくて、黃大癡の天池石壁圖が現れた。天と池と石面、大癡は面白い畫面を生み出したものだ。九州から中國、大和に廻つたのも、吉野山を見物するより多武峰の御寺にある。黃大癡の天池石壁圖が見たい爲めであつた。その天池石壁圖が又目前に現れたのだ。あの石壁の折帶皴、俺もあの描法を解得したいものだ。これから岡山城下を通つて吉備の中山を越えると、間もなく、備中の豪溪に出る。あそこは雪舟の生れた處だが、豪溪には生きた太癡の山があると聞いてゐる。石

壁を見る事が出來る。この大が池と豪溪の岩が、天池石壁を造つて來る。雲泉には桃源にでも行つた氣持がしてゐたが、近かの池水が、ザブと音をたてた、仙境が破れた、目を細く開けて、鯉でも跳ねたのだらうと思つて、見ると、村の徒ら小供が自分に石を投げてゐるのであつた。小供達は風采のよくないので、雲泉を乞食だと思つたので遠くから小石を投げたのが飛び越えて池面を破つてゐたのだ。雲泉はしかたのない奴輩だと思つたが小供の事で口論も出來ず、困つたものと思つたが、ふと考へついて、石を投げてはいけないよ、その代り紙を持つて來れば畫を描いてやると云ふと、小供の中に畫好きの小供がゐて、早速藁半紙を持つて來たので、雲泉はわざ〳〵振分けの荷物の中から矢罩を出して、紙に折帶皴の山水を描いてやつた。その小供はそんな分らない山水より武者繪でも描いてくれると思つてゐたので、失望したが、その小供はその畫を持つて小屋谷の平咸の處に行つた。さうして今乞食がこんな畫を描いて呉れたと云つて見せた。慧眼の平咸はそれを見て驚いた。平咸は明の季息齋の筆意を考究して四君子は自信はあつたが、山水はどうも思ふ樣に描けないので、心中苦悶してゐた。この半紙の畫を見て、天の授けに逢つた樣な氣持がした。早速旅繪家を小供の云つた池の邊に訪ねたが、最早そこにはゐなかつた。平咸は殘念の事をしたと思つたが、まだそれ程遠くには行つてゐないと思ひ返して急いで香々登の町の方を追つた。すると、町のかゝりのかけ茶屋で、振分荷物を下して饂飩を食つてゐる旅人があつたを、てつきりそれが旅繪家と思つたので、平咸は禮をたゞして、小供にやつた畫を見て驚いた事から話し出して、懇々たのんで、自分の草庵に來て貰つた。

平咸の家はお寺の下の山連きの處にある。藁葺きを混へた風雅の莊園であつた。山つゞきの梅林の花は殆んど散つてゐたが、竹籔から引いた筧が、その間に音たてゝゐる。平咸が歸ると、家人が出て、旅畫家を早速案内したが、雲泉は、筧の處に行つて、あたりを見廻しつゝ、悠々、筧で足を洗い、口を嗽いだ。

（二）

平咸の家は名主を勤めてゐた爲め、家は相當大きなのであるが、この小屋谷の山麓に梅林があつたので、生來梅花好きの平咸が事更にこの地面を撰で草庵なる畫室を建てたのである。大きくはないが、それでも梅林中に畫堂と、茶室をも出來てゐて後年の平咸の生涯に伴つた趣を呈してゐた。

平咸はこの旅繪家を天使でも下つて來た樣に喜こんだ。日頃憧憬してゐた唐人に逢つた思ひがした。さうして平咸はどうしてこの遠來の客を款待したらよいか、家人を督してもてなした。平咸の妻はすぐと夫の心持は分つたが下女達は、ど

うしてこんなミスボラしい旅繪家を遇すのかさつぱり分らなかつた。

平咸はこの旅繪家が肥後の釧雲泉であつた事を知つて、自分の鑑識目がてつきり當つたので一層愉快で堪らなかつた。

雲泉は又平咸の家に來て見て旅籠と異つた心安さを感じ、久しぶりに鄕里に歸つた樣な氣持になつた。さうして酒肴が出されたが、雲泉は日頃酒をすいてゐたので可なり飲んだ。平咸はほんの二三杯で眞赤になつてゐる。雲泉もやがて陶然として來た。旅の話しから大和の多武峰のお寺で見て來た、大癡の天池石壁の圖の話しを出すと、平咸は首を長くして聽いてゐた。雲泉は猶も荷物の中からその縮寫圖を出して見せた。池面から拔け出した疊重した岩山が空まで積まれてある。天と水、石、自然の深い太古の如き靜かなる天池の樣が一幅に纏めてある圖柄であつた。平咸はつくづく味い深くこの縮寫圖を點見してゐた。平咸はまだ大癡を知らなかつた。それで雲泉は平咸に大癡について談り出した。この大癡とは黃子久の事で、又一峰と號し、董源、巨然の畫風から一變化して一家を成したものでその畫くところの趣は逸邁を以て稱せられてゐる。その描く皴法は筆數が多いが、墨に無駄がなく又つかれてゐない。極彩色のものでも色が重く塗られてゐても筆勢が沒れてゐない、點綴曲折してゐて神韻があり、千變萬化筆に隨つて出沒してゐる。全く神情、散落の處に生活をなし、その筆意に意を經ざる處にむしろ腠理をなしてゐる。さうして古法を全く、自分の意を以てよく消化して自家藥籠中のものとしてゐると、雲泉は酒がまはつて來ると共に大に氣焰を吐いた、平咸はそれをも惚れ〴〵と聞いてゐた。平咸はいくらでもその氣焰を訊き度かつたが雲泉は旅の疲れと、酒のほてりとに睡魔を覺えてそこに橫つた。平咸が起して床に臥さすと共に雲泉は翌朝まで一睡のもとに眠つたが、平咸は興奮して一晩まんじりとも眠れなかつた。

二人が異つた夜を過して起き出たが朝日が座敷までさし込んで軒に雀が囀つてゐる、雲泉は生き〳〵とした目で庭を眺めてゐる。平咸は寧ろ疲れた顏であつた。平咸の頭の中は昨夜初めて耳にした畫の事で一ぱいになつてゐた、平咸は自分の描いた四君子を出して雲泉に見せた、雲泉は特に風竹の畫に感心した、唐人の趣があると思つた。さうして四君子は自分より平咸が上だと思つた、こんな田舍に稀な人だと平咸を見て、しきりに推賞した。

平咸は梅園中の茶室で自分が竹を畫いて燒かせた、伊部燒きの煎茶器などを出して、茶を啜つて、一日又文雅の話しが盡きなかつた。

雲泉は半歲位もこゝに止まつてゐた、そのうち雲泉が、ここに居る事を知つて畫を需めに來る人もあつた。雲泉は圖を作りかけて興が乘ると晝夜の別なく畫く事もあつたがよく中

途で、二三日もよす事が多かつた。そんな時には平咸を携つてよく大瀧山寺に散策し悠々別天地に游んでゐた。大瀧山は二三十丁位の山奧で、寺も相當大きく、瀧が有名だつた。大ヶ池の水の大半はこの瀧の流である。さうして自然と南畫の描法の關係を平咸に談つた。點葉、勾葉たる菊花點、胡椒點大混點、垂藤點、夾葉法なども自然の中にあると、說明した、平咸はそれから自然を見直した。

雲泉がこゝに來たのは春であつたが、何日の間にか秋風が起つて來た。今日も又雲泉は平咸を携ひ出して大瀧山に出懸けた。何日の間にか櫨などが紅葉してゐる。道々話しのついでに雲泉は、近日。伊部を出發し度いと云ひ出した。平咸は實に最少し滯在してゐて貰い度かつたのだ、それで平咸は雲泉に、先生はこれからどちに向つて行かれるのかと訊いた、雲泉は備中の豪溪に行つて、生きた大癡を見るつもりだと云つた。平咸は甞つて豪溪に行つた事はあつたがその時は、ただ奇なる岩山だと思ふ位しか考へがなかつた、今雲泉から聞いて南畫描法がはつと生きて來た。自分も都合で案內していいが、豪溪は紅葉がいゝが一ヶ月程後にしたのがいゝと云つた。

雲泉は豪溪を見たら、こゝに引返さずに、すぐそこから江戸に出て、信州から木曾に這入り越後の知人を訪ふと話した。由來平咸は體が弱くつて旅行も出來ないので、この國內を巡り歩く雲泉の長旅を羨ましくも思つたが又寂しくも感じた。

先達から郡奉行から雲泉と平咸に畫を需めてゐたがどちらも中々履行しないので、奉行から度々使をよこして督促した。二人とも意の適する時でなくば毫を揮はないと云つて延し延しゝてゐたが、奉行自分で來ると云ふので困つてゐた。

或早朝、平咸が起きたが餘り雲泉が起きて來ないので、室をのぞくと、びつくりした、雲泉は夜逃げしたのである。そこにゐなかつた。

平咸はてつきり奉行の畫を催促されるのがいやなので逃げだしたのだ。實に殘念の事をしたと思つて潸然として泣いた。

凍雨日記

額田六福

十二月六日。

凍雨、楓、栗、その他庭前の落葉樹の葉、悉く散らされて仕舞ふ。その中にたゞ一本、櫟の木の枯れ葉丈けが、剛情に枝に獅嚙みついてゐる。春の若芽の出る時までさうでゐるのだ。『醜い姿だ』と我々日本人は考へる。『おゝ、何と云ふ尊い執着！』と外國人なら云ふだらう。

見解の相違だ。

枯れ葉一枚にも渡世の姿がある。
見のがせない事だ。

○

汎岡山と云ふ雜誌が來た。
犬養、宇垣、平沼の三氏を備作三郡の代表として上げてゐる。異存のない處だ。が、今の枯葉だ。犬養、平沼二氏はもう過去の人だ。私が畏敬してゐたのは、平沼さんは檢事總長時代まで、犬養さんは國民黨の黨首時代までだ。殊に大震災の當時、遞信大臣になつて、郵便貯金非常拂出しに、通帳も印もなくなつた者でも、書付一本出せば、十圓宛戻してくれた、あの制度は實によかつた。事は小さいが、どれ丈けあの場合の人心を慰安したか知れぬ。日本銀行の大金庫無事と云ふ喧傳(私は今でも喧傳だと思つてゐる)より、どれ丈け我々の心を積極的になごやかにしてくれたかしらぬ。さすがだ！と何度もくりかへした。犬養さんでなくては出來ぬ事だ。
犬養さんに一度總理をやらせたい——とは、我々縣人の希望らしい。私もさう思ふ。あのムッソリーニの様に權力をあたへて、どし〴〵やらせて見たい。積極でも消極でも何でもいゝ。思ふ存分にやらせて見たい。が、今は一人の犬養さんぢやない。別な聲をしよつてしまつた犬養さんだ。惜しい。
宇垣さんは大きい未知數だ。犬養さんの總理より早く實現するかもしれぬ。たゞ、健康がどうであらう。中耳炎なんか早く治して仕舞ふ事だ。

○

丹那の地震があつた。
それが例のトンネルのためだと云ひふらす者がある。子供のこしらへた砂山ぢやあるまいし、チャンチャラおかしい話だが、眞面目にさう云ふ者もある。と、それに輪をかけて、御殿場と云ふ町の町會議員共が、トンネル貫通中止の運動を初めると云ふ。馬鹿も阿呆もこゝまで來れば愛嬌だが、アハアハ、と笑つてばかりもゐられない。御殿場の人間が云ふんだから——卽ち、丹那が貫通する事によつて、尤も激しく不利益な地位に落されるであらう處の彼等であるからだ。
皇室を食ひものにする奴がある、ストライキを酒色の料にする者がある。果ては地震を食ふ奴が出來た。いかに尖端ばやりでも唾棄すべしだ。同時に、新聞なぞでも、こんな馬鹿げた事は記事にのせぬ事だ。

○

地震の外に近來の名物に煙突男と云ふのがある。已に大阪でもやつてゐるさうだが、私が喜劇に書いて見る。

(一) 煙突の上。
男(戀人の腰卷をかゝへてゐる)あゝ、我が愛するA子よ。こゝなら思ふ存分に樂しめる。(打ちふる)A子！
(二) 煙突の下。

群衆。あゝ、闘士だ。我々の尤も偉大なる闘士だ。赤旗をふつてゐる。
(三) 煙突の下。(別の方)
A子。まあ、いやらしい。私のお腰なんかもち出して——だから好かないんだ。
(四) 煙突の上。
男。(唄ふ)A子可愛や……
(五) 下。
群衆。あゝ唄つてゐる。勞働歌を歌つてゐる。さあ、我我も唄へ。(合唱)しつかりしろ。
(六) 上。
男。腹がへつた。あゝ澤山來た。今更下りるのはきまりがわるいなあ。
(七) 下。
同志。食べものを上げなければならぬ。おいだれか決死隊になれ。
警官。下りる様に說諭してくれたまへ。
下。(別の方)
A子。少し見榮坊、馬鹿。
(八) 上。
上つて來た男。おい。しつかりしてくれ。もうすぐ我々の勝利だ。
男。弱つたなあ。もう下してくれよ。(泣く)
上つて來た男。たのむ。泣くなよ。
(九) 下。
下りて來た男。諸君、彼は我々の神である。彼は死ぬとも斷じて下りぬと云つてるぞ。
下。(別の方)
A子。本當かしら。
下。(別の方)
兄。どうしても下さにやならぬ。
弟。いゝんです。彼の自由意志を尊重しませう。
(一〇) 上。
上つて來た男。さあ、爭議は解決したよ。あの女も君のものだ。
男。さうか、ぢや下りよう。足がふるへるなあ。よく上つたものだ。
上つて來た男。一人で下りなけりやねうちがないぞ。しつかり〳〵。
(一一) 下。
男。(下りて來て)諸君、僕は諸君の後援を感謝します。
群衆。爭議萬歲。
A子。あゝ、私の勇士、愛人！(だきつく)新聞の寫眞班八方から取り卷く、男。むゝ、又上らうや。(幕)
(劇作家)

現代青年と國家觀念

平沼騏一郎

一

東京に於ける岡山縣青年會は、創立以來茲に五十年の星霜を閲し、今や其の記念號を發行するに至つた。青年の團體は決して珍らしくない、各地とも此の種の會は出來てゐるのであるが、本會の如き長き歴史と、麗しき感情と、堅き團結力とを以て、順調に發達して來た團體は稀である。

予が此の青年會に關係したのは日露戰爭の直後で、岡山縣下、即ち備前、備中、美作の三國から出征した將卒の中で、名譽の戰死を遂げた人々の爲に、青年會が主催となつて、追悼會を開催すると云ふ計畫があつた時からである。この時、花房義質子（當時男爵）の令弟直三郎氏から交渉があつて、少し世話して呉れる樣にとのことであつた。予は岡山縣人としての責任から云つても、勿論その話に心を動かしたのであるが、それよりも更に多く予の神經を刺戟したのは、日露戰爭の意義から見て、その尊き犧牲となつた軍人の靈を慰むることが、日本國民としての義務であると考へたことで、即座に之を承諾し、聊か微力を盡したのである。

二

元來日露戰爭は東洋の平和を保全し、兼ねて我國存立の精神を明かにする爲に起つたもので、換言すれば道義立國の立場から已むを得ずして決行したものである。露國の南下策——東亞侵略策——は決して當時に始まつたことではなく、明治維新から六七十年前の寛政十年に幕吏近藤重藏が蝦夷を巡檢した時、露國は已に十字柱をエトロフに建てゝゐたと傳へられる。その翌年幕府は松前志摩守の封を割いて、函館以東を幕府に直屬せしめ、奉行、目付等を遣して夷民を安撫し、南部、津輕の二藩をして之を守備せしめたにも拘はらず、露國は文化三年、四年の兩度、兵艦數隻を以て北海に來寇し、我が要塞を焚き、器械を奪ひ、戍卒を殺傷して去つたのである。これより後も屢々我國を強要して其の私心を逞しうせんとしたが、これは單に北海に限つたことでなく、機會さへあれば東亞侵略の國是を遂行せんとし、浦鹽を根據地として維新以後は專ら滿洲、朝鮮に垂涎し、虎視耽々として南下の策を講じつゝあつたが、日露開戰の直前に至つては、その手段方法は一層露骨となり、猛烈となつて、東亞の天地は妖雲漠漠、何時如何なる事態の勃發せんも圖るべからざる狀態であつた。

是に於てか我國の識者は有らゆる智能を絞つて形勢の挽回を策し、當路有司は又、兩國協調の下に、平和的解決を試み、非文明なる戰爭は成るべく之を避くるの方針を以て、誠心誠

意、彼の反省を促したのであるが、露國は毫も之に耳を假さず、傲然として我の提案を一蹴し、好意の忠告を無視し、撤兵の約束を蹂躙し、剩つさへ、逆に增兵を敢てして、無遠慮にも挑戰の態度に出たのである。事此に至つては我國も國家の面目上、將た又東洋の平和を擔當する責任上、一大決心を爲すの已むを得ざるに立到つたのである。即ち能ふ限り慈悲忍辱の美德を守れる我國も、終に折伏降魔の利劍を揮つて、蹶起せざるを得なかつたのである。

三

當時に於ける彼我の國富、兵數等の上から云へば、我の勢力の彼に比して甚だ貧弱であつたことは、世界萬國の共に認めた處で、勝敗の數は決して逆睹すべからざるものがあつた。併し我國は道義立國の立場から、東洋平和の犧牲的精神から、上は　明治天皇を始め奉り、下は三尺の童子に至るまで、一致團結して此の國難に當るの決心をしたのである。幸にも聖明の大稜威により、悲壯なる決心が最後の勝利を占めて、東亞の天地は非道なる强者の迫害から免がれ、再び平和の榮光を仰ぐに至つたのであるが、開戰以前に於ては、我國は全く危險な地位に置かれてゐたもので、他國侵略などと云ふ野心に驅らるゝ餘裕は無かつたのである。

然るに世には往々此の內情を究めず、唯だ事後に於ける外形のみを觀て、我國を誣ふるに好戰國を以てし、冠するに侵略主義の名を以てする者がある。殊に我國の青年中にも、今猶ほ此の說を信ずる者あり、西洋人の口吻を眞似て、此の戰爭を目するに外國侵略を以てするものあるは、謬れるの甚しきもので、皮相の見解と云はんよりは、寧ろ我が立國の精神を冒瀆する者と謂はねばならぬ。

予は此の理由により、出征將卒の努力に向つて絕大なる敬意を表すると共に、戰死者の靈に對しては最善の方法を以て弔慰すべきものと信じたるが故に、花房氏の意見にも贊成したのであるが、これが機緣となつて青年會に關係し、爾後或は委員となり委員長となり、種々の問題の相談相手となつて、今日に至つてゐる次第である。

四

顧ふに當時の青年は孰れも斯の如き問題に對して熱心であつた。その然る所以は何れにあるか。手短かに云へば尙武の氣象の旺盛であつた爲であるが、この氣象は强烈な國家觀念から來て居り、國家觀念は一に道義の精神に胚胎してゐるのである。これは唯だ武道修業の青年ばかりではなく、政治、經濟、文學、宗敎、醫學、農學、工學、理學等、各方面の學生皆然りで、相共に日露戰爭の原因を講究し、我國の立場、東洋の平和、人類の福祉と云ふ點から觀察して、結局此の戰爭は已むに已まれぬ大和魂の發露なることを會得して、戰死者弔祭と云ふが如き問題をも、進んで主催するに至つたもの

で、教養あり氣概ある青年の多かつたことを立證して餘りあると思ふ。

然るに現代の青年は斯の如き氣風から段々遠ざかりつつあるのではないか。文化の發達し、思想の變遷すると共に、國家社會が常に新らしくなつて行くのは結構なことで、舊い花が散つて、新しき花が咲くと同樣、新陳代謝は天地自然の理法で、此に進歩もあり發展もある。人類が時世相の中に生活するのは當然であるから、現代青年の氣風が二三十年前の青年と違つてゐたとて、亦毫も怪しむに足らぬと云ふ說も起るであらう。併し冷靜に考へて現代青年の氣風は餘りにもモダーンではないか。彼等は唯だ新奇を喜び、浮薄に流れ、詭激な思想を以て新人の特權と爲し、禽獸の如き放縱な生活を以て最大の幸福と心得、舊例を輕んじ、故格を棄て、彝倫を無視し、道德を冷笑し、家族制度を破壞して顧みず、社會の秩序を紊り、國家の權力を呪ひ、遂には天地の眞理をも疑ふ者を生ずるに至つた。二三十年前の青年とは實に雲泥の差である。所謂新陳代謝とは果して斯の如きものを云ふのであらうか、予は其の決して然らざるを信ずるものである。

五

所謂新陳代謝とは四時の序あるが如く、已に功を成せるものが去つて、新に力ある者が之に代るの謂である。適切に云へば前に國家社會を擔當した者が去つて、新に國家社會を擔當し、之を進化せしめ、發達せしむるに足る力量手腕のある者が、來つて之に代るを謂ふのである。彼等は果して其の能力あると信じてゐるであらうか。假令彼等自身が爾か信ずるも、實際に於て果して之に任へ得るであらうか。教養なく氣概なく、高遠なる理想なく、道義に立脚した國家觀念の缺乏した者が、果して能く未來の國家社會を擔當して、益々之を隆昌の域に導き得るであらうか。これは蓋し杞憂であるかも知れぬ。予も固より其の杞憂たらんことを望む者であるが、餘りにも急激に變化した青年の氣風に對しては、頗る寒心に堪へざるものがある。

岡山縣青年會は斯の如き風潮の外に卓立して、克く五十年の團結を保ち、將來尙ほ發展の氣運を有してゐる。これは大に慶賀すべき所であるが、危險なる時代の思想は、燎原の火の如き勢を以て、社會の各方面を侵略しつゝあるから、一層よく其の步調を整へ、毅然として此等の惡風と抗し、延きて之を全國に及ぼし、次の時代を善導するの用意が必要である。予は切に之を我が青年會に囑望するの餘り、所感の一端を披瀝する次第である。

（樞密院副議長）

岡山縣人の縣人意識

久留間二郎

國民に國民意識が伴ふやう又民族に民族意識が伴ふやう、岡山縣人に岡山縣人としての意識のあることは殆んど疑のない所であつて、唯夫を自覺して居ると居ないとの違ひに過ぎない。然して國民意識民族意識と同樣、岡山縣人としての意識も亦、永い間の歷史的產物であつて、到底一朝一夕に成立するものでないこと勿論である。

以上の如き環境に育まれて成立し又從つて將來への發展の基礎となつて居る所の此岡山縣人の意識が、岡山縣青年會と云ふ一つの具體的形態になつて現はれてから、既に五十年の歲月を閱した。前述べた通り日本縣人の意識と云ふものは永い間の歷史的產物であるから、五十年の歲月は決して長しとしない。然し永遠の宇宙に在て人生が極めて僅かの期間であり乍ら決して短かくないと同樣、此五十年の歷史と云ふものも亦短かくて短かくなかつたものである。

吾々は謂はゞ岡山から東京へ來た移民である。若し吾々移民の持つ岡山縣人意識に互に齟齬するものがあつたら、夫は岡山縣人の意識とすべきものでないのであらう。此意味で岡山縣青年會が岡山縣人に致された功蹟、換言すると、岡山縣青年會が岡山縣人としての意識に統一した內容を附與されたことに就て多大の感謝を捧げねばならない。然し更に進んで、岡山縣人の意識が日本國民の國民意識延いては世界人類の意識と決して相背驅するものでないことを考へるとき、過去の歷史を以て自ら滿足せず一層の發展を期するこそ先輩の功蹟を受けた後輩の使命であるやう考へられるのである。即ち玆に岡山縣青年會の五十年の歷史を慶賀すると同時に、將來の發展を望んで已まない次第である。

（第一銀行）

教育所感

兼信學

先般帝大で教育勅語煥發四十年記念の盛大な式が行はれ田中文相や濱口首相の演說を目のあたり聽いてその當時の事が色々と思ひ浮んで來た。蓋し私が就學したのが丁度四十年前であるからである。惟ふに其頃は新文化の創建時代で政治の大變革に次いで教育も一黨一瀉の手より國家機關の支配に移り、その施設の如きも渾沌として今から考へると頗る幼稚なものであつたやうに思はれる。私は鄉里が淺口の船穗なのでその村の小學に入つたが校舍は昔の庄屋の家を用ひ淺草の觀音樣の御堂の樣に大きく柱の廻りは四五尺もある衝立を以て

間仕切りをし机腰掛は眞黑で採光は不十分尤も通風は紙障子で有つたのと戸の立てつけがよく合はないので割合に換氣は良かつたらしいが冬はその代り寒い。先生も人物としては偉大な人かあつたのであるが資格から言へば無資格者も大分有つたらしく師範出は校長一人位でその校長が一人だけ洋服を着て來られる他の先生は大方長袖に袴で體操の時など角袖に襷をかけて下駄を穿いてやつたやうに思ふ。女の先生などは一人もゐない。今日の教育で重んぜられてゐる手工、音樂等の科目は無く習字の時間には虎石に水を一杯入れウント墨を擦つて硯の眞中が凹み草紙は黑漆のやうに光澤を放つてゐるのが自慢であつた。懲罰法も奇拔なもので惡戯や喧嘩をしたものは茶碗の中に熱湯を注いだものを一定時間直立不動の姿勢で持たされる或は線香に火のついたのを持たされる甚しいのは麻の大綱で縛られ天井裏に釣り上げられるのである、それが恐ろしさに皆おとなしい。算術の時には先生が大きな煎餅や饅頭を一つ持つて來てこの問題が出來たものにはこれをやるといはれると皆一生懸命になり殆んど全員が正解者となり遂に少しづつかいでもらつたこともある。就學率も低く四ケ年課程の尋常校は卒業しても高等小學に入るものは僅かで私が玉島の高小を出たときは村長さんの倅と私と村で只二人だけで女子の如きは尋常校で終るのが普通であつた。三十年四十年經た今日でも當時の事を思ひ浮べると褒められたことも叱られたこともまだ判然と頭に殘つてゐるものもある。先生は神樣のやうに神聖に見られ其一言一行は深い感動と暗示とを與へてゐた。其後師範校や私立大學で受けた教育は知能を磨く資料としては大に役立つたが道德感化の方では誠に印象の薄いものであるやうに感ぜられる。大腦の發育が幼兒期に大方形成せられる樣に情意構成の訓練は少年期が最も效果の著しい時ではないか、鐵は熱した時に鍛錬するに限る、人間の教育は小學で大部分出來上るのでないかと思ふと小學の先生には最も人格の優秀な人を要する。小學と大學は知德の教育に補角的關係に立つやうに思はれる。復興後の東京の小學などは一校約百萬圓もかけて耐震耐火の構造であらゆる教科の學習に便利なやうにして特別學習室や優秀な教具を設備し校内に活動寫眞も蓄音機もピアノ（二臺）も一流のものを揃へて世界の勝景や名曲に接し愉快なダンスをやつてゐる。夏はプールやシャワーバスに涼を入れ冬はスチーム煖房にぬく〳〵と學習し衞生にも體育にも完全を期し教師の如きも全部本正で高等教育を受けたものも私の學校などは半數に達してゐる。昔と較べて餘程の進歩である。これ初等教育が人間教育の大なるバーセンテージを占有する特權と責任とを國家社會が認識したものではなからうかと私は思ふのである。

（東京市小川小學校長）

偶感

岡崎　旭

我が岡山縣青年會が創立ここに五十週年を迎へて盛大な記念祝賀會を擧げられましたことは會員諸公とともに欣快至極に存ずる次第であります。

由來五十年と云へば多難な人生行路にも比べるべき長い歲月であつて、我が青年會も孤々の聲を擧げてから哺育よろしきを得て健康な搖籃時代を過し、軈て青年期壯年期の活動を終へて今將に功成り名遂げんとする年齡に到達したわけであります。斯樣な纏り難い團體、卽ち、ともすれば會員相互間の感情の疎隔を來し、或は又、組織あつて機能なしと云ふやうな有名無實の存在に成り勝ちな團體が兎も角も、半世紀の久しきに亙つて目覺しい發展の一路を辿つて來たことは、一に相承け、相傳へて獻身的勞を惜まれなかつた歷代役員諸氏の熱誠と、會員各位の愛鄕心の發露に因るものであつて、私はこの機會にその純情に對して滿腔の謝意を表し、併せて青年會の今後一層の隆昌を期待するものであります。

併し乍ら、一步飜つて靜かに過ぎし跡を省みる時に、唯單に人間の一生の長短がその人の現實に此の世の空氣を呼吸した時間の多寡にあらず、その所業の大小にかかるものであるとすれば、果して我が青年會に『命人才なし』の憾がないであらうか。勿論この種類の組織會合に於ては、創立當初の目的が完全に達成せられたりや否や、されつゝありや否やを檢討する明確な標準もなく、又會の永續性それ自體、會員の增加等は雄辯にかゝる疑惑を一掃するに足るものではあるけれども、思ふに記念祝賀會なるものは、過去を顧み將來を圖るに於て初めて重要な意味をもつものであるから、以下少しく思ひついたまゝ感じたまゝを書き竝べて見度いと思ひます。

申すまでもなく我れ〳〵の社會生活は人と人との關係であつて、何人と雖も他人に依存せずには最早生活出來ない社會の狀勢であります。この際にあたつて國籍を同じうする者相集つて國家を形成し、その他、言語を同じうする者、風俗を同じうする者、思想を同じうする者等各種各樣のイデオロギーに結ばれて人々は團體を作り相互の親睦と社會生活の向上を計る。我が岡山縣青年會も亦鄕國を同じうする者の集ひであつて、我々會員は瀨戸内海と中國山脈の間、風光明媚な作備の山河に抱かれたはらからである。或は極端な自由論者は斯樣な團體を目して排他的であるとなし、又は世界人の心にあらずなどと非難攻擊するかも分らないが、恰も雛の親鳥を慕ふが如く、望鄕の一念に結ばれた者共が一堂に會し膝を交へて語るに何の無理があらう。全く何ものにも侵されない人間自然の發情であるから、我れ〳〵は單に春秋二季の總會に

止らず、日常にもお互ひに親密の度をいや增して、この會創設の本旨に徵して萬遺憾なきを期すべきは勿論、更に進んでは社會の進展、狀勢に應じて、益々その機能を發揮せしむるやう協力すべきではなからうか。

それにつけても私はかつてハーバード大學總長として有名だつた故エリオット博士の言葉を想起せずには居られない。彼が死に先だつこと二三ヶ月、ある雜誌記者の訪問に際してこれに與へた言に曰く、「若し自分が、青年に云ひ遺す事があるとすれば、斯やうにいひたい。卽ち、自己の事をあまり多く考へるな。平生考へてゐる事が自己の事ばかりである時はこれすでに過ちに陷つてゐるのである、と知れ」と。さすがに四十年間も立派に總長を勤めて、然も厭はれなかつた人の心事をよく想見し得る。然も己れの權利と云ふと何でも露骨に主張し勝ちの國に於て、己れを捨てる東洋の敎へに近いことを言つてゐるのであるから、一層の會心を覺える次第である。

況んや我れ〳〵會員は前述の如く、地域的にも同じ生國を持ち、ある點まで風俗、習慣をも共通にするに於ておやである。斯かる人々が斯かる心で相交るに於てこそ、他山の石ともなし、人格の成長、品性の陶冶も可能なわけである。換言すれば我が青年會の春風秋雨、過去五十年間の隆昌も、將又將來の發展の期待もこの點にかかつてゐると云はねばならぬ。

時局を按ずるに、今や世相紛々として落つく所を知らず、思想の無軌道、政治經濟の行詰りは青年の奮起を待つこと切なるものがある。もしそれ、身を挺して國難にあたる潑溂たる意氣を促し得て、興國の氣風澎湃として起れば、若き氣魄の躍動するところ、何ものか怖るゝに足らん哉である。

その昔、かのスパルタの母が出陣するいとし子に與へて以て戒めとした、「前進して敵を殲滅せずんば楯に乘つて歸れ」といふ訓言は、將來大いに爲すあらんとする青年諸君の味るべく且腦裏に疊むべき言葉であつて、さればこそ我れ〳〵はスパルタ騎士の世に竝びなき武勇と國運隆々として日に興つた緣由を知るのである。國家が人材の輩出を待つこの時、この意味におきまして、私は他日皇國の運命を雙肩に荷ふ諸君の一人の御自愛を祈るものであります。

いささか蕪辭を呈してお祝ひの言葉に代へます。

（臺灣銀行）

偶感

赤木朝治

今年を以て岡山縣青年會が創立五十周年を迎へられたことは誠に慶賀に堪へぬところである。此の種の會合で五十年の

沿革を有するのは蓋し稀なるものと思ふ。

岡山縣青年會がかう迄も永續し來たつたことは岡山縣人に對し否岡山縣人を批評する天下の人に覺醒を促すところのものがあることを示したものと云へる。よく人は岡山縣人は團結心に乏しいとか或は岡山縣人は利己的の人ばかりで團結力に缺けるとか云ふ批評を發つのを聞く。啻に他府縣人のみではなく岡山縣人自らもかゝる批評を是認するやうなものもある。

成程右の岡山縣人性に對する批評に一の眞理の存することは認められるが岡山縣人に團結力なしと云ふことを其の儘鵜呑みにすることは出來ないのではないか、其の證據には岡山縣青年會は五十年も永續して來た。而も單に永く續いたと云ふ丈けではなくより一致し和合し團結して今日迄繼續したのである。一致和合して團結して居ればこそ本會は五十年も續いたのではないか。

してみると岡山縣人は團結力に缺くと云ふことは出來ない。事情に依つて人に依つて團結することは少しも他に劣るところは無いのである否優れりと思ふ。唯從來岡山縣人が團結力なしと云はれて來たのは山口縣人や鹿兒島縣人に比較しての言であり、或は岡山縣人の理性的なる反面を批評して言を換へてかく言つたのではあるまいかと考へる。

兎もあれ縣人の團結は鄉土愛となり再轉して日本國民の團結となり、愛國心となるのである。團結力の强きところ其の團體としての力が個人の力の集合に倍加するものがあることは申す迄もない。此の意味に於て岡山縣人は先づ鄉土愛の下に團結すべしと叫ばざるを得ない。

岡山縣青年會が將來永く此の鄉土愛の下に團結力を示すものとして會運隆昌ならんことを希ふものである。

（內務省衞生局長）

（カット細木原青起氏）

遊學指針

現在普通會員約三千名を有する本會は、今後帝都に遊學される人々に對して、又々の父兄の方達に對して、私達の學んでゐる學校のことどもを御紹介してみたならば、あまりに多い帝都の學校を選擇されるにあたり、若干の御便宜を與へる所あらんかと、會員が各々の學園について記してみたのである。會員が在學してゐる全部を御紹介することの出來なかつたのは、紙面の都合上であつて別に他意あるのではない。御了承を乞ふ次第である。(三浦幹事)

(カツト妹尾壽信氏)

東京學校一覽（高等專問學校以上）

◇大學

東京帝國大學　東京市本郷區本富士町
東京商科大學　東京市外國立
早稲田大學　東京市牛込區早稲田鶴巻町
慶應義塾大學　東京市芝區三田（但シ醫學部四谷區信濃町）
明治大學　東京市神田區駿河臺
中央大學　東京市神田區南甲賀町
日本大學　東京市神田町三崎町三丁目
法政大學　東京市麹町區富士見町四丁目
專修大學　東京市神田區今川小路二丁目
國學院大學　東京府豐多摩郡澁谷町下澁谷氷川裏

立教大學　東京府北豐島郡西巣鴨町池袋
拓殖大學　東京市小石川區茗荷谷町
東京農業大學　東京府豐多摩郡澁谷町常盤松御料地內
東京慈惠會醫科大學　東京市芝區愛宕町二丁目
日本醫科大學　東京市本郷區駒込千駄木町五九
立正大學　東京府荏原郡大崎町
駒澤大學　東京府荏原郡駒澤町
大正大學　東京府北豐島郡西巣鴨町字庚申塚
東京工業大學　東京府荏原郡碑衾町大岡山
東京文理科大學　東京市小石川區大塚窪町

◇高等學校

第一高等學校　東京市本郷區向ヶ岡彌生町
東京府立高等學校　東京市麹町區永田町二丁目
東京高等學校（高等科、尋常科）　東京府豐多摩郡中野町雜色
學習院（高等科、中等科、初等科）　東京府北豐島郡高田町（但シ初等科東京市四谷町仲町）
武藏高等學校（高等科、尋常科）　東京府北豐島郡中新井村
成蹊高等學校（高等科、尋常科）　東京府北多摩郡武藏野村吉祥寺
成城高等學校　東京府北多摩郡砧村成城學園內
第一早稲田高等學院　東京市牛込區戸山町
第二早稲田高等學院　東京府豐多摩郡戸塚町
青山學院高等學部　東京府豐多摩郡澁谷町青山南町七丁目
明治學院高等學部　東京市芝區白金今里町四二
東京學院高等學部　東京市牛込區左內町二五

◇陸海軍の學校

陸軍大學校　東京市赤坂區青山北町
陸軍士官學校　東京市牛込區市ヶ谷本村町
東京陸軍幼年學校　東京市牛込區戸山町
陸軍砲工學校　東京市牛込區若松町
陸軍經理學校　東京市牛込區河田町
陸軍軍醫學校　東京市牛込區戸山町一
陸軍獸醫學校　東京府荏原郡世田ヶ谷町
陸軍戸山學校　東京市牛込區戸山町
陸軍工科學校　東京市小石川區小石川町
憲兵練習所　東京市麹町區大手町一丁目
海軍大學校　東京市京橋區築地三丁目
海軍經理學校　東京市京橋區築地四丁目
海軍軍醫學校　東京市京橋區築地

◇文學宗教の學校

東洋大學　東京市小石川區原町
上智大學　東京市麹町區紀尾井町

青山學院神學部　東京府豐多摩郡澁谷町青山南町七丁目
明治學院神學部　東京府豐多摩郡淀橋町角筈一〇〇
東京學院神學部　東京市牛込區市ヶ谷左内町二九
聖公會神學院　東京府北豐島郡西巢鴨町池袋一六一二

◇美術音樂の學校

東京美術學校　東京市下谷區上野公園內
日本美術學校　東京府豐多摩郡戸塚町下戸塚荒井山
川端畫學校　東京市小石川區下富坂町一九
大平洋畫會研究所　東京市下谷區谷中眞島町一
葵橋洋畫研究所　東京市赤坂區溜池町三
肖像畫學校　東京市本郷區元町一丁目三
東京音樂學校　東京市下谷區上野公園內
東洋音樂學校　東京府北豐島郡高田町雜司ヶ谷六〇〇

◇醫學藥學の學校

日本大學專門部醫學科　東京市神田區駿河臺北甲賀町
日本醫學專門學校　東京市本郷區駒込千駄木町五九
東京醫學專門學校　東京市外大久保町東大久保
昭和醫學專門學校　東京府荏原町中延一〇一八
日本齒科醫學專門學校　東京市麴町區富士見町六丁目
東京齒科醫學專門學校　東京市神田區三崎町二丁目九
東京高等齒科醫學校　東京市神田區三崎町一丁目
日本大學專門部齒科　東京府豐多摩郡淀橋町角筈一〇〇
東京學專門學校　東京市牛込區市ヶ谷左内町二九
明治藥學專門學校　東京府北豐島郡西巢鴨町池袋一六一二

◇教員養成の學校

東京高等師範學校　東京市小石川區大塚窪町
商業
工業
農業　教員養成所　東京府荏原郡碑衾町大岡山東京高等工業學校內
第一臨時教員養成所　東京府荏原郡目黑町大字上目黑
東京市小石川區大塚窪町東京高等師範學校內
第四臨時教員養成所　東京市下谷區上野公園東京音樂學校內
東京府青山師範學校　東京市赤坂區青山北町五丁目
東京府豐島師範學校　東京府北豐島郡西巢鴨町池袋
東京市教員養成所　東京市下谷區上野公園自治館內
國士館專門學校　東京府荏原郡世田ヶ谷町松蔭祠畔
大東文化學院　東京市麴町區富士見町六丁目
二松學舍專門學校　東京市麴町區一番町四六
東京物理學校　東京市牛込區神樂町二丁目二四
東京府立農業補習學校教育養成所　東京府西多摩郡青梅町
早稲田大學高等師範部　東京市牛込區早稲田

日本大學高等師範部　東京市神田區三崎町三丁目
日本體育會體操學校　東京府荏原郡大井町
法政大學高等師範部　東京市麴町區富士見町四丁目
國學院大學高等師範科　東京府豐多摩郡澁谷町下澁谷氷川裏
青山學院高等學部英語師範科　東京府豐多摩郡澁谷町青山南町七丁目
明治學院高等學部　東京市芝區白金今里町四二
東京美術學校　東京市下谷區上野公園內
東京高等音樂學院　東京市四谷區番衆町三五
東京音樂學校　東京市下谷區上野公園內
東洋音樂學校　東京府北豐島郡高田町雜司ヶ谷六〇〇
武藏野音樂學校　東京府北豐島郡下練馬村
東京外國語學校　東京市麴町區竹平町一
東京物理學校高等師範科　東京市牛込區神樂町二丁目二四
東京聾唖學校師範科　東京市小石川區指ヶ谷町七七
帝國音樂學校　東京府荏原郡世田ヶ谷町
東京盲學校師範科　東京市小石川區雜司ヶ谷町一二〇

◇農業水產の學校

東京高等蠶絲學校　東京府北豐島郡瀧野川町西ヶ原
水產講習所　東京市深川區越中島
千葉高等園藝學校　千葉縣東葛飾郡松戸町
東京府立園藝學校　東京府荏原郡駒澤町
東京府立農林學校　東京府西多摩郡青梅町
東京府立農藝學校　東京府豐多摩郡井荻町
東京府立府中農蠶學校　東京府北多摩郡府中町
東京府豐島師範學校併設農業補習學校　東京府荏原郡松澤村
麻布獸醫畜產學校　東京市麻布區新堀町一一
日本獸醫學校　東京府荏原郡目黑町下目黑
東京獸醫學校　東京府荏原郡駒澤町
東京高等造園學校　東京府荏原郡目黑町上目黑

◇工業學校

東京高等工業學校　東京府荏原郡碑衾町大岡山
東京高等工藝學校　東京市芝區新芝町
帝國高等工業學校　東京市神田區三崎町一丁目三
東京寫眞專門學校　東京府豐多摩郡代々幡町
日本大學高等工學校　東京市神田區駿河臺北甲賀町
電機學校　東京市神田區錦町三丁目一七
攻玉社高等工學校　東京府荏原郡大崎町桐ヶ谷

◇商業學校

高千穗高等商業學校　東京府豐多摩郡和田堀內村
大倉高等商業學校　東京市赤坂區葵町三